

目次

序論	1
第1章 現代中国語の限定語に関する先行研究	3
1.0 はじめに	3
1.1 現代中国語の限定語に関する概観的な先行研究	3
1.1.1 胡裕樹主編《現代汉语》(1979)の記述	3
1.1.2 朱德熙(1982)の記述	4
1.1.3 邢福义(1996)の記述	6
1.1.4 马真(2001)の記述	8
1.2 現代中国語の限定語の分類に関する先行研究	9
1.2.1 現代中国語の限定語の分類についての諸説	10
1.2.2 本論文の捉え方	11
1.3 現代中国語の限定語の多義構造に関する先行研究	12
1.3.1 現代中国語の限定語の多義構造についての諸説	12
1.3.2 本論文の捉え方	14
1.4 現代中国語の限定語の意味指示に関する先行研究	14
1.4.1 現代中国語の限定語の意味指示についての諸説	14
1.4.2 本論文の捉え方	16
1.5 本章の結び	16
第2章 研究方法	17
2.0 はじめに	17
2.1 命題論理と述語論理	17
2.1.1 命題	17
2.1.2 命題論理	17
2.1.3 述語論理	19
2.1.4 命題と可能世界	20
2.2 モデルとモデル理論	22
2.2.1 モデルと意味解釈	22
2.2.2 モデルと意味解釈の実例	24
2.2.2.1 論理言語 L_1 の統語部分	24
2.2.2.2 中国語の表現 C_1	24

2.2.2.3 翻訳	25
2.2.2.4 意味解釈	27
2.3 内包と外延	28
2.4 本章の結び	30
第3章 現代中国語の限定語の意味類型と論理分析	31
3.0 はじめに	31
3.1 分析の理論的根拠——「ものの結合の原理」について	32
3.2 一般性限定語の意味と論理分析	34
3.2.1 数量を表す限定語の論理分析	34
3.2.2 指示を表す限定語の論理分析	38
3.2.3 場所・時間を表す限定語の論理分析	42
3.2.4 属性を表す限定語の論理分析	44
3.2.4.1 性質・状態を表す限定語の論理分析	45
3.2.4.2 行為を表す限定語の論理分析	47
3.2.4.3 断定を表す限定語の論理分析	51
3.3 所属性限定語の意味と論理分析	54
3.3.1 典型的な所属性限定語の論理分析	55
3.3.2 特殊な所属性限定語の論理分析	58
3.3.2.1 “张三的原告”類	59
3.3.2.2 “他的篮球打得好”類	61
3.3.2.3 “我来帮你的忙”類	64
3.4 同一性限定語の意味と論理分析	68
3.5 本章の結び	70
第4章 現代中国語の限定語による多義構造と論理分析	72
4.0 はじめに	72
4.1 現代中国語の多義構造に関する考察	72
4.1.1 朱德熙(1980)の記述	72
4.1.2 林祥楣主编《现代汉语》(1991)の記述	74
4.1.3 邵敬敏(1999)の記述	74
4.1.4 朱华丽(2009)の記述	75
4.1.5 本論文の捉え方	76
4.2 現代中国語の限定語による多義構造の論理分析	76
4.2.1 文法関係による多義構造	76

4.2.1.1 動詞＋名詞 ₁ ＋“的”＋名詞 ₂ ·····	76
4.2.1.2 “对”＋名詞 ₁ ＋“的”＋名詞 ₂ /動詞·····	82
4.2.1.3 名詞 ₁ ＋“和”＋名詞 ₂ ＋“的”＋名詞 ₃ ·····	91
4.2.1.4 数詞＋量詞＋名詞 ₁ ＋“的”＋名詞 ₂ ·····	96
4.2.2 意味関係による多義構造·····	101
4.3 本章の結び·····	110
第5章 現代中国語の限定語の意味指示と論理分析·····	111
5.0 はじめに·····	111
5.1 意味指示とは何か·····	111
5.1.1 意味指示の理論背景·····	111
5.1.2 意味指示の定義·····	111
5.2 意味指示に関する先行研究·····	112
5.2.1 文炼(1960)による研究·····	112
5.2.2 吕叔湘(1979)による研究·····	112
5.2.3 刘宁生(1984)による研究·····	113
5.2.4 陆俭明(2005)による研究·····	113
5.3 現代中国語の限定語の意味指示に関する先行研究·····	113
5.3.1 峻峡(1990)による研究·····	114
5.3.2 丁凌云(1999)による研究·····	114
5.3.3 王金鑫(2004)による研究·····	114
5.3.4 邵敬敏编(2007)による研究·····	115
5.3.5 蒋静忠(2008)による研究·····	115
5.3.6 本論文の捉え方·····	115
5.4 現代中国語の限定語の意味指示の論理分析·····	116
5.4.1 限定語の直接的な意味指示の論理分析·····	116
5.4.2 限定語の間接的な意味指示の論理分析·····	120
5.4.2.1 主語を意味指示する種類·····	121
5.4.2.2 目的語を意味指示する種類·····	126
5.4.2.3 命題を意味指示する種類·····	132
5.4.2.4 文外の成分を意味指示する種類·····	136
5.4.2.5 まとめ·····	141
5.5 本章の結び·····	142
第6章 現代日本語の限定語の論理構造の解明·····	143
6.0 はじめに·····	143

6.1 現代日本語の限定語に関する先行研究	143
6.1.1 奥津敬一郎(1974)による研究	143
6.1.2 寺村秀夫(1975-1978)による研究	144
6.1.3 高橋太郎(1979)による研究	145
6.1.4 大島資生(2003)による研究	146
6.1.5 西山佑司(2003a)による研究	147
6.1.6 本論文の捉え方	148
6.2 現代日本語における限定語の意味と論理構造	148
6.2.1 内の関係の限定語の意味と論理構造	148
6.2.2 外の関係の限定語の意味と論理構造	153
6.2.3 まとめ	157
6.3 現代日本語の限定語による多義構造と論理分析	157
6.3.1 「限定語+名詞 ₁ +の+名詞 ₂ 」の多義構造	158
6.3.2 「名詞 ₁ +と+名詞 ₂ +の+名詞 ₃ 」の多義構造	163
6.3.3 まとめ	169
6.4 本章の結び	169
結び	170
表一覧	173
図一覧	173
注釈	175
参考文献	178

序論

1. 本研究の目的

限定語は名詞性定中構造^(注 1)にある修飾成分であり、現代中国語において重要な言語表現形式の一つである。二十世紀八十年代から今日に至るまで、限定語についての研究は盛んに行われている。特に、二十世紀末期に限定語に関する研究はピークに達し、多くの論文が現れた。その中では、主に形式的な特徴に基づく分類や使用条件や機能などの観点からなされたものが多い。たとえば、限定語と中心語の統語関係による分類についての論文や、限定語と“的”の関係についての論文や、多重限定語の語順についての論文、さらに限定語の語用条件についての論文などがある。これらの研究では、限定語の統語的特徴や具体的な機能と分類は明らかになっているが、意味上ではどのような意味構造が存在するか、必ずしも明確になっていない。

そこで、本論文では先人の研究を踏まえて、現代中国語の限定語を意味の角度から分析し、形式意味論の演繹的分析方法を用いて、限定語の意味と論理構造を明らかにする。さらに、この形式意味論の分析方法を現代日本語の限定語に適用し、現代日本語の限定語の意味と論理構造も明示的に示す。

2. 研究方法

中日両言語における限定語に対する研究の方法は多種多様であるが、特に、統語論と語用論の立場からの研究が主である。本論文は明示的に文の意味を解明するために、形式意味論というより客観的な研究方法を採用することにする。

形式意味論では、一般に自然言語の表現を直接解釈するのではなく、いったん仲介の形式言語の表現に翻訳し、それを意味規則に従って解釈するという方法が採用される。本論文は明示的な表記手段とする「論理構造」についての基本的な知識や概念を導入する。その上で、限定語について、具体例を論理的な方法で分析し、意味分析の過程を明示的に記述するとともに、限定語の意味と論理構造を解明することにする。

3. 論文構成と各章の内容

本論文は以下の六章によって構成されている。

第1章 現代中国語の限定語に関する先行研究

第2章 研究方法

第3章 現代中国語の限定語の意味類型と論理分析

第4章 現代中国語の限定語による多義構造と論理分析

第5章 現代中国語の限定語の意味指示と論理分析

第6章 現代日本語の限定語の論理構造の解明

第1章では、まず、基礎知識として朱德熙(1982)や马真(2001)などの論文を取り上

げ、限定語の定義、配列順序、限定語になれる語句など限定語の全貌と関わる内容について述べている。次に、異なる視点から行う限定語に対する多角的な研究に分けて紹介する。

第2章では、本論で使用される研究方法、即ち、形式意味論の考え方と方法について述べている。形式意味論は「構成性原理」に基づき、命題論理、述語論理などの形式言語を用いる。本章では、まず、形式意味論の基礎的な概念を紹介する。さらに、中国語の例文を用いて、モデル理論と意味解釈のプロセスを示す。最後に、内包と外延についても簡単に説明する。

第3章では、現代中国語の限定語の意味類型について検討する。本章では、丁声树等(1961)の分類方法をもとに、朱德熙(1982)の提出した「準限定語」を「特殊な所属性限定語」として捉え、現代中国語の限定語の意味類型を再考察する。分析する際に、形式意味論の演繹的な手法を用い、具体例をあげながら、論理式を用いて、筆者が提出する各種類の限定語と中心語の間の意味関係の分析に適用できる方法を探し出し、すべての「定中構造」の意味関係を明示できる基本的な論理構造を解明することにする。

第4章では、現代中国語の限定語による多義構造について考察する。本章では、朱德熙(1980)、邵敬敏編(2007)、朱华丽(2009)などの多義構造に関する研究を総合して参考にしながら、現代中国語における限定語による多義構造をいくつかのタイプに分ける。さらに、論理式を用いて詳しく分析し、現代中国語の限定語の多義構造の論理構造を明示的に示す。

第5章では、現代中国語の限定語の意味指示について論じる。「意味指示」理論は1980年代に生まれた現代中国語の独特な言語分析理論である。本章では、現代中国語における限定語の意味指示について再検討する。限定語はいったいどのような文成分を意味指示するか、この疑問を解明するために、現代中国語の限定語の意味指示を「直接的な意味指示」と「間接的な意味指示」の二種に分ける。そして、具体例を挙げながら、命題論理および述語論理の手法を用いて、現代中国語の限定語の意味指示に関する論理構造を明示的に示し、その意味を明晰化する。

最後の第6章は現代日本語の限定語についての研究である。この章では、まず現代日本語における限定語についての先行研究を紹介する。次に、前の各章で現代中国語の限定語を考察した際に用いた形式意味論の分析方法を「現代日本語の限定語」の研究に応用し、現代日本語における限定語の意味と論理構造を詳しく考察する。

第1章 現代中国語の限定語に関する先行研究

1.0 はじめに

限定語は現代中国語文法研究の一つの重要なカテゴリーであり、多くの研究者に注目され、異なる視点から様々な観点が提出されている。本章は、今までの研究成果から、現代中国語の限定語に対する研究を限定語の全貌がわかる概観的研究と、異なる視点から行う限定語に対する多角的な研究に分けて紹介する。

1.1 現代中国語の限定語に関する概観的な先行研究

本節では、現代中国語の限定語についての概観的な先行研究として、胡裕樹主编(1979)、朱德熙(1982)、邢福义(1996)、马真(2001)を取り上げる。これらの研究は限定語の定義、配列順序、限定語になれる語句など限定語の全貌と関わる内容について述べている。

1.1.1 胡裕樹主编《现代汉语》(1979)の記述

胡裕樹主编(1979: 287-300)は、まず、限定語の定義と限定語になれる語句について、「名詞が主語と目的語になる場合、その前に置く成分は限定語である。また、動詞や形容詞が主語或は目的語になる場合、その前に置く成分は状況語であることもあるし、限定語であることもある」、「語やフレーズの他に、前置詞構造、量詞構造、方位構造なども限定語になることができる。通常、副詞は限定語になることができない」と述べている。

次に、限定語のマーカーである“的”の使い方についても簡単に論じた。“的”を使うか否かにより、その連語の統語構造が異なっている。例えば、

- (1) (名+名): 父亲母亲 → 父亲的母亲 (連合関係 → 定中関係)
(父と母 → 父の母) (注2)
- (動+名): 写文章 → 写的文章 (動目関係 → 定中関係)
(文章を書く → 書いた文章)
- (代+名): 我们红军 → 我们的红军 (同格関係 → 定中関係)
(我々紅軍 → 私達の紅軍)

しかし、次のように、“的”を使うか否かにかかわらず、すべてが定中関係である状況がある。

- (2) (名+名): 历史事实 → 历史的事实(歴史の事実)
- (動+名): 斗争经验 → 斗争的经验(闘争の経験)
- (代+名): 他哥哥 → 他的哥哥(彼の兄)

ただし、“的”を伴わない場合、その連語全体の結合が緊密であるのに対し、“的”を使う場合、限定語の修飾性がより鮮明になる。

最後に、一つの中心語の前に複数の限定語が同時に存在することについて論じている。複数の限定語は単純に並列されるわけではなく、それぞれが中心語を修飾する。一方、中心語に近ければ近いほど中心語との関係が緊密になる。この違いは配列の順によって表わされるので、複数の限定語の配列順序に注意しなければならない。具体的には、以下の規則を提出している。(3b)と(4b)の例は成立しない。

①量詞構造が形容詞の前にある。例えば、

(3)a. 一位亲爱的朋友^(注3) (一人の親しい友達)

*b. 亲爱的一位朋友

(胡裕树主编 1979 : 296)

②所属関係を表す人称代詞あるいは名詞が量詞構造の前にある。例えば、

(4)a. 我的一位朋友 (私の一人の友達)

*b. 一位我的朋友

(胡裕树主编 1979 : 296)

③限定語の位置が違えば、誤解が発生する。例えば、

(5) 七十六岁的康有为的女儿康同璧……。 (康有为が 76 歳/娘の康同璧が 76 歳)

(胡裕树主编 1979 : 297)

1.1.2 朱德熙(1982)の記述

朱德熙(1982)の第十章は、まず限定語の定義について、「一般に、体詞性の中心語の前の修飾語は限定語であり、述詞性の中心語の前の修飾語は状況語である。……中心語の性質だけによって限定語と状況語を区別することはできない。中心語のほかにも、修飾語自身の性質や限定語－中心語構造(以下は「定中構造」と略称する)全体の置かれている文法的な位置が考慮されなければならない」と述べている。

次に、限定語と限定語マーカー“的”の関係について詳しく考察した。その概要を以下の<表 1-1>のようにまとめる。

限定語になる品詞	条件	例文
人称代詞	①人称代詞が所属限定語になり、親族呼称名詞が中心語になる場合、一般に“的”は用いられない。	①我哥哥(私の兄) 他父亲(彼の父親)
	②人称代詞が所属限定語になり、一般名詞が中心語になる場合、単独での発話であれば、“的”が用いられる。文中に用いられる場合には“的”を使わなくてもよい。	②a. 你的眼镜 (君のメガネ) b. 你眼镜呢? (君のメガネは?)

名詞	名詞が所属性限定語になる場合、単独での発話であれば、“的”を使い、文中にある場合には“的”を使わなくてもよい。	a. 孩子的衣服(子供の服) b. 把孩子衣服撕破了。 (子供の服を引き裂いてしまった。)
“这/那/哪”+量詞	“的”を使わない場合は指示を表す。“的”が加わると所属関係を表す。	a. 哪个孩子(どの子供) b. 哪个的孩子(どれの子供)
名詞/属性形容詞	① “的”を使わない形では、限定語と中心語が意味上ひとつのまとまりになる。“的”を使う形では、限定語と中心語が意味上の独立性が比較的高く保たれている。	①a. 旧书(古本) b. 旧的书(古い本)
	②限定語が名詞である場合、“的”を使わない形は属性を表す。“的”を使う形は所属関係を表す。	②a. 他有很多中国朋友 (彼には中国人の友達がたくさんいる) b. 巴基斯坦是中国的朋友 (パキスタンは中国の友達である)
	③名詞性成分が“的”を伴って限定語になる場合でも属性を表すことがある。	③ 黄头发的孩子 (金髪の子供)

(朱德熙 1982 : 142－144 参照)

〈表 1-1 : 朱德熙(1982)による限定語と限定語マーカー“的”の関係〉

続いて、朱德熙(1982)は同格性定中構造について、次の用例を挙げて説明した。

- (6)a. “人”字、广东省(“人”という字、広東省)
- b. 我李達、咱们中文系(私李達、我々中国語学科)
- c. 这本书、两块钱(この本、二元のお金)
- d. 我的眼镜、新来的老师(私のメガネ、新しく来た先生)

(朱德熙 1982 : 144)

同格性定中構造の特徴は限定語が定中構造全体を指示代替できるという点である。同格性定中構造の中にある限定語を同格性限定語と呼ぶ。aとdのタイプでは、限定語と中心語の間に“这/那+量詞”を挿入することができる。bのタイプでは、限定語と中心語の間に“的”を挿入することができるが、挿入すると意味が変わる。同格性定中構造の限定語の部分が定中構造全体を代替することができる。

さらに、特殊な限定語として、「準限定語」を提出した。準限定語は以下の三つのタイプに分けられた。

- (7) a. 张三的原告, 李四的被告 (張三の原告、李四の被告)
b. 他的籃球打得好 (彼のバスケットボールがうまくやった)
c. 我来帮你的忙 (私は君に手伝ってあげる)

(朱德熙 1982 : 146)

これらの限定語はすべて人間を表す名詞あるいは人称代詞から構成され、本来ならば所属関係を表すべきであるが、この三つのタイプに現れる限定語はいずれも所属関係を表すものではないので、典型的な限定語と区分するために、「準限定語 (“准定语”)」と呼ぶことにする。

最後に、複数の限定語の語順について、次の二点にまとめた。

- I. “的”を伴う限定語は“的”を伴わない限定語よりも前に置かれる。^(注4)
II. 複数の限定語がいずれも“的”を伴わない場合、一般には、①所有性限定語、②数量詞、③形容詞、④名詞といった順序になる。例えば、

- (8) 他₁ 那件₂ 新₃ 羊皮₄ 大衣 (彼のあの新しい羊の皮のコート)

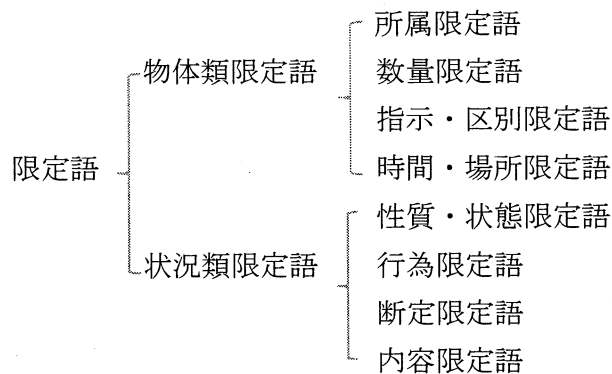
(朱德熙 1982 : 151)

1.1.3 邢福义(1996)の記述

邢福义(1996 : 88-98)は現代中国語の限定語について、限定語の意味類型、複数の限定語の配列順序、限定語と他の文成分の関係及び限定語と中心語の位置変化の四つの面から考察している。

< I > 限定語の意味類型

まず、邢福义(1996)は限定語と中心語の間の意味関係により、限定語の意味類型を「物体類限定語 (“物体类定语”)」と「状況類限定語 (“状况类定语”)」の二種類に分類している。さらに、それぞれの意味類型をいくつかの下位類に分けている。具体的な意味類型の分類を次の< 図 1-1 >のように示す。

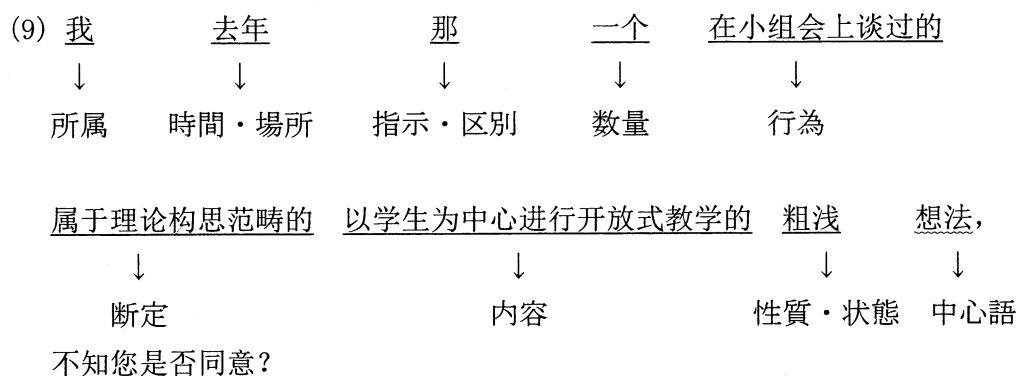


(邢福义 1996 : 88-98 参照)

〈図 1-1 : 邢福义(1996)による限定語の意味類型の分類〉

〈Ⅱ〉複数の限定語の配列順序

複数の意味類型の限定語が同時に一つの中心語の前に現れる場合、限定語の間に配列順序の問題が生ずる。その時、複数の限定語の配列順序は、「所属—時間・場所—指示・区別—数量—行為—断定—内容—性質・状態」のようになる。例えば、



(邢福义 1996 : 94)

〈Ⅲ〉限定語と他の文成分の関係

まず、限定語は述語に転換することができる。名詞の前に置き、その名詞を修飾する場合は限定語であるが、名詞の後に置いて名詞を説明するときは述語になる。例えば、

- (10) a. 四斤白菜 → 白菜四斤
 (四斤の白菜 → 白菜は四斤である)
 b. 海南的水果 → (这)水果, 海南的
 (海南の果物 → (この)果物は、海南のものである)

(邢福义 1996 : 96)

次に、文頭に現れた所属限定語は、文の主語に転換することができる。例えば、

- (11) 这家伙胆子真大! → 这家伙胆子真大!
(こいつの度胸がいい! → こいつは大胆である!)

(邢福义 1996: 96)

〈IV〉 限定語と中心語の位置変化

限定語が前に、中心語が後に置かれるという位置配列は一般的であるが、時には、“中心語＋限定語”のような位置変異がある。例えば、

- (12) a. 击毁军车五辆(軍用車を五台破壊した)
b. 打死敌人二十多名(敵を 20 人余りぶち殺した)

(邢福义 1996: 97)

限定語を中心語の後に後置することより、限定語の表す内容を強調することができる。後置する限定語を自由に中心語の前に置くこともできる。また、後置できる限定語は数量限定語に限る。ただし、数量を表す成分が主語と緊密に出現する場合、後置する限定語ではなくて、述語とみなす。例えば

- (13) a. 肥皂两块(石鹼が二個ある)
b. 猪肉三斤(豚肉が三斤ある)

(邢福义 1996: 98)

1.1.4 马真(2001)の記述

马真(2001:86-104)は、「名詞性限定語—中心語フレーズにある修飾語は限定語である」のように限定語の定義をした。具体的な用例として以下のようなものがある。

- (14) a. 纸飞机(紙の飛行機)
b. 当代文学(当世の文学)
c. 我们的老师(私達の先生)

- (15) a. 晚上有文艺演出(夜、演芸の公演がある)
b. 我们都要有这种心理准备(私達はこのような心理的準備を持つべきだ)

- (16) a. 这真是年青一代的幸福(これは若者の幸せである)
b. 科技的发达推动了经济的发展(科学技術の発達は經濟の發展を促進した)

(马真 2001:86-87)

通常、(14)のような名詞性語句の前に現われる修飾語は限定語であるが、(15)のような動詞性語句の前に現れる修飾語、または(16)のような形容詞性語句の前に現われ

る修飾語も限定語である。なぜなら、(15)と(16)のような「名詞＋動詞」、「名詞＋形容詞」の定中構造が文の主語あるいは目的語になるので、明らかに名詞性を得るからである。

また、马真(2001)は限定語になれる語句について詳しく論じた。それを表で示すと以下の<表 1-2>のようになる。

限定語になれる語句	用例	備考
形容詞	新(的)衣服 正确(的)意见	
状態詞	雪白的棉花 高高的楼房	通常は“的”を伴う。
名詞	木头(的)房子 群众(的)力量 小王的笔	名詞が名詞を修飾する時、“的”を使うかどうかによって意味が異なる場合もある。例えば、“木头人”は気の利かない人間を表すが、“木头的人”は木で作られた人形の意味である。
代詞	我(的)哥哥 谁的衣服	
数量詞	三本书	
動詞	学习(的)资料 调查(的)对象 建设(的)项目	“的”を伴うことが一般的である。時には“的”を取り除くと動目構造になることがある。
各種のフレーズ	衣服和皮鞋的价钱（並列フレーズ） 学生宿舍的电灯（定中フレーズ） 卖花儿的姑娘（動目フレーズ） 写好的信（動補フレーズ） 妈妈买的衣服（主述フレーズ） 对考试的态度（前置詞フレーズ）	基本的には各種類のフレーズが限定語になれる。通常、限定語の後に“的”が必要である。

（马真 2001：90-92 参照）

<表 1-2：马真(2001)による限定語になれる語句>

1.2 現代中国語の限定語の分類に関する先行研究

現代中国語の限定語の分類については、各研究者の注目する角度により、分類も違っている。各研究者の意見が食い違い、統一的な見解はあらわれていない。今までの

研究では、中国語の限定語を二種類、三種類などに分ける分類法が見られる。まず、いくつかの代表的な分類法を紹介しておこう。

1.2.1 現代中国語の限定語の分類についての諸説

呂叔湘(1982[1956])は中心語を“端語”と呼び、限定語を“加語”と呼んでいる。そして、“加語”は「形容性限定語(“形容性加語”）」、「所属性限定語(“領属性加語”）」と「同一性限定語(“同一性加語”）」の三つのタイプがあると述べている。具体的な例としては、“伟大的事业(形容性限定語)”、“我的事业(所属性限定語)”、“建国的事业(同一性限定語)”がある。

丁声树等(1961)は限定語を所属性限定語、同一性限定語と一般性限定語の三種類に分けると述べている。一般性限定語は事物の数量、事物の存在する場所、事物と関わる時間、事物の属性などを表す限定語である。例えば、“一桌子的菜、马路旁边的树、以往的记录、全新的房子”などがこの種類の限定語の用例である。所属性限定語は所属関係を表す限定語である。通常、名詞と代詞だけが所属性限定語になることができる。例えば、“老师的书、我们的学校”など。同一性限定語は、限定語と中心語の間の同一関係を表す限定語である。例えば、“两公婆吵架的小事”。中心語“小事”は“两公婆吵架”のことであり、中心語と限定語は同一関係を持っている。

朱德熙(1984)は、限定語と中心語との間の意味関係によって、限定語を限定性限定語と描写性限定語の二種類に分けると述べている。限定性限定語の働きは、ある性質や特徴を分類の根拠として中心語の表す事物を分類する。つまり、いくつかの事物の中で、「これ」であって「あれ」ではないということを明示する区別機能である。名詞、代詞、形容詞、動詞、数量詞からなる限定語は限定性限定語である。また、描写性限定語は中心語の表す事物の状況を描写するだけである。形容詞の重疊式と補助成分の付いた形容詞は描写性限定語である。例えば、“红红的脸，平平常常的事，弯弯的眉毛”。描写性限定語には、一定の感情を含ませる描写の働きがある。他に、房玉清(1992)と刘月华等(2001)も朱德熙(1984)と同じように、限定語は限定性限定語と描写性限定語の二種類に分けられると主張している。

王艾录(1985)は、限定語は区別性の限定語と非区別性の限定語の二つのタイプに分けられると指摘している。区別性の限定語とは、区別の作用を持つ限定語であり、ある事物を他の同類の事物と区分できる働きがある。例えば、“白布—黑布，我的书—你的书”。非区別性の限定語は、区別の作用を持たない限定語である。

钱乃荣主编(1995)は、限定語と中心語との間の意味関係から限定語を「区別性限定語(“区别性定语”）」、「描写性限定語(“描写性定语”）」と「呼称性限定語(“称谓性定语”）」の三種に分けた。呼称性限定語はある事物の呼称や類別名を構成する。例えば、“彩色宽银幕电影、当代文艺思想”。区別性限定語は所属、時間、場所、範囲、数量などの面から中心語を説明し、「どれであるか」を明示する。例えば、“他们的教室、今天的事情、河边的桥上、两条长桌”などの例がある。描写性限定語は性質、状態、特徴、用途などの面から中心語を記述し、「どのようなであるか」を明示する。例えば、

“漂亮的衣服、纸做的箱子、治感冒的药片”などがある。

邢福义(1996)は限定語の表す意味により、現代中国語の限定語を「物体類限定語(“物体类定语”)」と「状況類限定語(“状况类定语”)」の二種類に分けた。さらに、物体類限定語を「所属限定語(“领属定语”)」、「数量限定語(“数量定语”)」、「指示・区別限定語(“指别定语”)」、「時間・場所限定語(“时地定语”)」に分類した。状況類限定語を「性質・状態限定語(“性状定语”)」、「行為限定語(“行为定语”)」、「断定限定語(“断事定语”)」、「内容限定語(“涵义定语”)」の四種類に分類した。ただし、邢福义(1996)は所属限定語について述べる時に、「他的诸葛亮演得很好、今天是你的主席、你千万别打我的主意」のような例を挙げ、この三つの例にある“他的”、“你的”、“我的”は所属限定語の形式であるが、実際には所属限定語の意味を表していないと指摘し、このような限定語を「偽性の所属限定語(“假领属定语”)」と呼ぶ。

1.2.2 本論文の捉え方

現代中国語の限定語の分類を行うときに、限定語と中心語の間の意味関係を明確にしておかないといけない。今までの研究者の大部分は意味関係に基づいて限定語を分類している。ただし、各種の限定語を区別する基準が明確でなく、各種類の間の限界がはっきりせず、恣意的である。分類は、研究者によって、違っている。

丁声树等(1961)は、現代中国語の限定語を所属性限定語、同一性限定語と一般性限定語の三種類に分ける。それぞれ呂叔湘(1982[1956])の「形容性限定語、所属性限定語、同一性限定語」に相当している。

所属性限定語については、邢福义(1996)は「他的诸葛亮演得很好、今天是你的主席、你千万别打我的主意」のような例を挙げ、「偽性の所属限定語(“假领属定语”)」と呼ぶ。ただし、邢福义(1996)は「これらの例にある“他的”、“你的”、“我的”は所属限定語の形式であるが、実際には所属限定語の意味を表していない」と述べているが、所属限定語の意味を表していない理由や具体的にどんな意味を表しているかについては言及していない。

また、朱德熙(1982)も「张三的原告，李四的被告、他的篮球打得好、我来帮你的忙」のような用例を挙げ、「準限定語(“准定语”)」と呼ぶ。朱德熙(1982)はこの準限定語の意味を分析するとき、もともとの例を「张三是原告，李四是被告、他打篮球打得好、我帮你忙」のような主述構造や動目構造に変換するという構造変換の方法で限定語と中心語の間の意味関係を説明している。しかし、この構造変換の方法は“两公婆吵架的小事”のような「同一性限定語」の意味分析に応用することができないと考える。

本論文では、丁声树等(1961)の分類方法をもとに、朱德熙(1982)の提出した「準限定語」を「特殊な所属性限定語」として捉え、現代中国語の限定語の意味類型を再考察する。分析する際に、形式意味論の演繹的な手法を用い、用例を論理式で表記することを通し、全ての種類の限定語の意味関係を明示できる基本的な論理構造を探し出すことを目指す。

1.3 現代中国語の限定語の多義構造に関する先行研究

現代中国語の多義構造に関する研究は中国語文法学界で重要な研究課題の一つとされている。多義構造の研究は、言語形式と言語意味の関係の研究に役立ち、文法ルールの解明にも有益である。現代中国語の限定語の多義構造に関する研究もよく見られる。

1.3.1 現代中国語の限定語の多義構造についての諸説

朱德熙(1962)は中国語の統語構造を論じる時に、“咬死了猎人的狗”という例を挙げた。この用例には二つの意味があり、それぞれ二つの異なる文法構造を表しているという。

(17)a. 咬死了/猎人的狗(獵人の犬を噛み殺した)

b. 咬死了猎人的/狗(獵人を噛み殺した犬)

(朱德熙 1962 : 351)

「a と b の形式は全く同じであるが、両者の階層構造は等しくない。a は“咬死了”と“猎人的狗”からなり、b は“咬死了猎人的”と“狗”から成っている」と指摘している。朱德熙(1980)は「この種類の多義構造の二つの異なる意味は二つの異なる階層構造を反映している。それは $V + (N_1 + \text{的} + N_2) / (V + N_1 + \text{的}) + N_2$ である」と述べている。また、朱德熙(1980)はもう一つの限定語に関わる多義構造「 $N_1 + \text{的} + N_2$ 」を挙げている。例えば、“鲁迅的书”という連語は「鲁迅が書いた本」と「鲁迅が所有する本」との二つの意味がある。

徐仲华(1979)は、中国語の書面語にある多義構造を九種類あげている。その中で、限定語と関係があるのは七種類ある。その概要を次の<表 1-3>のようにまとめる。

多義構造	用例
(一) $D + M_1 + \text{“的”} + M_2$	热爱人民的总理
(二) $D_1 + D + M_1 + \text{“的”} + M_2$	反对压迫自己的人
(三) $M_1 + \text{“的”} + M_2 + D + (\text{“得”}) + \text{補語}$	她的鞋做得很好看
(四) $D + S - L + (\text{“的”}) + M$ (「S-L」は数量詞を表す)	准备了两年的食物
(五) 限定語の連用	伟大的斯大林的著作
(六) “和” から成る構造	哥哥和弟弟的朋友
(七) “对/对于” から成る構造	张鼐对她的无限深情

(徐仲华 1979 : 339-343 参照)

<表 1-3 : 徐仲华(1979)による限定語と関係がある多義構造>

呂叔湘(1984)は、構造による多義、語による多義、多義成分による多義及び多義性を解消する方法を論じている。その中で、“的”による多義は限定語と密切な関係を持っている。例を挙げると以下のとおりである。

(18) a. (四个医学院的)学生参加了巡回医疗队
(四つの医学院の学生が巡回医療チームに参加した)

b. 四个(医学院的)学生参加了巡回医疗队
(四人の医学院の学生が巡回医療チームに参加した)

(19) a. 把(重要的书籍)和(手稿)带走
(重要な書籍)と(手稿)を持って行く)

b. 把重要的(书籍和手稿)带走
(重要な(書籍と手稿)を持って行く)

(20) 他看了一个月的报
(彼は一ヶ月分の新聞を読んだ/彼は一ヶ月間新聞を読んだ)

(呂叔湘 1984 : 322-323)

銭乃榮主編(1995)は、語彙、文法と語用の三つの面から中国語の多義構造を分類している。そこで、統語構造による多義構造を分析するとき、次のような限定語と関係ある多義構造をあげている。

(一) 限定語 + 名詞₁ + 名詞₂

(二) 名詞₁ + 名詞₂ + 名詞₃

(三) 動詞 + 名詞₁ + 的 + 名詞₂

(四) 前置詞 + 名詞₁ + 的 + 名詞₂

劉順(1998)は、「“对” + N」から成る前置詞フレーズが限定語になる時に生ずる多義類型は二つあると述べている。その一つは「“对” + N + “的” + V」である。例えば、“对沈先生的误解”。この類型の特徴は、V が他動詞であり、N が動作主となることもできるし、受動者になることもできる。もう一つの類型は「“对” + N₁ + “的” + N₂」である。例えば、“对孩子们的态度”。この類型の特徴は、N₁ と N₂ も“对”の対象になることができることである。

張宝勝(2002)は、結合価理論を用いて、「“对” + N + “的” + X」という構造の多義性を分析し、「X が動詞であるか、形容詞であるか、名詞であるかにかかわらず、「“对” + N + “的” + X」という構造が多義性を生じる必要十分条件は以下の三つがある」という結論を提出している。

(一) X は結合価 2 の実詞である

(二) X との間に意味関係を持つ二つの名詞性成分は人を指す名詞である

(三) N は人を指す名詞である

朱华丽(2009)は限定語に関する多義構造が次の六種類あると述べている。

- (一) 動詞 + 名詞₁ + “的” + 名詞₂
- (二) “对” + 名詞₁ + “的” + 名詞₂
- (三) “对” + 名詞₁ + “的” + 動詞
- (四) 名詞₁ + “和” + 名詞₂ + “的” + 名詞₃
- (五) 代詞 + “的” + 名詞
- (六) 数詞 + 量詞 + 名詞₁ + “的” + 名詞₂

また、朱华丽(2009)は限定語の多義構造を制約する要素を文脈制約要素、意味制約要素と統語制約要素に分けて考察した。

1.3.2 本論文の捉え方

限定語の多義構造は現代中国語の中でよく現れる文法現象である。限定語の多義構造に関する研究は、一つの構造で多種の意味内容を表す可能性を検討し、同じ構造の潜在的な差異への考察により、言語形式と意味内容との様々な対応関係を深く認識することができる。

今までの限定語の多義構造に関する研究は、ほとんど統語論、語用論の視点からの研究に留まっている。例えば、一つの「定中構造」で多種の意味を表す時の統語構造の違いや、具体的な文脈による一つの「定中構造」から生じる多義などである。

しかし、限定語の多義構造の論理構造と意味関係についてはあまり言及していない。人間は自分が持っている知識や文脈やアクセントなどにより多義性を解消することができるが、自然言語の機械処理の場合は、コンピューターに提供される情報が少ないので、限定語の「多義構造」の意味判別を機械で処理するのは難しいことである。この問題を解決するには、限定語の多義構造の論理構造と意味関係を究明しなければならないのである。本論文は朱华丽(2009)の研究を参考し、多義性の起こりやすい限定語にかかわる構造を選び、形式意味論の角度から、それぞれの論理構造を究明し、意味関係を考察することにする。

1.4 現代中国語の限定語の意味指示に関する先行研究

「意味指示」という理論は1980年代に生まれた現代中国語の独特な言語分析理論である。従来の意味指示に関する研究の大部分は中国語の補語、状況語、副詞、述語動詞などの意味指示に集中しているが、限定語の意味指示を研究対象として考察する研究者も少なくない。まず、現代中国語の限定語の意味指示に関する代表的な研究を紹介する。

1.4.1 現代中国語の限定語の意味指示についての諸説

峻峽(1990)年において、峻峽は修飾性限定語を「直接修飾限定語」と「間接修飾限定語」に分けた。直接修飾限定語は中心語を直接に修飾する。それに対し、中心語を直接に修飾せずに、中心語以外の文成分を通して間接的に中心語を修飾するのは間接

修飾限定語である。そして、間接修飾限定語を「主語を指示する（“指向主語”）」、「主語の限定語を指示する（“指向主語的定语”）」、「前置詞或いは動詞の目的語を指示する（“指向介词或动词的宾语”）」、「中心語のほかの限定語を指示する（“指向中心語的另一个定语”）」、「中心語のほかの限定語にある名詞性成分を指示する（“指向中心語的另一个定语中的某一名词性词语”）」、「文外を指示する（“指向句外”）」の六種類に分けて、それぞれの意味、構造から間接修飾限定語の構成や使用上の条件などを指摘した。この研究は後の限定語の意味指示に関する研究に影響を与える画期的研究であると思われる。

卢英顺(1995)は、一般的に限定語は後ろの中心語を意味指示するが、他の文成分を意味指示することもあると述べている。例えば、“昨天晚上，他看了一夜的书”の限定語“一夜”は述語“看”を意味指示する。また、“他拔了两块钱的草”の限定語“两块钱”は“他拔草”という行為を意味指示する。

丁凌云(1999)は、“S+V+A+O”構造における限定語の意味指示を以下のような五種類に分けている。

- (一) AはOを意味指示する
- (二) AはVを意味指示する
- (三) AはSを意味指示する
- (四) もしAが二つ以上あれば、 A_1 は A_2 を意味指示する
- (五) Aはある行為を意味指示する

また、丁凌云(1999)は限定語の意味指示を判定する二つの基準を提出している。その一つは文の変換式を考察することである。一つは意味特徴を分析することである。

彭玉兰(2001)は、限定語の意味指示を“同指”、“异指”、“兼指”の三種類に分けた。“同指”とは、限定語と中心語の間に直接な統語関係が存在すると同時に直接の意味関係もあるという言語現象である。例えば、“三斤苹果，最大的房子”がある。“异指”とは、限定語は統語上中心語を修飾するが、意味上他の文成分を指示するという言語現象である。例えば、“我昨天洗了个舒服澡”の例である。この文の限定語“舒服”は主語の“我”を意味指示する。“兼指”とは、限定語が中心語と関わると同時に、他の文成分とも関わる言語現象である。例えば、“我知道他要来的消息已经是第二天了”。この文の限定語“他要来”は“消息”の具体的な内容であると同時に、述語の“知道”の内容でもある。さらに、彭玉兰(2001)は“异指”類の意味指示の統語制限、意味表現と語用機能についても論じている。

赵世举(2001)は、意味指示理論の形成を検討し、“指向”、“指域”、“指量”の三つの角度から限定語の意味指示を考察した。“指向”とは限定語の意味指示の方向を指し、“前指，后指，隐指，曲指”の四つのタイプがある。“指域”とは限定語の意味指示が関わる領域を指し、“内指”と“外指”の二つのタイプがある。“指量”とは限定語が意味指示する文成分の数量を表し、“单指”と“多指”の二つのタイプがある。

杨淑芳(2003)は、まず意味指示の概念と限定語の意味指示を分析する基準について論じた。また、限定語の意味指示を、主語を意味指示すること、述語を意味指示する

こと、目的語を意味指示すること、他の限定語を意味指示すること、文外を意味指示すること、意味指示が空虚化すること、という六種類に分けて分析した。

邵敬敏編(2007)は、限定語の意味指示は三種類に分けられると述べている。その一つは中心語を意味指示することである。例えば、“他昨天买了件羊皮大衣”。限定語“羊皮”は中心語“大衣”を意味指示している。もう一つは主語を意味指示することである。例えば、“他做了一个惬意的梦”。限定語“惬意”は主語“他”を意味指示している。最後は述語を意味指示することである。例えば、“陈小平看了一天的书”。限定語“一天”は述語“看”を意味指示している。

田宗燕(2011)は、限定語の意味指示を五種類に分けて考察した上に、意味弁別と語用的レトリックの二つの面から限定語の意味指示の役割を論じている。

1.4.2 本論文の捉え方

現代中国語において、統語関係と意味関係が対応しない状況がしばしば見られる。一つの文の構造的形式と意味の間に複雑な関係が隠されている。中国語の母語話者は語感で各文成分の間の意味関係を判定することができるが、外国人中国語学習者にとっては、統語関係と意味関係が一致する場合は理解しやすいが、一致しない場合はなかなか理解できない。「意味指示」という分析方法は統語構造の裏に隠される意味関係を明らかにすることができるので、中国語教育に有用な価値があると考えられる。

従来の研究は主に現代中国語の限定語の意味指示の類型についてまとめて分析し、限定語の意味指示の原則と方法を提出したが、大部分の研究は個人の語感で意味指示の対象を判定するため、語感の個人差によって異なる結論を出すことがある。また、語感が不確定なものであるので、検証することが難しい。

したがって、本論文は形式意味論の方法を導入し、論理式を用いて限定語と他の文成分の間の意味関係を明示することによって、母語話者の語感を科学的、論理的に判定する方法を求める。外国人中国語学習者がこの方法を使い、正確に限定語の意味指示の対象を判定できることを目的とする。

1.5 本章の結び

以上、現代中国語の限定語の研究における代表的な先行研究を紹介した。近年、限定語マーカーである“的”に関する研究や、限定語の位置置換に関する研究なども進んでいる。

本論文では、朱德熙(1982)が述べている限定語の定義を基に、現代中国語における限定語を意味類型、多義構造、意味指示の三つの視点から、形式意味論の枠組みを用いて再考察し、現代中国語の限定語の意味と論理構造を明らかにする。

第2章 研究方法

2.0 はじめに

本章では、本論文の基本的な分析理論である形式意味論の方法について説明する。本論文は形式意味論の方法を用いて自然言語の文を分析する。形式意味論では、「構成性の原理」に基づき、命題論理、述語論理、内包論理などの形式言語が用いられる。第1節では、形式意味論の基礎的な形式言語である「命題論理」と「述語論理」を紹介する。第2節では、形式意味論における意味規定の方法とモデル理論について説明し、意味解釈のプロセスを中国語の例文を用いて示す。第3節では、内包と外延の基本的な考え方について述べる。

2.1 命題論理と述語論理

形式意味論においては、自然言語に対し、直接的にその意味解釈を与えるのではなく、一旦命題論理や述語論理などのような論理言語に翻訳し、それを意味規則に従って意味解釈をすることによって、自然言語の意味解釈を与える、という手法がとられている。本節では形式意味論の基礎となる「命題論理」と「述語論理」について紹介する。

2.1.1 命題

英語、日本語といったまったく異なる言語の文でも同じ状況を表現することがある。例えば、

(21) a. John loves Mary.

b. ジョンはメアリを愛している。

(杉本孝司 1998 : 70)

あるいは、同じ自然言語でも同じ状況を異なる文で表現することもある。例えば、

(22) a. John and Mary are students.

b. Mary and John are students.

(杉本孝司 1998 : 70)

(21)と(22)の文が述べている状況を、論理学では「命題」(Proposition)と呼ぶ。つまり、(21)と(22)においては、aとbの二つの文はあるが、一つの命題であると理解する。命題を文の意味と捉えることができる。

2.1.2 命題論理

次に、「命題論理」(Propositional Logic)について説明する。「命題論理」というの

は、命題と命題の関係を取り扱う論理である。命題論理では、個々の命題の内容にまで立ち入ることではない。論理学においてはよく「どのような条件で命題が真となるか」や「妥当な推論とは何か」ということが問題となるので、命題論理においてもこの二つの概念の形式的・明示的特徴づけが行われることになっている。

通常、文(または命題)は変項(=命題変項(Propositional Variable))として、 p 、 q などの記号で表される。そして、文と文の関係は命題結合子によって決定される。よく用いられる命題結合子は連言「&」(かつ; and)、選言「 \vee 」(または; or)、含意「 \rightarrow 」(もし…ならば; if…then)、同値「 \leftrightarrow 」(もし…ならばかつそのときに限り; if and only if)である。また、一つの命題に働く否定「 \sim 」(でない; not)がある。

具体的に、これらの結合子がどのような条件(=真理条件(truth conditions))で真となるかを見てみよう。例えば、

(23) John hates dogs and Mary hates cats.

(杉本孝司 1998 : 71)

このような英語の“and”で結ばれた文を一般化するために、個々の命題を命題変項 p と q で記述し、“and”を記号「&」で記述する。「&」で結ばれた等位形式(conjunction)として、&-conj(連言)と呼ぶ。この等位形式は次の(24)となる。

(24) $p \& q$

(杉本孝司 1998 : 71)

この形式を持つ命題に対してその意味解釈(=真理条件)は次のように記述できる。

(25) 命題 $p \& q$ は、命題 p, q が同時に真であれば真、それ以外は偽となる。

(杉本孝司 1998 : 72)

この真理条件は次の〈表 2-1〉のような真理値表(truth-table)で表わすことができる。

p	q	$p \& q$
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	0

(杉本孝司 1998 : 73)

〈表 2-1 : 連言「&」の真理値表〉

この表における「1」は「真」を表し、「0」は「偽」を表す。それぞれ p , q が取る値の組み合わせに従って命題 $p \& q$ の真理値が規定される。

命題と命題の論理関係には、前述の「連言」($\&$)のほかに、「選言」(\vee)、「含意」(\rightarrow)、「否定」(\sim)がある。それぞれの真理条件は次のようになる。

(26) 選言の真理条件：命題 $p \vee q$ は、命題 p , q が同時に偽であれば偽であり、それ以外は真となる。

(杉本孝司 1998 : 74)

(27) 含意の真理条件：命題 $p \rightarrow q$ は、命題 p が偽であるか、命題 q が真である時に真であり、それ以外は偽となる。

(杉本孝司 1998 : 75)

(28) 否定の真理条件：命題 $\sim p$ は、命題 p が偽の時、真、それ以外は偽となる。

(杉本孝司 1998 : 76)

2.1.3 述語論理

文と文の論理的関係を取扱う命題論理にはそれなりの存在意義があるが、限界もあるので、命題論理を基盤にして、自然言語をさらに細かく分析できる論理言語が必要となる。これが「述語論理」である。「述語論理」(Predicate logic)とは、命題の中身であり、自然言語で言えば文の内部構造を取り扱う言語である。例えば、

(29) George loves Linda.

(杉本孝司 1998 : 112)

(29) の文は述語論理では、次のように表される。

(30) $\text{love}'(g, l)$

述語論理の表現では、一般的に個体定項(individual constants)はアルファベットで表記して、述語(predicate)は自然言語の表現に「'」(プライム)を付して表記する。(30)の表記は、個体定項ではなく個体変項(individual variables)を用いると、次のように表記できる。

(31) $\text{love}'(x, y)$

基本的には命題を、述語とその述語に満たされることを要求している項(argument)の組み合わせとして表現する言語である。「述語が満たされることを要求している項」の数は述語により異なる。それぞれ、必要とする項の数に従って、1 項述語、2 項述

語、3項述語などと呼ばれる。具体的には次のような例がある。

(32) a. 1項述語 : run, walk, dance, etc.

b. 2項述語 : love, kiss, hit, break, etc.

c. 3項述語 : give, send, introduce, etc.

(杉本孝司 1998 : 113)

2.1.4 命題と可能世界

命題の真偽を決定するためには、その命題が表わす内容が現実の世界で成立するかどうかという情報が必要となる。p という命題を取った場合、世界は p が成立するかどうか、そのいずれかである。たとえば、〈表 2-1〉の「真理値表」の場合でいうと、その世界の在り方がどうであろうが、問題になっているのは p と q という二つの命題で規定される状況である。ここでは、p と q の真理値の組み合わせが可能な世界をすべて尽くしている。しかし、p と q の真理値の個々の組み合わせが、個々の世界の在り方を規定しているとも言える。そこで、〈表 2-1〉は次のようになる。

	p	q	p & q
w1	1	1	1
w2	1	0	0
w3	0	1	0
w4	0	0	0

(杉本孝司 1998 : 87)

〈表 2-2 : 可能世界の真理値表〉

この表では、w1、w2、w3、w4 のような世界を「可能世界」(possible world)と呼ぶ。w1 は命題 p と q が成立する世界であり、w2 は命題 p だけが成立し q は成立しない世界であり、w3 は命題 p が成立しなくて q だけが成立する世界であり、w4 は命題 p と q がともに成立しない世界であることとする。すると、命題 p の意味は {w1, w2}、命題 q の意味は {w1, w3}、複合命題 p & q の意味は {w1} ということになる。このことから次のようにも言える。

(33) 命題とは可能世界の集合である。

(杉本孝司 1998 : 88)

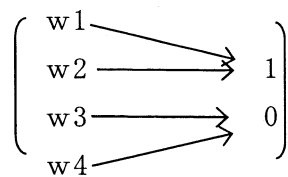
命題の真偽は「可能世界」における情報により決定できる。したがって、命題とは次のように考えることもできる。

(34) 命題とは個々の可能世界に関して、真か偽かを与えてくれる関数 (function) である。

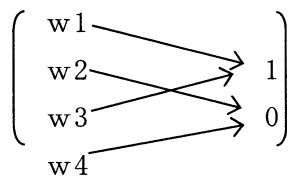
(杉本孝司 1998 : 88)

例えば、命題 p は $w1$ に対しては 1 を、 $w2$ に対しては 1 を、 $w3$ に対しては 0 を、 $w4$ に対しては 0 を、それぞれ与えてくれる一種の関数である。つまり、命題とは可能世界の集合であり、その集合のそれぞれの要素に対し、1 か 0 (真か偽) を与える関数として命題を解釈することである。そこで、命題 p , q , $p \& q$ をそれぞれ、次の図のような関数であると規定することもできる。

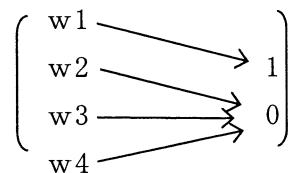
命題 p :



命題 q :



命題 $p \& q$:



(杉本孝司 1998 : 89)

<図 2-1 : 命題 p , q , $p \& q$ の可能世界から真理値への関数>

命題を関数として捉えることにより、この命題は各可能世界を引数として真理値を一義的に与えてくれる。例えば、命題 $p \& q$ の関数をみると、次のような「計算結果」を得る。

- (35) $[p \& q] (w1) = 1$
 $[p \& q] (w2) = 0$
 $[p \& q] (w3) = 0$
 $[p \& q] (w4) = 0$

(杉本孝司 1998 : 89)

命題 $p \ \& \ q$ について、 w_1 という世界はその命題内容に対応した世界である(つまり、 w_1 では命題 $p \ \& \ q$ は真である)し、 w_2 から w_4 はそうではない、ということが(36)から判断できる。つまり、これは意味論的には次のように定義することになる。

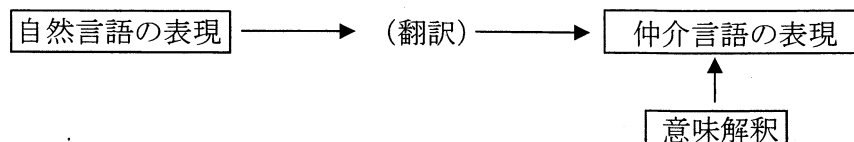
(36) 命題は可能世界から真理値への関数である。

(杉本孝司 1998 : 90)

次の節では、モデルについて説明する。

2.2 モデルとモデル理論

前述のように、形式意味論では、自然言語に対し、直接的にその意味解釈を与えるのではなく、一旦論理言語に翻訳し、その論理言語を意味解釈することによって、自然言語の意味解釈を与える、という手法がとられている。杉本(1998)により、この手法を次の簡単な図で示す。



(杉本孝司 1998 : 115)

<図 2-2 : 形式意味論による自然言語の意味解釈のアプローチ>

仲介言語には、命題論理や述語論理のほかに、拡張された複雑な論理言語も用いられるが、本節では基礎的な命題論理と述語論理を用いて形式意味論における意味解釈がどのようなものかについて説明する。

2.2.1 モデルと意味解釈

通常、ある表現の意味は、それがどのようなものを指すかということを指定することによって決定される。そのとき、どのような「道具」を使って意味解釈をするか、またその道具に対する規則はあるか、それを明示的に指定する必要がある。そこで用いられるのがモデル(model)である。つまり、モデルとは記述の対象となる自然言語が形式意味論的にどのような解釈を受けるのかを規定するものである。

たとえば、話を命題論理に限れば、意味解釈には次の三つの道具が必要となる。

(37) a. 可能世界

b. 真理値

c. これら可能世界と真理値から組み立てて指定する

そこで、このときのモデルは次のように指定される。

(38) 命題論理のモデル

$\langle W, T, F \rangle$

1. W は可能世界の集合
2. T は真理値の集合
3. F は各個別の基本命題の意味を指定する関数

(杉本孝司 1998 : 90)

具体的に次の(39)の例を取り上げながら説明しよう。

- (39) a. John is a doctor.
b. Mary is a teacher.

(杉本孝司 1998 : 91)

(39) の例の可能世界は以下の三つのみである。

- (40) w_1 : ジョンは医者で、メアリは教師でない。
 w_2 : ジョンは医者で、メアリは教師である。
 w_3 : ジョンは医者でなく、メアリは教師でない。

(杉本孝司 1998 : 91)

この時、モデル M_1 は次のようになる。

(41) $M_1 = \langle W, T, F \rangle$

$W = \{w_1, w_2, w_3\}$

$T = \{1, 0\}$

F は基本命題 A, B に以下の意味 (可能世界から真理値への関数) を指定する関数

$$F(A) = \left[\begin{array}{ccc} w_1 & \searrow & \\ w_2 & \longrightarrow & 1 \\ w_3 & \longrightarrow & 0 \end{array} \right]$$

$$F(B) = \left[\begin{array}{ccc} w_1 & \searrow & \\ w_2 & \longrightarrow & 1 \\ w_3 & \longrightarrow & 0 \end{array} \right]$$

これにより、可能世界 w_1 で命題 B (=Mary is a teacher.) が真であるか偽であるかについては、次のようにして決められる。まず、命題 B の意味は $F(B)$ である。次にこ

の関数の w_1 における値は $F(B)(w_1)$ である。最後に命題 B は可能世界 w_1 において偽である。つまり、モデル M_1 においては命題 B の内容は可能世界 w_1 に対応していないということになる。

2.2.2 モデルと意味解釈の実例

ここでは、形式意味論において、自然言語の文の意味解釈がどのようになされるのかを、中国語の文の例を用いて説明する。説明は、方立(2000)の第2章「論理言語 L_1 と英語の部分表現 E_1 」で述べている内容を参考にし、中国語の表現 C_1 を用いて記述する。

2.2.2.1 論理言語 L_1 の統語部分

自然言語と同様に、論理言語には統語部分が存在する。その統語部分は語彙と統語規則の二つの部分から構成される。統語規則を用いて、無限の数の文を産出できる。語彙と統語規則は以下ようになる。

(42) 語彙部分：

- a. 個体定項 a, b, c, d, \dots
- b. 個体変項 x, y, z, \dots
- c. 一項述語 L, M, \dots
- d. 二項述語 N, O, \dots

(43) 統語規則：

- a. δ が一項述語で、 α が個体であるならば、 $\delta(\alpha)$ は適格な式である。
- b. γ が二項述語で、 α と β が個体であるならば、 $\gamma(\alpha, \beta)$ は適格な式である。

統語規則(43)によると、論理言語 L_1 の全ての適格な文を生成することができる。例えば、

- (44) a. $L(a)$
- b. $N(a, b)$

2.2.2.2 中国語の表現 C_1

方立(2000)は、英語の部分表現を生成する文法を句構造文法にする。その英語の部分表現 E_1 にも論理言語 L_1 と同じように、語彙と統語規則が存在していると述べている。それを参考にし、中国語の表現 C_1 にも存在する語彙と統語規則は次のように表わすことができる。

(45) 語彙規則 :

- a. $N_{pr} \rightarrow \{\text{张三, 李四, 赵英, ...}\}$
- b. $V_i \rightarrow \{\text{走, 来, ...}\}$
- c. $V_t \rightarrow \{\text{喜欢, 讨厌, ...}\}$

(46) 統語規則 :

- a. $S \rightarrow NP \ V_i$
- b. $S \rightarrow NP_1 \ V_t \ NP_2$
- c. $NP \rightarrow N_{pr}$

N_{pr} は固有名詞であり、 N は名詞である。 V_i は自動詞であり、 V_t は他動詞である。また、 S は文を表し、 NP は名詞フレーズを表している。(46)の統語規則によると、中国語の表現 C_1 の全ての文を生成することができる。例えば、

(47) 李四喜欢赵英。

(方立 2000 : 29)

(45) と (46) の語彙規則と統語規則に基づくと、(47) の生成過程は次のようになる。(47) の初期値を S とする。

(48) S

NP_1	V_t	NP_2	統語規則 (46b)
N_{pr}	V_t	NP_2	統語規則 (46c)
N_{pr}	V_t	N_{pr}	統語規則 (46b)
李四	V_t	N_{pr}	語彙規則 (45a)
李四	喜欢	N_{pr}	語彙規則 (45c)
李四	喜欢	赵英	語彙規則 (45a)

2.2.2.3 翻訳

統語規則によって生成される (47) の文の論理構造を明示するために、その文を形式言語へ翻訳しなければならない。そこで、翻訳規則が必要となる。形式意味論では、翻訳規則は統語規則と対応して規定されている。この対応は、自然言語の範疇と形式言語の範疇が一対一に対応し、並行的な生成の過程を持つことで保証される。論理言語 L_1 と中国語の表現 C_1 の対応関係は次のようになる。

- (49) a. $NP \Rightarrow e$ (個体)
- b. $N_{pr} \Rightarrow e$ (個体)
- c. $V_i \Rightarrow \text{Pred}_1$ (一項述語)

- d. $V_t \Rightarrow \text{Pred}_2$ (二項述語)
 e. $S \Rightarrow t$ (式)

矢印の左側は C_1 における統語範疇であり、右側は L_1 における統語範疇である。矢印は「翻訳する」という意味を表わす。この対応関係は C_1 の統語範疇を L_1 の統語範疇に翻訳する方法を決定している。この対応によって、(46) の統語規則に対する翻訳規則は次のようになる。

(50) 統語翻訳規則：

- a. $S' \Rightarrow V_i' (NP_1')$
 b. $S' \Rightarrow V_t' (NP_1', NP_2')$
 c. $NP' \Rightarrow N_{pr}'$

この統語翻訳規則は、例えば、(50a) では、統語規則(46a)の「 $S \rightarrow NP \ V_i$ 」に対応し、 L_1 の表現では S' が「 $V_i' (NP_1')$ 」のように翻訳されることを表している。また、語彙翻訳規則について方立(2000)は次のように述べている。

(51) 語彙翻訳規則：

ある単語が w_1, w_2, \dots, w_n 等の形で存在しているのであれば、論理言語に翻訳するときにはその単語そのものを用い、 $w_i^{n'}$ で表記する。(n≥0)

(方立 2000 : 34)

例えば、次のような具体的な例がある。

- (52) a. 张三 \Rightarrow 张三'
 b. 走 \Rightarrow 走'
 c. 喜欢 \Rightarrow 喜欢'

次に、統語翻訳規則と語彙翻訳規則に基づき、(47) の文を論理言語に翻訳する。統語規則における初期値 S は S' に翻訳される。

(53) a. S

S'

b. $NP_1 \ V_t \ NP_2$

統語規則(46b)

$V_t' (NP_1', NP_2')$

統語翻訳規則(50b)

c. $N_{pr} \ V_t \ NP_2$

統語規則(46c)

$V_t' (N_{pr}', NP_2')$

統語翻訳規則(50c)

d. $N_{pr} \ V_t \ N_{pr}$

統語規則(46c)

$V_i' (N_{pr}', N_{pr}'))$	翻訳規則(50c)
e. 李四喜欢赵英	語彙規則(45a、45c)
喜欢' (李四' , 赵英')	語彙翻訳規則(51)

(53)で自然言語 C_1 が論理言語 L_1 に翻訳された。この論理言語 L_1 を意味解釈することによって、中国語の表現 C_1 の意味解釈を与える。では、次に意味解釈について説明する。

2.2.2.4 意味解釈

方立(2000)によれば、自然言語を論理言語に翻訳した後で、これらの論理言語を客観世界の事物に照合して、それが真であるのか偽であるのか、検証しなければいけない。そのためには、ある手法が必要となる。その手法はモデルである。ここでいうモデルは話をしている時の情景を反映するものである。ある情景のモデルはその情景に出現した人や物およびその人と物の間の関係を反映すると同時に、文の中に出現した基本語彙(実詞)とその人や物の間に何らかの繋がりがあることを示さなければならない。

モデルは抽象的な構造であり、 $\langle U, F \rangle$ のような順序対で表す。U は情景の中の本体の集合であり、論域を示す。F は値付与関数であり、文中の基本語彙を U に属する本体に直接あるいは間接に繋げる。それでは、具体的なモデルの例をみよう。

(54) モデル M1 :

$M1 = \langle U, F \rangle$ 、そのうち、
 $U = \{ZHANG SAN, ZHAO YING, LI SI\}$
 $F(Zhang San') = ZHANG SAN$
 $F(Li Si') = LI SI$
 $F(Zhao Ying') = ZHAO YING$
 $F(walk') = \{ZHANG SAN\}$
 $F(sing') = \{ZHAO YING\}$
 $F(like') = \{(ZHANG SAN, ZHAO YING), (LI SI, ZHAO YING), (ZHAO YING, LI SI)\}$
 $F(despise') = \{(ZHANG SAN, ZHAO YING), (LI SI, ZHANG SAN), (ZHAO YING, LI SI)\}$
(方立 2000 : 37)

集合 U の要素は現実の人物そのものを指す。F は各定項に意味値を付与する関数である。意味値は集合の形で規定されている。

L_1 の論理言語を意味解釈する前に、意味規則について紹介する。 $[\alpha]$ は意味値、M はモデルを表し、 $[\alpha]^M$ は α がモデルにおける意味値を表す。

(55) 意味規則 :

- a. α が述語あるいは個体定項ならば、 $[\alpha]^M = F(\alpha)$ 。
- b. δ が一項述語で、 α が個体定項ならば、 $\delta(\alpha)^M = 1$ の必要十分条件は、 $[\alpha]^M \in [\delta]^M$ となる。
- c. γ が二項述語で、 β が個体定項ならば、 $\gamma(\alpha, \beta)^M = 1$ の必要十分条件は、 $([\alpha]^M, [\beta]^M) \in [\gamma]^M$ となる。

(方立 2000 : 55)

最後に、意味規則に基づき、(47)の文の論理表現のモデル M_1 における意味解釈を行う。

(56) 意味解釈 :

- a. $[\text{喜欢}'(\text{李四}', \text{赵英}')]^M = 1$ の必要十分条件は、 $([\text{李四}']^M, [\text{赵英}']^M) \in [\text{喜欢}']^M$ となる。 意味規則 (35c)
- b. $[\text{李四}']^M = F(\text{李四}') = \text{LI SI}$. 意味規則 (35a)
- c. $[\text{赵英}']^M = F(\text{赵英}') = \text{ZHAO YING}$. 意味規則 (35a)
- d. $[\text{喜欢}']^M = \{(\text{ZHANG SAN}, \text{ZHAO YING}), (\text{LI SI}, \text{ZHAO YING}), (\text{ZHAO YING}, \text{LI SI})\}$ 意味規則 (35a)
- e. $(\text{LI SI}, \text{ZHAO YING}) \in \{(\text{ZHANG SAN}, \text{ZHAO YING}), (\text{LI SI}, \text{ZHAO YING}), (\text{ZHAO YING}, \text{LI SI})\}$ であるので、 $[\text{喜欢}'(\text{李四}', \text{赵英}')]^M = 1$ 。

これにより、(47)の文の意味内容はモデル M_1 において真と言える。以上の大まかな流れをまとめておくと、結局次のような作業をしたことになる。

- (57) a. 中国語の文の生成
- ↓
- b. 中国語の文の論理言語への翻訳
- ↓
- c. 意味規則による論理言語の意味解釈
- ↓
- d. 中国語の文の意味決定

2.3 内包と外延

本節では、内包と外延について簡単に説明しよう。以下の説明は、杉本孝司(1998)、方立(2000)及び蔣严、潘海华(1998)を参照した。

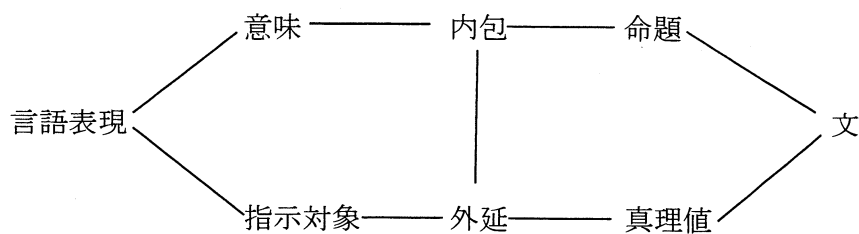
杉本孝司(1998)によると、我々は文を用いる時、それをある個別的な状況に関して用いている。そして、文の意味(=命題)を用いて、その個別的な状況が文の内容に対応すれば真、対応しなければ偽とすることを決めていることになる。その状況においては真か偽かの情報こそ、その文の「その状況での意味」であるとも言える。そこで、

命題(あるいは文の意味)とその命題を用いて決めることができる各個別の状況での真理値を、それぞれ「内包(intension)」と「外延(extension)」と呼ぶ。この内包と外延ということを命題表現に関して、次のように一般的にいうことができる。

(58) 命題表現(あるいは文)の内包とは可能世界から真理値への関数(すなわち命題)であり、命題表現のある特定の可能世界における外延とは、その特定の可能世界においてその命題が取る真理値である。

(杉本孝司 1998 : 100)

つまり、命題表現の内包は命題、その外延は真理値である。これを自然言語の立場から述べると、文の内包は命題、その外延は真理値であるということになる。次の図は言語表現と形式意味論における内包と外延の対応関係を示す。



(杉本孝司 1998 : 100)

〈図 2-3 : 言語表現と形式意味論における内包と外延の対応関係〉

この図から、言語表現の意味とは意味論的には内包的であり、その指示対象とは外延的である。形式意味論においては、文の意味を命題、文の指示対象を真理値とする、ということがわかる。通常、ある表現の内包は外延より「意味論的に」強力である。内包があれば、特定の可能世界での外延は決まるが、逆は成立しない。

内包論理言語には基礎の論理言語のほかに、二つの新しい演算子が存在する。その一つは内包演算子(intension operator)とよばれ、「 \wedge 」で表記する。もう一つは外延演算子(extension operator)と呼ばれ、「 \vee 」で表記する。他の演算子と同様に、内包演算子と外延演算子は必ず論理式の左側に書く。次に、いくつかの内包の表現式を挙げる。

- (59) a. $\wedge \text{'run'}$
- b. $\wedge \text{'Zhao Ying'}$
- c. $\wedge \text{'run' (Zhao Ying')}$

(方立 2000 : 284)

外延演算子の使用対象は内包の表現式である。次の(60)はいずれも適格な表現式である。

- (60) a. $\forall \text{'run'}$
 b. $\forall \text{'Zhao Ying'}$
 c. $\forall \text{'run' (Zhao Ying')}$

(方立 2000 : 284)

これらの表現式はいずれもそれらに対応する内包の表現式のある世界と時段の順序つきペアの外延を指示する。このことは如何なる世界と時段の順序つきペア (w_j, i_k) においても、外延演算子「 \forall 」が内包表現式「 $\wedge \alpha$ 」に適用されてできた表現式はもとの表現式「 α 」に等しいことを意味している。即ち、次のようになる。

$$(61) [\forall \wedge \alpha]^{M, w_j, i_k, g} = [\alpha]^{M, w_j, i_k, g}$$

この等式は「ダウン・アップ打消し規則」(down-up cancellation)とも呼ばれる。

2.4 本章の結び

本章では、本論の分析方法とする形式意味論の方法について述べた。第1節と第2節では、形式意味論の基本的な概念とモデル理論及び意味解釈の過程を中国語の簡単な文を例にして説明した。第3節では本論で用いる内包と外延の概念と論理言語について紹介した。

第3章 現代中国語の限定語の意味類型と論理分析

3.0 はじめに

丁声树等(1961)は現代中国語の限定語を「一般性限定語」、「所属性限定語」と「同一性限定語」の三種類に分けた。まず、「一般性限定語」は次のような意味類型の限定語を含んでいる。例えば、

- (62) a. 三个人、一屋子的人(三人、部屋中の人)
b. 明儿下午的座谈会、以往的记录(明日午後の座談会、従来の記録)
c. 外头的衣服、马路旁边的树(外の服、道路のそばの木)
d. 结婚的戒指、全新的房子(結婚の指輪、真新しいハウス)

これらの用例にある限定語は数量(三个、一屋子)、事物の存在する場所(外头、马路旁边)、事物と関わる時間(明儿下午、以往)、事物の属性(结婚、全新)などを表す限定語であり、丁声树等(1961)はこのような限定語を「一般性限定語」と呼ぶ。

また、「所属性限定語」は所属関係を表す限定語である。通常、名詞と代詞だけが所属性限定語になることができる。例えば、“老师的书、我们的学校”などがこの種類の限定語の例である。

「同一性限定語」は、限定語と中心語の間の同格関係を表す限定語である。例えば、“两公婆吵架的小事”では、中心語“小事”は“两公婆吵架”のことであり、中心語と限定語は同格関係を持っている。

しかし、所属性限定語については、邢福义(1996)はさらに次のような例を取り上げ、

- (63) a. 他的诸葛亮演得很好。(彼は諸葛亮という役をよく演じた。)
b. 今天是你的主席。(今日はあなたが主席になる。)
c. 你千万别打我的主意! (君は私に目をつけなくてください!)

(邢福义 1996 : 90)

「これらの例にある“他的”、“你的”、“我的”は所属性限定語の形式であるが、実際には所属性限定語の意味を表していない」と述べ、「偽性の所属性限定語(“假领属定语”)」と呼んでいる。ただし、邢福义(1996)は「偽性の所属性限定語」が所属性限定語の意味を表していない理由や、「偽性の所属性限定語」が具体的に表す意味関係についてはいっさい言及していないため、記述は不十分だと考える。

さらに、朱德熙(1982)も所属性限定語について、次の例を挙げた。

- (64) a. 张三的原告, 李四的被告(張三の原告、李四の被告)
b. 他的篮球打得好(彼のバスケットボールがうまい)
c. 我来帮你的忙(私が君に手伝ってやろう)

朱德熙(1982)によれば、これらの限定語はすべて人間を表す名詞或いは人称代詞から構成され、本来ならば、所属関係を表すべきであるが、この三つの例に現れる“张三的”、“李四的”、“他的”はいずれも所属関係を表すものではない。朱德熙はこのような限定語を「準限定語(“准定语”)」と呼ぶ。「準限定語」の意味を分析するとき、朱德熙(1982)は(64)の用例を「张三是原告, 李四是被告、他打篮球打得好、我帮你忙」のような主述構造や動目構造に変換するという変換分析の方法で限定語と中心語の間の意味関係を説明している。

ただし、丁声树等(1961)の挙げた“两公婆吵架的小事”のような「同一性限定語」は主述構造にも動目構造にも変換することができないので、この変換分析の方法は「同一性限定語」の意味分析に応用することができない。故に、変換分析の方法で限定語と中心語の間の意味関係を考察することは不十分であると考ええる。

そこで、本章では、丁声树等(1961)の分類方法をもとに、朱德熙(1982)の提出した「準限定語」を「特殊な所属性限定語」として捉え、現代中国語の限定語の意味類型を再考察する。分析する際に、形式意味論の演繹的な手法を用い、具体例をあげながら、論理式を用いて、筆者が提出する各種類の限定語と中心語の間の意味関係の分析に適用できる方法を探し出し、すべての「定中構造」の意味関係を明示できる基本的な論理構造を解明することにする。

3.1 分析の理論的根拠——「ものの結合の原理」について

世界は数えきれないもので満ちている。ものとものがどういう関係にあるか、どのように結合するかといったことについて、ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])は次の(65)のように述べている。

(65) 二. 成立している事柄、すなわち事実とは諸事態の成立である。

二. 〇一 事態とは諸対象(もの)の結合である。

二. 〇一一 事態の構成要素になりうることはものにとって本質的である。

二. 〇一二 論理においては何一つ偶然ではない。あるものがある事態のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。

二. 〇一二一 ……ものが事態のうちに現れうるのなら、その可能性はもののうちに最初から存していなければならないのである。(論理的なことは、たんなる可能性ではありえない。論理はすべての可能性を扱い、あらゆる可能性は論理においては事実となる。)

……

二. 〇一二三 私が対象を捉えるとき、私はまたそれが事態のうちに現れる全可能性をも捉える。

.....

二.〇一四 対象はあらゆる状況の可能性を含んでいる。

二.〇一四一 事態の中に現れる可能性が、対象の形式である。

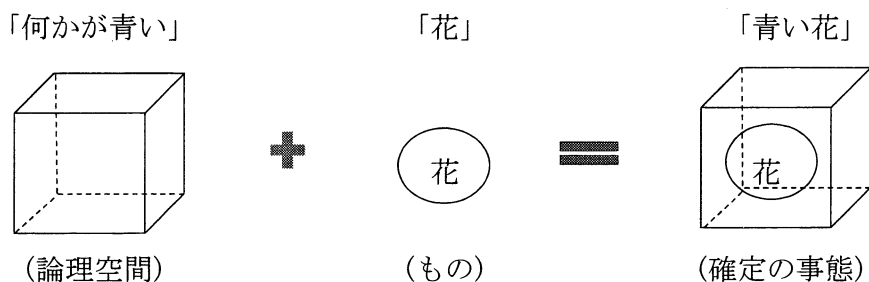
(ウィトゲンシュタイン 1918 [2003] : 13-14)

ウィトゲンシュタインによると、事態は諸対象(もの)の結びつきによって成立するということである。対象は単純であり、それ以上分解することはできない。また、諸対象(もの)は事態のうちにしか存在しない。したがって、事態と対象が世界の基本単位ということになる。ただ、諸対象(もの)が与えられ、これらの諸対象(もの)と一緒に結合すると事態を得るという意味ではない。諸対象(もの)にとって、本質的なのは「事態の構成要素になりうる」ことである。そうすると、「およそ空間の外に空間的対象を考えることはできず、時間の外に時間的対象を考えることはできないように、ほかの対象との結合可能性の外にはいかなる対象も考えることはできない(ウィトゲンシュタイン 1918 [2003] : 14)」ことになる。

いくつかの対象(もの)が結合することによって事態が構成されるが、事態の構成に先立って対象(もの)が存在するわけではない。対象(もの)は事態から分解されるものとして初めて輪郭づけられる。即ち、事態の中に現れることなしに対象(もの)は存在しえない。したがって、結合の可能性を保証するのは対象(もの)の存在ではなく、事態の存在である。

ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])はすべての論理的に可能な事態の総体を「論理空間」と呼ぶ。いかなるものもいわば可能な事態の論理空間のうちにあり、この論理空間が限りなく広がっている。ものが事態の中に現れる可能性はすべて論理空間の中で先取りされている。例えば、次の(66)のように、

(66)



「青い」という色がほかの多種多様なものと結合する事態の可能性を集めると、「何かが青い」という論理空間が構成される。この「何かが青い」の論理空間の中に、「青い空」、「青い服」、「青い鉛筆」等々の無限の可能性があらかじめ先取りされている。「花」をこの論理空間の中に入れる瞬間に、「青い」と「花」が結合し、ほかの可能性が排除され、「青い花」という事態が確定される。

ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])はものとものがどのように結合するかについ

て解釈している。ものとももの結合は恣意的なことではなく、一定の論理性が含まれている。この解釈は、現代中国語の限定語と中心語の間の意味関係の分析に説得力のある理論的根拠を提供している。本章はこの理論的根拠に基づき、現代中国語の限定語と中心語の意味類型について考察する。記述の便宜を図って、以下はこの理論的根拠を「ものの結合の原理」と称することにする。

3.2 一般性限定語の意味と論理分析

丁声树等(1961)によると、「所属性限定語」と「同一性限定語」以外の限定語は全て「一般性限定語」に属する。「一般性限定語」は具体的に表す意味によって、数量を表す限定語、指示を表す限定語、場所・時間を表す限定語、属性を表す限定語の四つのタイプに分けられる。

まず数量を表す限定語について考察しよう。

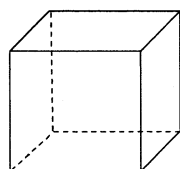
3.2.1 数量を表す限定語の論理分析

数量を表す限定語は中心語となる人や事物などとの数量関係を表す限定語である。通常、数量を表す限定語になれるのは数量詞である。数量詞とは、数詞と量詞の組み合わせであり、主たる文法機能は名詞を修飾することである。そのうち、限定語としてよく使われるのは名量詞（“名量词”）^(注5)である。

ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])によれば、数量を表す限定語と中心語の結合はけっして恣意的ではない。数量を表す限定語は数量と関わる「ある事態」を表し、その事態の可能性は無数である。まず、その無数の事態の可能性は一つの論理空間を構成している。言い換えれば、論理空間は数量と関わるある事態の全ての可能性を含んでいる。そして、中心語が表す「あるもの」をこの事態の全ての可能性を含んでいる論理空間に入れたとたんに、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一に確定される。そうすると、数量を表す限定語が中心語と結びつくことになる。それを示すのが次の(67)である。

(67)

「数量と関わる無数の
事態の可能性」



(限定語により構成
される論理空間)



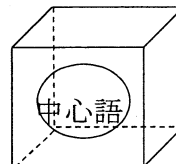
「中心語」



(あるもの)



「数量を表す限定語+中心語」



(確定された事態)

具体的な用例を挙げながら考察する。例えば、

この連語では、名量詞の“两匹”は名詞の“马”を修飾し、“马”の個数を表す。朱德熙(1982: 51)によれば、数量詞が名詞を修飾する場合、通常限定語マーカー“的”を伴わない。

丁声树等(1961)や邢福义(1996)などの先行研究では、用例を挙げるだけで詳細な意味の記述は行われていない。ここでは用例の意味を論理式で表記し、その論理式の成立とその表す意味を詳しく説明する。従来の形態素、単語などのような概念を離れて、その意味に注目し、形式言語の研究の技法である命題論理^(注6)と述語論理^(注7)というメタ言語を用いて、「ものの結合の原理」をベースに記述してみよう。

「ものの結合の原理」に従って、まず(68)の例を論理式で表記してみよう。(68)の連語は数量詞の“两匹”が中心語の“马”の[数量]を表すので、“有’(马, 两匹)”のような論理式が書けるように思うが、この論理式では“两匹”と“马”の結びつきが恣意的ではないことが示されていない。そこでこの二つの単語が結びつく動機を深く考えてみたい。

この用例は「あるもの」つまり“马”が「何かが二頭いる」という「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて、先取りされていなくてはならない。このことを論理式に書くと次の(68-①)になる^(注8)。

(68-①) 有’(u, 两匹)

ル ~が

この論理式は「uが二頭いる」と読める。「何かが二頭いる」というある事態の可能性が複数あり、一つの論理空間を構成している。したがって、たとえばこの「何かが二匹いる」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では存在していることになる。すなわち、“两匹马(二頭の馬)”以外に、“两匹骆驼(二頭のラクダ)”、“两匹骡子(二頭のラバ)”等の無数の可能性がある。

この事態の可能性のことを形式意味論によれば、“马”を個体変項として捉えるので、「u」を使って表記する。“两匹”が表す[数量]は次の論理式の個体変項 u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ である可能世界のどれにも存在するので、内包である。そこで、(68-①)は次の(68-②)になる。

(68-②) \wedge 有’(u, 两匹)

次に、「あるもの」である“马”を「何かが二頭いる」という「事態の可能性」で構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が、“马”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(68-③) 在' { ^有' (u, 两匹) , 马 }

アル ～が ～ニ

「あるもの」である“马”を「何かが二頭いる」という「事態の可能性」で構成する論理空間に入れる瞬間に、数量を表す限定語“两匹”が中心語“马”と結びつき、“两匹马”となり、事態の可能性が唯一に確定される。(68-③)の論理式では“^有' (u, 两匹)”という内包が“马”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。「V」は外延化を示す。

(68-④) 在' { ^有' (u, 两匹) , 马 } & = ' (马, u_n)

アル ～が ～ニ トソイ ～が ～ニ

これが(68)の連語全体の論理式となる。u_n^(注9)の添え字のnはu_nが定項であることを示す。この論理式は「uが二頭いるという内包が「馬」という個体にあり外延化する、かつ、「馬」がu_nに等しい」と読む。この論理式で第一命題の第二項の“马”が第二命題の第一項の“马”と連鎖していることが必要である。この論理式で「&」の左の命題に変項uが含まれることはさらに演算を「&」の右側の命題で実施することを強制する。この「強制」を保証するのが“马”の連鎖である。

名量詞が限定語になり、中心語の数量を表すことはよく見られるが、次のような例もある。

(69) 进一次城(一度町に行く)

(朱德熙 1982 : 117)

“一次”は朱德熙(1982 : 50-51)の「4.12」では「動量詞(“动量词”)」と呼ぶ。「動量詞はしばしば動詞の後に置かれ、準目的語となり、動作の回数を表すが、一部の動量詞は名量詞と同じく名詞を修飾することができる」と述べていた。

たとえば、(69)の“一次”は意味上では動作の回数を表しているが、構造からみれば、後ろの名詞を修飾しており、次のように言うことができる。

(69a) 一次城也没进(一度の町へも行っていない)

朱德熙(1982 : 117)は「“一次城也没进”は“一碗饭也没吃”“一本书也没看”と構造上平行するものであり、“一次”は“城”の限定語と見なすべきである。実体として、“城”は“座”で数えられ、“一座城”は“城”の数量を述べる。“一次城”は“城”の数量を述べるのではなく、“进城”の回数を述べているが、構造的には“一次”は

やはり“城”の限定語である」と説明した。つまり、名量詞が限定語になること以外に、一部の動量詞も限定語になることが可能である。

以下、(69)の例について限定語と関わる部分“一次城”のみを取出して、「ものの結合の原理」を用いて論理式に表記してみよう。まず、「あるもの」つまり“城”が生起しうる「事態の可能性」は次のようになる。

$$\begin{array}{c} \text{ハイル} \quad \sim\text{カ}^{\circ}\sim\text{ニ} \\ (69-①)\text{有}'\{\text{進}'(\phi, u), \text{一次}\} \\ \text{アル} \quad \quad \sim\text{カ}^{\circ} \quad \text{イト}^{\circ} \end{array}$$

この論理式は「 ϕ が u に入ることが一度ある」と読める。「 ϕ が u に入ることが一度ある」というある事態のあらゆる可能性が一つの論理空間を構成している。この事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では存在していることになる。形式意味論によると、動量詞“一次”が表す「一度」という[数量]は次の論理式の第一命題の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ である可能世界のどの要素にも存在するので、内包である。そこで、論理式は次の(69-②)になる。

$$(69-②)^{\wedge}\text{有}'\{\text{進}'(\phi, u), \text{一次}\}$$

次に、「あるもの」である“城”を無数の事態の可能性が構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が、“城”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

$$\begin{array}{c} (69-③)\text{在}'[^{\wedge}\text{有}'\{\text{進}'(\phi, u), \text{一次}\}, \text{城}] \\ \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{カ}^{\circ} \quad \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

「あるもの」である“城”を無数の事態の可能性が構成する論理空間に入れる瞬間に、数量を表す限定語“一次”が中心語“城”と結びつき、“一次城”となり、事態の可能性が唯一に確定される。

(69-③)の論理式では“ $^{\wedge}\text{有}'\{\text{進}'(\phi, u), \text{一次}\}$ ”という内包が“城”という個体、つまり外延と結合することになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} (69-④)\text{在}'[^{\vee}\text{有}'\{\text{進}'(\phi, u), \text{一次}\}, \text{城}] \& \text{=}^{\circ}(\text{城}, u_n) \\ \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{カ}^{\circ} \quad \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim\text{カ}^{\circ} \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

これが“一次城”全体の論理式となる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「 u が一度あるという内包が城という個体にあり外延化する、かつ、城が u_n に等しい」と読む。この論理式の第一命題の第二項の“城”が第二命題の第一

項の“城”と連鎖していることが必須である。変項 u の存在は、「&」の右側の命題の演算を義務化する。

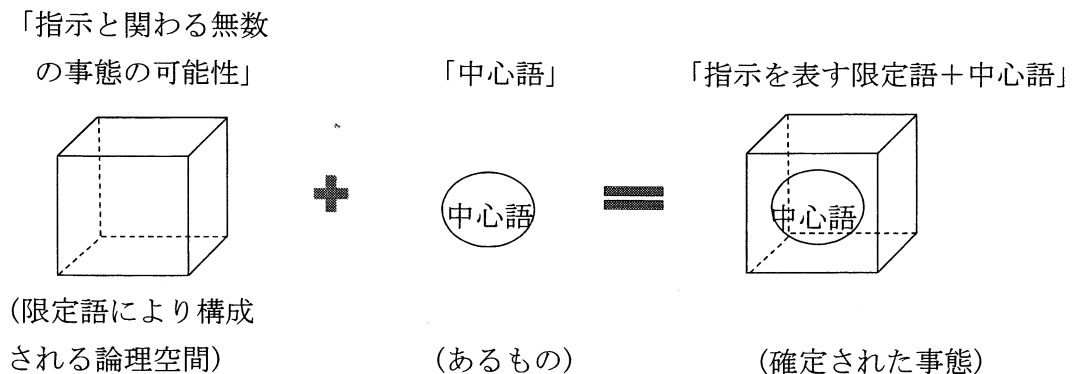
続いて「指示を表す限定語」を考察しよう。

3.2.2 指示を表す限定語の論理分析

指示を表す限定語は中心語になる事物に対し、指示の意味を表す限定語である。丁声树等(1961)によれば、指示代詞である“这”と“那”が指示を表す限定語になる場合、“的”を伴わず、直接中心語の前に置かれ、中心語を修飾する。

ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])をヒントにしてここで論じる限定語を考察すると、指示を表す限定語と中心語は恣意的に結合するのではない。限定語は指示と関わる「ある事態」を表している。その事態の総体——あらゆる可能性を含んだ論理空間が限りなく広がっている。つまり、あらゆる事態の可能性は一つの論理空間を構成している。そして、中心語が表す「あるもの」をこの限定語により構成される論理空間に入れると、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一に確定される。そこで、指示を表す限定語が中心語と結合することになる。すなわち、指示を表す限定語が中心語と結合できる可能性を保証するのは、指示と関わる事態の可能性の存在である。具体的には次の(70)のようになる。

(70)



次に、用例を挙げて分析する。たとえば、

(71) 这事情(この事)

(丁声树等 1961 : 43)

また、朱德熙(1982 : 86)の「6.9.4」では「这」と「那」はよく量詞あるいは数量詞と組み合わされる。たとえば“这个、那个、这两本、那三本”である。この種の構造は単独で用いることもできるし、名詞の修飾語になることもできる」と述べている。

邢福义(1996)も「这/那」＋量詞と「这/那」＋数量構造が限定語になることについて論じた。「这/那」＋量詞あるいは「这/那」＋数量詞がこの種類の限

定語となることが可能である。たとえば、次の用例である。

(72) 这个杯子(このコップ)

(邢福义 1996 : 91)

(72)の例では、指示代詞“这”と量詞“个”から構成される指示を表す限定語“这个”が後ろの中心語“杯子”を修飾し、「このコップ」を指示し、「ほかのコップ」と区別する役割を果たしている。

なお、朱德熙(1982 : 88)の「6. 11. 2」では「“这样, 那样, 这么样, 那么样”は“的”を伴って名詞を修飾することができる」と述べている。具体的な例として次のようなものがある。

(73) 他不是那样的人。(彼はそのような人ではない。)

(74) 我们从来没有碰到过这么样的天气。(私たちは今までこんな天気に出会ったことはない)

(朱德熙 1982 : 88)

次に、「ものの結合の原理」に従って前に挙げた(71)から(74)の例について論理式を用いて表記し、意味構造を考察する。

まず、(71)の例を見てみよう。「あるもの」である“事情”が「これが何かである」という「ある事態」に現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない。そこで、次の(71-①)となる。

(71-①) 是' (这, u)

アル ～カ' ～デ'

「これが何かである」という事態の可能性が無数にあり、一つの論理空間を構成している。したがって、この「これが何かである」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。つまり、「あるもの」が「ある事態」の中に現れる可能性は論理空間の中では全て予定されている。したがって、“这事情(この事)”のほかに、“这情况(この状況)”、“这情景(この情景)”等々の複数の可能性がある。

また、(71-①)の論理式は「これがuである」と読める。この論理式の中で、“事情”は変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表すので、個体変項uの領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(71-①)は次の(72-②)になる。

(71-②) ^是' (这, u)

そして、「あるもの」である“事情”をあらゆる事態の可能性の総体である論理空間に入れる。つまり、この内包が、“事情”という個体に存在しているので次の(71-③)のように書ける。

(71-③) 在' {^是' (这, u) , 事情}

アル ～ガ ～ニ

「あるもの」である“事情”をあらゆる事態の可能性の総体である論理空間に入れる瞬間、指示を表す限定語“这”が中心語“事情”と結合し、“这事情”となり、他の事態の可能性が排除される。言い換えれば、「これが何かである」という事態の可能性が先に存在することなしに、限定語“这”と中心語“事情”が結合できない。

(71-③)の論理式では“^是' (这, u)”という内包が“事情”という個体、つまり外延と結合することになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次の(71-④)になる。

(71-④) 在' {^是' (这, u) , 事情} & = ' (事情, u_n)

アル ～ガ ～ニ ヒソイ ～ガ ～ニ

これが(71)の連語全体の論理式になる。u_nの添え字のnはu_nが定項であることを示す。この論理式は「これがuであるという内包が「事」という個体にあり外延化する、かつ、「事」がu_nに等しい」と読む。この論理式で、第一命題の第二項の“事情”が第二命題の第一項の“事情”と連鎖していることが重要である。変項uの存在は、「&」の右側の命題の演算を義務化する。

続いて、(72)の例を見てみよう。まず「あるもの」である“杯子”が生起しうる「事態の可能性」はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない。(72)の用例において、「事態の可能性」は「これが何かである」であり、次の(72-①)に表記できる。

(72-①) 是' (这个, u)

アル ～ガ ～デ

「これが何かである」という事態の可能性が数え切れないほど存在している。全ての可能性が一つの論理空間を構成している。「これが何かである」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。つまり、「あるもの」が「ある事態」の中に現れる可能性は論理空間の中では全て予定されている。したがって、“这个杯子(このコップ)”の他に、“这个碗(この茶碗)”、“这个桌子(このデスク)”等々の無限な可能性が存在する。

(72-①)の論理式は「これが u である」という“杯子”が生起しうる「事態の可能性」を表している。この論理式の中では、“杯子”を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表すので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(72-①)は次の(72-②)になる。

(72-②) \wedge 是' (这个, u)

そして、「あるもの」である“杯子”を事態の可能性の総体である論理空間に入れる。つまり、この内包が“杯子”という個体に存在しているので、次の(72-③)のように書ける。

(72-③) 在' { \wedge 是' (这个, u) , 杯子 }
 $\exists u$ \sim カ[°] \sim ニ

「あるもの」である“杯子”を事態の可能性の総体である論理空間に入れたとたんに、指示を表す限定語“这个”が中心語“杯子”と結合し、“这个杯子”となり、事態の可能性が唯一に確定される。「これが何かである」という事態の可能性が先に存在することなしに、限定語“这个”と中心語“杯子”は結合できない。

(72-③)の論理式では、“ \wedge 是' (这个, u)”という内包が“杯子”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(72-④) 在' { $\vee \wedge$ 是' (这个, u) , 杯子 } & = ' (杯子, u_n)
 $\exists u$ \sim カ[°] \sim ニ ヒトシイ \sim カ[°] \sim ニ

これが(72)の連語全体の論理式になる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「これが u であるという内包が「コップ」という個体にあり外延化する、かつ、「コップ」が u_n に等しい」と読む。この論理式においても、“杯子”が第一命題の第二項と第二命題の第一項として連鎖していなければならない。

(73)と(74)の例も上記と同様に解釈して論理表記をすることが可能である。(73)の例にある“那样的人”の部分の論理式は以下のようになる。

$\exists u$ \sim カ[°] \sim テ[°]
(73-①) 在' { \wedge 是' (u, 那样), 人 } & = ' (人, u_n)
 $\exists u$ \sim カ[°] \sim ニ ヒトシイ \sim カ[°] \sim ニ

これが“那样的人”の論理式になる。この論理式は「u がそのようなであるという内包が「人間」という個体にあり外延化する、かつ、「人間」が u_n に等しい」と読む。

また、(74)の例の論理式は以下のように表すことができる。論理式は限定語に関わる“这么样的天气”の部分のみ記述することにする。

$$\begin{array}{ccccccc} \text{アル} & & \sim\text{ガ} & & \sim\text{デ} & & \\ (74\text{-}\textcircled{1}) & \text{在'} & \{ \text{ }^{\vee}\text{是'} & (\text{u, 这么样}), & \text{天气} \} & \& = ' & (\text{天气}, \text{u}_n) \\ \text{アル} & & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ニ} & & \text{ヒシイ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} \end{array}$$

これが“这么样的天气”の論理式である。この論理式は「uがこのようであるという内包が「天気」という個体にあり外延化する、かつ、「天気」が u_n に等しい」と読む。

(73)と(74)の論理式においても、“人”及び“天气”の連鎖が重要である。変項のuは「&」の右側の演算を義務化する。

次に、「場所・時間を表す限定語」を考えよう。

3.2.3 場所・時間を表す限定語の論理分析

丁声树等(1961)によれば、時間・場所限定語は中心語となる事物に関わる時間と場所を表す限定語である。具体的に、時間を表す限定語を時間限定語、場所を表す限定語を場所限定語と呼ぶ。時間や場所などを表す語句がこの種の限定語になれることは一般的である。

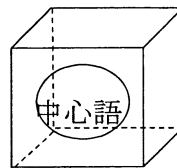
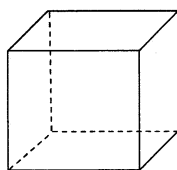
ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])に基づきここでの限定語を考えると、場所・時間を表す限定語と中心語の結合は恣意的なものではない。限定語は場所または時間と関わる「ある事態」を表している。その事態の可能性の全体は一つの論理空間を構成している。いわば、一つの論理空間は無数の可能性に満ちている。そして、中心語が表す「あるもの」をこの論理空間に入れると、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一確定される。そのために、場所・時間を表す限定語が中心語と結びつくことになる。つまり、次の(75)が示すように、場所・時間を表す限定語が中心語と結び付けられる可能性を保証するのは、場所・時間と関わる事態の可能性が事前に存在することである。

(75)

「場所・時間と関わる無数の事態の可能性」

「中心語」

「場所・時間を表す限定語+中心語」



(限定語により構成される論理空間)

(あるもの)

(確定された事態)

この類の限定語として次のような例を挙げている。

(76) 明儿下午的座谈会(明日午後の座談会) (丁声树等 1961 : 43)

(77) 海南的水果(海南の果物) (邢福义 1996 : 91)

時間を表す限定語になれるのは時間詞^(注10)だけではなくて、数量詞や一部の時間副詞も特定の文脈において、時間を表し、限定語になることができる。例えば、

(78) a. 一年(的)时间(一年の時間) (朱德熙 1982 : 52)

b. 曾经的梦想(昔の夢) (著者作例)

なお、“中国、北京”などのような地名や、“公園、图书馆”などのような場所と見なしうる機関や、“上、下、左、右”などのような方位詞は場所を表す限定語になることができる。

次に、「ものの結合の原理」に従って、前に挙げた(76)と(77)の例を論理式に表記する。まず、(76)の用例は限定語“明儿下午”が中心語“座谈会”の[時間](臨時的性質)を表している。「あるもの」である“座谈会”が「明日午後に何かがある」という「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものである“座谈会”において先取りされていなければならない。“座谈会”が生起しうる「事態の可能性」は次の(76-①)になる。

(76-①) 有' (明儿下午, u)

アル ～ニ ～ガ

「明日午後に何かがある」という事態の可能性が無数にあり、一つの論理空間に満ちている。したがって、この「明日午後に何かがある」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。たとえば、“明儿下午的座谈会(明日午後の座談会)”の他に、“明儿下午的运动會(明日午後の運動會)”、“明儿下午的电影(明日午後の映画)”、“明儿下午的比赛(明日午後の試合)”等々、無数の可能性が存在する。

(76-①)の論理式は「明日午後に u がある」と読める。この論理式において、「u」は「あるもの」を表す個体変項である。“明儿下午”が表す「明日午後にある」という事態([時間])は次の論理式の個体変項 u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ である可能世界のどれにも存在するので、内包である。そこで、(76-①)は次の(76-②)になる。

(76-②) ^有' (明儿下午, u)

そして、「あるもの」である“座谈会”を「明日午後に何かがある」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が、“座谈会”という個体に存在しているので次の(76-③)のように書ける。

(76-③) 在' {[^]有' (明儿下午, u), 座谈会}

アル ～ガ ～ニ

「あるもの」である“座谈会”を「明日午後に何かがある」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れると、時間を表す限定語“明儿下午”が中心語“座谈会”と結びつき、“明儿下午的座谈会”となり、事態の可能性が唯一に確定される。

そこで、(76-③)の論理式では“[^]有' (明儿下午, u)”という内包が“座谈会”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(76-④) 在' {[^]有' (明儿下午, u), 座谈会} & = ' (座谈会, u_n)

アル ～ガ ～ニ ヒシイ ～ガ ～ニ

これが(76)の連語全体の論理式になる。u_nの添え字のnはu_nが定項であることを示す。この論理式は「明日午後にuがあるという内包が「座谈会」という個体にあり外延化する、かつ、「座谈会」がu_nに等しい」と読む。この論理式で第一命題の第二項の“座谈会”が第二命題の第一項の“座谈会”と連鎖していることが分かる。

(77)は場所を表す限定語の用例である。この用例の論理式は(76)と同じ方法で、以下のように表すことができる。

(77-①) 在' {[^]有' (海南, u), 水果} & = ' (水果, u_n)

アル ～ガ ～ニ ヒシイ ～ガ ～ニ

まず、「あるもの」である“水果”が生起しうる「事態の可能性」は「海南に何かがある」である。全ての「事態の可能性」が一つの論理空間を構成している。そして、「あるもの」である“水果”をその論理空間に入れると、場所を表す限定語“海南”が中心語“水果”と結合し、“海南的水果”となり、事態の可能性が唯一に確定される。(77-①)の論理式は「海南にuがあるという内包が「果物」という個体にあり外延化する、かつ、「果物」がu_nに等しい」と読む。

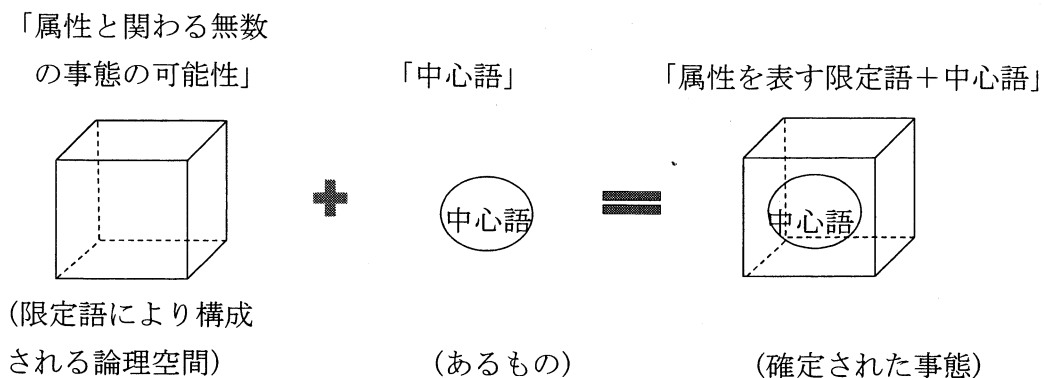
続いて属性を表す限定語について考察してみよう。

3.2.4 属性を表す限定語の論理分析

丁声树等(1961)は、属性を表す限定語は中心語となる事物の[属性]を表す限定語

であると述べている。ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])の考えを参考にしてここでの限定語を考えると、属性を表す限定語は恣意的に中心語と結びつくことでない。限定語は属性と関わる「ある事態」を表している。その全ての事態の可能性が一つの論理空間を構成している。言い換えれば、一つの論理空間は無数の可能性に満ちている。そして、中心語が表す「あるもの」をこの論理空間に入れると、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一に確定される。そうすると、属性を表す限定語が中心語と結合することになる。次の(79)が示すように、属性を表す限定語が中心語と結び付けられる可能性を保証するのは、属性と関わる事態の可能性が先に存在することである。

(79)



属性を表す限定語の範囲が広いので、本論文は次の三つのタイプに分けて説明することにする。まず性質・状態を表す限定語について考察しよう。

3.2.4.1 性質・状態を表す限定語の論理分析

性質・状態を表す限定語は中心語となる人間や事物に備わっている性質や本質または人間や事物が表す様態や様子などを表し、描写性を有する。このタイプの限定語は形容詞と各種類の形容詞構造から構成されることが一般的である。用例として以下のようなものがある。

- | | |
|---------------------|------------------|
| (80) 聪明的孩子(賢い子供) | (邢福义 1996 : 91) |
| (81) 全新的房子(真新しいハウス) | (丁声树等 1961 : 43) |

(80)の用例では、限定語“聪明”は「頭がよい、賢い」の意味であり、中心語“孩子”の[性質]を表している。(81)の用例では、限定語“全新”は「斬新、真新しい」の意味であり、中心語“房子”の[状態]を表している。

次に、(80)の例を論理式に表記する。この“聪明的孩子”がどのように成立するかを考えてみよう。この連語は「あるもの」つまり“孩子”が「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければな

らない。“孩子”が生起しうる「事態の可能性」は次の(80-①)になる。

(80-①) 聪明’ (u)

カシイ ～カ

(80)の用例では、事態の可能性は「誰かが賢い」である。この事態の可能性が数え切れないほど存在し、一つの論理空間を構成している。つまり、「誰かが賢い」が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。たとえば、“聪明的孩子(賢い子供)”の他に、“聪明的学生(賢い学生)”、“聪明的狗(賢い犬)”、“聪明的人(賢い人)”のような無数の可能性がある。

また、(80-①)の論理式は「uが賢い」と読める。この論理式では、「u」は「あるもの」を表す個体変項であり、個体変項の存在領域である $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ という可能世界の集合のどの要素にも存在しうる。つまり内包であるので、内包記号を付して(80-①)は次の(80-②)になる。

(80-②) \wedge 聪明’ (u)

そして、「あるもの」である“孩子”を「誰かが賢い」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れる。つまり、この[性質]という内包が、“孩子”に備わっているので次の(80-③)のように書ける。

(80-③) 在’ $\{\wedge$ 聪明’ (u), 孩子}

アル ～カ ～ニ

「あるもの」である“孩子”を「誰かが賢い」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れると、性質を表す限定語“聪明”が中心語“孩子”と結びつき、“聪明的孩子”となり、他の可能性が排除され、唯一の事態の可能性が確定される。(80-③)の論理式では“ \wedge 聪明’ (u)”という内包が“孩子”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(80-④) 在’ $\{\vee \wedge$ 聪明’ (u), 孩子} & =’ (孩子, u_n)

アル ～カ ～ニ ヒソイ ～カ ～ニ

これが(80)の連語全体の論理式になる。 u_n の添え字のnは u_n が定項であることを示す。この論理式は「uが賢いという内包が「子供」という個体にあり外延化する、かつ、「子供」が u_n に等しい」と読む。この論理式で、変項のuは「&」の左の命題の演算を「&」の右の命題での演算に強制することを示し、その強制は“孩子”が連鎖

することにより保証されている。

(81)の例も上記と同様に次のような論理式で表記することが可能である。

(81-①) 在' { \vee^{\wedge} 全新' (u) , 房子 } & = ' (房子, u_n)
アル ～が ～ニ ヒソイ ～が ～ニ

まず、「あるもの」である“房子”が生起しうる「事態の可能性」は「何かが真新しい」である。この「事態の可能性」が無数にあり、一つの論理空間を構成している。そして、「あるもの」である“房子”をその論理空間に入れると、状態を表す限定語“全新”が中心語“房子”と結合し、“全新的房子”が構成され、事態の可能性が唯一確定される。

(81-①)の論理式は「uが真新しいという内包が「ハウス」という個体にあり外延化する、かつ、「ハウス」が u_n に等しい」と読む。これが(81)全体の論理式になる。この論理式はここでも、“房子”の連鎖が必須である。

次に、「行為を表す限定語」を考察してみよう。

3.2.4.2 行為を表す限定語の論理分析

行為を表す限定語は中心語となる人間や事物と関わる行為や活動を表している。行為を表す限定語と中心語の間に限定語マーカー“的”をよく伴う。この種類の限定語になれるのは動詞、動詞句である。具体的には次の用例がある。

(82) 参观过我们车间的外宾(我々の作業場を見学したことがある外国からの客)

(83) 摘下来不久的苹果(先ほど摘み取ったリンゴ)

(邢福义 1996 : 92)

まず、(82)の例では、中心語“外宾”は限定語“参观过我们车间”にとって動作主(“施事”)となる。すなわち限定語の表す行為あるいは動作は中心語が指す人によって発動されたものである。中心語は動作主主語(“施事主語”)に変換することができ、(82a)のようになる。

(82a) 外宾参观过我们车间。(外国の客は我々の作業場を見学したことがある。)

(82)の意味を論理式で表示してみよう。中心語の“外宾”は「あるもの」であり、限定語となる“参观过我们车间”は「ある事態」である。「あるもの」が「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてははいけない。

まずはその事態の可能性に関する論理式を書く。その事態の可能性は「誰かが我々

の作業場を見学したことがある」である。その事態の可能性には、「誰かが我々の作業場を見学する」と「誰かが我々の作業場を見学したことがある」という二つの命題内容を含んでいる。この用例では“过”が「経験時態」を表し、日本語の意味は「…したことがある」である。したがって、“外宾”が生起しうる「事態の可能性」は次の(82-①)になる。

(82-①) 参观’ (u, 我们车间) & 有’ {参观’ (u, 我们车间), 过}
 見学スル ～ガ ～ヲ アル ～ガ [経験]デ

「誰かが我々の作業場を見学したことがある」という事態の可能性が複数あり、一つの限りなく広がっている論理空間を構成する。この「誰かが我々の作業場を見学したことがある」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では予定している。そこで、“参观过我们车间的外宾(我々の作業場を見学したことがある外国からの客)”の他に、“参观过我们车间的学生们(我々の作業場を見学したことがある学生達)”、“参观过我们车间的首脑(我々の作業場を見学したことがある首脳)”、“参观过我们车间的记者(我々の作業場を見学したことがある記者)”等のような無数の可能性が存在する。

(82-①)の論理式は「uが我々の作業場を見学する、かつ、uが我々の作業場を見学することが[経験]である。」の意を表している。最初に「uが我々の作業場を見学する」は“参观’ (u, 我们车间)”という単純命題で表記される。そして、“过”が「参照時間点」より前の已然の「不確定な経験」を表すので、“有’ {参观’ (u, 我们车间), 过}”という複合命題で表記される。これらの命題はこの順に同時に成立しなければならないので、それらを連言の論理結合子で結ぶ。この論理式は「事態の可能性」を表すので、個体変項uの領域{w₁, w₂, …, w_n}のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(82-①)は次の(82-②)になる。

(82-②) ^ [参观’ (u, 我们车间) & 有’ {参观’ (u, 我们车间), 过}]

次に、「あるもの」である“外宾”を「誰かが我々の作業場を見学したことがある」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が“外宾”という具体的な個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(82-③) 在’ 【 ^ [参观’ (u, 我们车间) & 有’ {参观’ (u, 我们车间), 过}], 外宾】
 アル ～ガ ～ニ

そして、「あるもの」である“外宾”を「誰かが我々の作業場を見学したことがある」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れると、行為を表す限定語“参观过我们车间”が中心語“外宾”と結びつき、“参观过我们车间的外宾”

(82-③)の論理式では“ \wedge [参观’ (u, 我们车间)&有’ {参观’ (u, 我们车间), 过}]”という内包が“外賓”という個体、つまり外延と結合することになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、(82-③)は次のようになる。

& = ' (外賓, u_n)

ヒトシイ ～ガ° ～ニ

限定語の表す行為あるいは動作は中心語が指す人あるいは事物によって発動される場合、中心語の指す人や事物はすでに限定語となる動詞や動詞句の動作主の役を務めている。中国語において、一つの動詞は通常二つの動作主成分をもつことができない。したがって、このタイプの限定語となる動詞や動詞句には、中心語の指す人や事物以外に、ほかの動作主を現す可能性はない。

(83a) 苹果摘下来不久。(リンゴは先ほど摘み取った。)

その事態の可能性は「先ほど何かを摘み取った」である。その事態の可能性には、「誰かが何かを摘む」と「何かが落ちる」と「何かが落ちることが先ほどである」という三つの命題内容が含まれている。そこで、「誰かが何かを摘む」という命題内容を“摘”(ϕ, u)と表記する。「誰か」という「不確定」な意味を持つ人物を「 ϕ 」で表記し、「ファイ」と読むことにする。“苹果”は変項になるので、「u」を用いて表記する。次に「何かが落ちる」という命題内容を“下来”(u)としてみよう。さらに、「何かが落ちることが先ほどである」という命題内容を“有”{下来’(u), 不久}

で表記する。以上の記述を総合すると、“苹果”が生起しうる「事態の可能性」は次の(83-①)のようになる。

(83-①) 摘' (ϕ, u) & 下来' (u) & 有' {下来' (u), 不久}

ツム ~ガ~ヲ オチル ~ガ アル ~ガ サキホトデ

「先ほど何かを摘み取った」という事態の可能性が無数あり、一つの論理空間を構成している。したがって、この「先ほど何かを摘み取った」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では予定していることになる。つまり、“摘下来不久的苹果(先ほど摘み取ったリンゴ)”以外に、“摘下来不久的香蕉(先ほど摘み取ったバナナ)”、“摘下来不久的草莓(先ほど摘み取ったいちご)”、“摘下来不久的花(先ほど摘み取った花)”等のような無数の可能性が存在する。

(83-①)の論理式は「 ϕ が u を摘む、かつ、 u が落ちる、かつ、 u が落ちることが先ほどである。」と読む。“摘下来不久”が表わす「先ほど何かを摘み取った」という事態は次の論理式の個体変項 u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ である可能世界のどれにも存在するので、内包である。そこで、(83-①)は次の(83-②)になる。

(83-②) \wedge [摘' (ϕ, u) & 下来' (u) & 有' {下来' (u), 不久}]

次に、「あるもの」である“苹果”を無数の事態の可能性から構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が“苹果”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(83-③) 在' 【 \wedge [摘' (ϕ, u) & 下来' (u) & 有' {下来' (u), 不久}], 苹果】

アル

~ガ

~ニ

「あるもの」である“苹果”を無数の事態の可能性から構成する論理空間に入れたとたんに、行為を表す限定語“摘下来不久”が中心語“苹果”と結び付き、“摘下来不久的苹果”を構成し、事態の可能性が唯一に確定される。

(83-③)の論理式では“ \wedge [摘' (ϕ, u) & 下来' (u) & 有' {下来' (u), 不久}]”という内包が“苹果”という個体、つまり外延と結合することになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、(83-③)は次のようになる。

(83-④) 在' 【 $\vee \wedge$ [摘' (ϕ, u) & 下来' (u) & 有' {下来' (u), 不久}], 苹果】

アル

~ガ

~ニ

& = ' (苹果, u_n)

ヒトシイ ~ガ ~ニ

これが(83)の論理式になる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「 ϕ が u を摘む、かつ、 u が落ちる、かつ、 u が落ちることが先ほどであるという内包が「リンゴ」という個体にあり外延化する、かつ、「リンゴ」が u_n に等しい」と読める。この論理式でも、“苹果”が第一命題の第二項と第二命題の第一項として連鎖していなければならない。

なお、朱德熙(1982)も、行為限定語の例として、次の例を挙げている。

(84) 喝水的杯子(水を飲むコップ)

(朱德熙 1982 : 140)

この二つの例では、“喝水”は述詞性動詞句であり、行為限定語となり、後ろの中心語“杯子”を修飾し、[用途]の意を表している。この例もこれまでと同様に以下のように表記することができる。

ミ ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~ニ

(84-①) 在' $[\vee \wedge$ [用' { ϕ, u , 喝' ($\phi, \text{水}$) & 在' ($\text{水}, u$)}], 杯子]

スル ~ガ ~デ ~コトヲ

アル ~ガ ~ニ

& = ' (杯子, u_n)

ヒトシイ ~ガ ~ニ

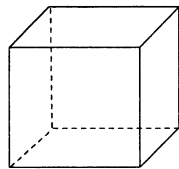
最後に「断定を表す限定語」を考えよう。

3.2.4.3 断定を表す限定語の論理分析

断定を表す限定語は、中心語となる人間や事物に対し何らかの断定をするという意味を表している。ウィトゲンシュタイン(1918 [2003])の考えに従ってここでの限定語を考えると、断定を表す限定語と中心語の結合も恣意的ではない。限定語は断定と関わる「ある事態」を表している。その無数の事態の可能性の総体を一つの論理空間に含んでいる。つまり、一つの論理空間は無数の事態の可能性に満ちている。そして、中心語が表す「あるもの」をこの論理空間に入れると、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一に確定される。そうすると、断定を表す限定語が中心語と結合することになる。次の(85)が示すように、断定と関わる事態の可能性が先に存在することは、断定を表す限定語が中心語と結合する可能性を保証するのである。

(85)

「断定と関わる無数
の事態の可能性」



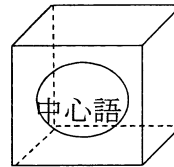
(限定語により構成
される論理空間)

「中心語」



(あるもの)

「断定を表す限定語＋中心語」



(確定された事態)

次に、具体的な用例を挙げながら考察してみよう。たとえば、

(86) 本是民兵队长的张丰 (民兵隊長である張豊)

(87) 有牙齿的动物 (歯がある動物)

(邢福义 1996 : 93)

断定を表す限定語は一般的に動詞句からなり、これらの動詞句に断定目的語（“断事宾语”）が含まれている。(86)の例では、“本是民兵队长”が断定を表す限定語であり、その中の“民兵队长”が断定目的語である。(87)の例では、“有牙齿”が断定を表す限定語であり、その中の“牙齿”が断定目的語である。また、断定を表す限定語に修飾される中心語は断定主語（“断事主语”）に変換することができる。たとえば、(86)と(87)の例は次のように変換できる。

(86a) 张丰本是民兵队长。(張豊は民兵隊長である。)

(87a) (这种) 动物有牙齿。((この)動物は歯がある。)

次に、(86)の例文を形式意味論の手法で分析する。“本是民兵队长的张丰”がどのように成立するかを考えてみよう。この連語は「あるもの」つまり“张丰”が「ある事態」つまり“本是民兵队长”のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。“张丰”が生起しうる「事態の可能性」は次の(86-①)になる。

(86-①) 是' (u, 民兵队长) & 有' {是' (u, 民兵队长), 本(来)}

アル ~ガ ~デ アル ~ガ ホライデ

“张丰”が生起しうる「事態の可能性」は「本来誰かが民兵隊長である」である。この事態の可能性が数え切れないほど存在している。全ての可能性が一つの論理空間

また、(86-①)の論理式は、まず“是”(u, 民兵隊長)”が「uが民兵隊長である」という意を表し、次に“有”{是”(u, 民兵隊長), 本(来)}”が「uが民兵隊長であるということが本来である」という意味を示している。そして、この論理式全体の意味は「uが民兵隊長である、かつ、uが民兵隊長であるということが本来である」と読む。この論理式の中で、“張丰”を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、uの領域{w₁, w₂, …, w_n}という可能世界の集合のどの要素にも存在しうる。つまり内包であるので、内包記号を付して次の(86-②)になる。

そして、「あるもの」である“張丰”を「本来誰かが民兵隊長である」という「事態の可能性」から構成する論理空間に入れる。つまり、この[断定]という内包が、“張丰”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

「あるもの」である“張丰”を「本来誰かが民兵隊長である」という「事態の可能性」から構成する論理空間に入れる瞬間に、断定を表す限定語“本是民兵队长”が中心語“張丰”と結びつき、“本是民兵队长的張丰”となり、事態の可能性が唯一に確定される。(86-③)の論理式では“ \wedge [是' (u, 民兵队长) & 有' {是' (u, 民兵队长), 本(来)}]”という内包が“張丰”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

これが“本是民兵隊長の張豊”の論理式になる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「 u が民兵隊長である、かつ、 u が民兵隊長であるということが本来であるという内包が「張豊」という個体にあり外延化する、かつ、「張豊」

が u_n に等しい」と読む。この論理式で第一命題の第二項の“张丰”が第二命題の第一項の“张丰”と連鎖していることが必須である。

(86)の例と同様に、(87)の例の論理式は次のように表記できる。

$$\begin{array}{c}
 \text{アル} \quad \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \\
 (87\text{-}\textcircled{1}) \text{ 在'} [\text{ }^{\vee\wedge}\text{有'} \{u, \text{有'} (u, \text{牙齿})\}, \text{动物}] \& = ' (\text{动物}, u_n) \\
 \text{モツ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{トウ(特性)}\text{ヲ} \\
 \text{アル} \quad \quad \quad \sim \text{ガ} \quad \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}
 \end{array}$$

これが(87)の連語全体の論理式である。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は、まず“有' (u , 牙齿)”が「 u に歯がある」という意を表わし、次に“有' { u , 有' (u , 牙齿)}”が「 u が u に歯があるという特性を持つ」の意味を表わしている。この論理式全体は「 u が u に歯があるという特性を持つという内包が「動物」という個体にあり外延化する、かつ、「動物」が u_n に等しい」と読める。この論理式においても、“动物”が第一命題の第二項と第二命題の第一項として連鎖していないなければならない。

3.3 所属性限定語の意味と論理分析

丁声树等(1961)によると、所属性限定語は限定語と中心語の間に存在する所属関係を表している。この種類の限定語は中心語の「所属・所有」の意味を表し、限定語になる語句が「持ち主・所有者(possessor)」であり、中心語になる語句が「被所有者(possessum)」である。

なお、「3.0」節に述べたように、邢福义(1996)は所属限定語について論じるとき、次のような例も挙げた。

- (88) a. 他的诸葛亮演得很好。(彼は诸葛亮という役をよく演じた。)
 b. 今天是你的主席。(今日はあなたが主席になる。)
 c. 你千万别打我的主意!(君は私に目をつけないてください!)
- (邢福义 1996 : 90) ((63)の再掲)

邢福义(1996)によれば、中国語では、“我(的)”、“你(的)”、“他(的)”のような形の限定語は、通常では所属限定語に属するが、時には(88)のように、所属限定語の形式を使うが、実際には所属限定語の意味を表していない。邢福义(1996)はこのような限定語を「偽性の所属限定語」と呼ぶ。

また、朱德熙(1982)もこのような限定語を「準限定語(“准定语”）」と呼び、本来ならば、所属関係を表すべきであるが、いずれも所属関係を表すものではないと指摘している。

したがって、本節では、丁声树等(1961)、邢福义(1996)と朱德熙(1982)の観点に基

づき、所属性限定語を「典型的な所属性限定語」と「特殊な所属性限定語」の二つに大別し考察することにする。

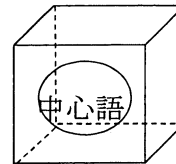
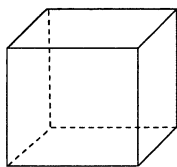
考察する際は、ウィトゲンシュタインの論考をヒントに本論文が提出した「ものの結合の原理」を元に、分析を進める。「ものの結合の原理」によると、所属を表す限定語と中心語の結合も恣意的なものではない。限定語は所属と関わる「ある事態」を表している。あらゆる事態の可能性の全体が一つの論理空間を構成している。即ち、一つの論理空間は無数の事態の可能性に満ちている。そして、中心語が表す「あるもの」をこの論理空間に入れると、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一確定される。そうすると、所属を表す限定語が中心語と結合することになる。次の(89)のように、所属と関わる事態の可能性が先に存在することは、所属を表す限定語が中心語と結合する可能性を保証するのである。

(89)

「所属と関わる無数
の事態の可能性」

「中心語」

「所属を表す限定語＋中心語」



(限定語により構成
される論理空間)

(あるもの)

(確定された事態)

まず「典型的な所属性限定語」について用例を挙げて分析しよう。

3.3.1 典型的な所属性限定語の論理分析

典型的な所属性限定語は、「所有者」と「被所有者」の関係がその含む意味の違いによって二種類に分けられる。その一つは臨時的または非必然的な所有関係であり、「譲渡可能所有関係(“可让渡领属关系” alienable possession)」と呼ぶ。もう一つは人とその家族親族の間、人間や動植物とその身体各部分の間に存在する永久的あるいは必然的な所有関係であり、「譲渡不可能所有関係(“不可让渡领属关系” inalienable possession)」と呼ぶ^(注11)。たとえば、

(90) 他的小猫(彼の子猫)

(91) 小猫的眼睛(子猫の目)

(邢福义 1996 : 89)

(90)の連語では、“他”が「所有者」であり、“小猫”が「被所有者」である。“他”と“小猫”は譲渡可能所有関係であるので、“小猫”の所有権を他人に譲り渡すことが可能である。

(91)の連語では、“小猫”を「所有者」、「眼睛」を「被所有者」と称してよい。“小猫”は“眼睛”の所有者であるが、“眼睛”が“小猫”の体の一部分であるので、“眼睛”の所有権を他人に譲り渡すことができない。

次に、「ものの結合の原理」に従って、この二つの用例を考察する。まず(90)の用例を論理式で表記してみよう。この表現は「あるもの」つまり“小猫”が「ある事態」つまり「彼が何かを持つ」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならないので、次の(90-①)になる。

(90-①)有' (他, u) & 在' (u, 他)

モツ ～ガ' ～ヲ アル ～ガ' ～ニ

“小猫”が存在できる「事態の可能性」は「彼が何かを持つ」である。この事態の可能性が無数あり、一つの論理空間を構成している。「彼が何かを持つ」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになるので、“他的小猫(彼の子猫)”のはかに、“他的书(彼の本)”、“他的笔记本电脑(彼のパソコン)”などのように、様々な可能性が存在する。

(90-①)の論理式は「彼が u を持つ、かつ、u が彼にある」と読む。この論理式の中で、“小猫”を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(90-①)は次の(90-②)になる。

(90-②) $\wedge \{ \text{有}' (\text{他}, u) \& \text{在}' (u, \text{他}) \}$

続いて、「あるもの」である“小猫”を「彼が何かを持つ」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が、“小猫”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(90-③) 在' [$\wedge \{ \text{有}' (\text{他}, u) \& \text{在}' (u, \text{他}) \}$, 小猫]

アル ～ガ' ～ニ

「あるもの」である“小猫”を「彼が何かを持つ」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れる瞬間、所属を表す限定語“他”が中心語“小猫”と結びつき、“他的小猫”となり、事態の可能性が唯一に確定され、他の可能性が排除される。

(90-③)の論理式では“ $\wedge \{ \text{有}' (\text{他}, u) \& \text{在}' (u, \text{他}) \}$ ”という内包が“小猫”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。「 \vee 」は外延化を示す。

アル ～カ^{*} ～ニ ヒトシイ ～カ^{*} ～ニ

次に、(91)の例を見てみよう。まず、この例では「あるもの」つまり“眼睛”が「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて、先取りされていなければならない。この「事態の可能性」を論理式に書くと次の(91-①)になる。

モツ 〜ガ^ニ 〜ヲ アル 〜ガ^ニ 〜ニ

(91-①)の論理式は「子猫が u を持つ、かつ、 u が子猫にある」と読む。この論理式の中で、“眼睛”は変項になるので、「 u 」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、 u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(91-①)は次の(91-②)になる。

そして、「あるもの」である“眼睛”を「子猫が何かを持つ」という「事態の可能」により構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が、“眼睛”という個体存在しているので次の(91-③)のように書ける。

アル , ～カ^d ～二

「あるもの」である“眼睛”を「子猫が何かを持つ」という「事態の可能性」による構成される論理空間に入れると、所属を表す限定語“小猫”が中心語“眼睛”と結びつき、“小猫的眼睛”を構成し、事態の可能性が唯一に確定される。

(91-③)の論理式では“ $\wedge\{\text{有}'(\text{小猫}, u) \& \text{在}'(u, \text{小猫})\}$ ”という内包が“眼睛”という個体、つまり外延と結合することになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次の(91-④)になる。

$$(91-④) \text{在}' [\underbrace{\vee \wedge \{\text{有}'(\text{小猫}, u) \& \text{在}'(u, \text{小猫})\}}_{\text{アル}} , \underbrace{\text{眼睛}}_{\sim \text{ガ}}] \& \underbrace{=}^{\sim \text{ニ}} (\underbrace{\text{眼睛}}_{\text{ヒトシ}} , \underbrace{u_n}_{\sim \text{ガ} \sim \text{ニ}})$$

これが(91)の連語全体の論理式になる。 u_n の添え字のnは u_n が定項であることを示している。この論理式は「子猫がuを持つ、かつ、uが子猫にあるという内包が「目」という個体にあり外延化する、かつ、「目」が u_n に等しい」と読む。この論理式で第一命題の第二項の“眼睛”が第二命題の第一項の“眼睛”と連鎖していることに注意されたい。変項uの存在は、「&」の右側の命題の演算を義務化する。

“眼睛”“手”“尾巴”などのような人間や動物の体の一部分を表す名詞、または“根”“叶子”などのような植物の一部分を表す名詞が中心語になり、「被所有物」の意味を表すとき、限定語になる「持ち主・所有者」とは分割してはいけない依存関係を持っているので、「所有権」はほかの人に移動することができない。

次に、特殊な所属性限定語を考察しよう。

3.3.2 特殊な所属性限定語の論理分析

前節では、典型的の所属性限定語について論じたが、実際には、次のような特殊な所属性限定語も存在している。

- (92) a. 张三的原告, 李四的被告 (张三の原告、李四の被告)
 b. 他的篮球打得好 (彼のバスケットボールがうまい)
 c. 我来帮你的忙 (私が君に手伝ってやろう)

(朱德熙 1982 : 146) ((64)の再掲)

朱德熙(1982)によれば、これらの限定語はすべて人間を表す名詞或いは人称代詞から構成され、本来ならば、所属関係を表すべきであるが、この三つの例に現れる“我的”、“你的”、“他的”はいずれも所属関係を表すものではない。朱德熙はこのような限定語を「準限定語(“准定语”)」と呼ぶ。

また、邢福义(1996)はこのような限定語は所属限定語の形式を有しているが、実際には所属限定語の意味を表していないので、「偽性の所属限定語(“假领属定语”)」と呼ぶ。さらに、黄国营(1981)はこのような限定語を「偽限定語(“伪定语”)」と呼び、张伯江(1994)は「広義の所属限定語(“广义领属定语”)」と呼ぶ。

この種類の所属性限定語は形式上は典型的な所属性限定語と同じであるが、意味上は「所有者－被所有者」の所属関係を持っていないので、本論文ではこのような所属性限定語を「特殊な所属性限定語」として捉えることにする。本節では、朱德熙(1982)の論じた内容を参考にし、特殊な所属性限定語の意味類型を次の三つのタイプに区分し、形式意味論の演繹的方法を使って分析する。

3.3.2.1 “张三的原告”類

まず、朱德熙(1982)は「準限定語」について分析する時、次のような例を挙げている。

(93) 张三的原告 (張三の原告)

(94) 今天老张的主席 (今日は張三の主席である)

(朱德熙 1982 : 146)

朱德熙の分析では、このタイプの文構造の前にはすべて“是”を加えることが可能である。“是”を加えると、次のように文末の名詞を文頭に移して主語に転じることができる。

(93a) 原告是张三 (原告は張三である)

(94a) 今天主席是老张 (今日は主席は張さんである)

つまり、統語構造から考えると、(93)の文においては、“张三”が限定語で、“原告”が中心語であり、「定中構造」を構成している。また、(94)の文においては“老张”が限定語で、“主席”が中心語で、「定中構造」を構成している。しかし、意味から見れば、これらの限定語と中心語の間には「修飾－被修飾」の関係が存在せず、[判断]の意味を表している。この二つの文は次のように人間の役割の判断を表す“是”構文に変換することができる。

(93b) 张三是原告 (張三は原告である)

(94b) 今天老张是主席 (今日は張さんは主席である)

次に、(93)の文の論理式を書いてみよう。この例の限定語はすでに修飾の意味を失ってしまい、[判断]の意味になるので、この意味を明示するには、“是”関数“是’(α , β)”として捉えることにすればよい。

この“张三的原告”がどのように成立するかを考えてみよう。この連語は「あるもの」つまり“原告”が「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。“原告”が生起しうる「事態の可能性」は次の(93-①)になる。

(93-①) 是' (张三, u)

アル ～ガ' ～デ'

(93)の用例において、“原告”が生起しうる「事態の可能性」は「張三が何かである」である。この事態の可能性が無数あり、一つの論理空間を構成している。言い換えれば、「張三が何かである」という事態が他の色々な物と結びつく可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。そうすると、“张三的原告(張三の原告)”のはかに、“张三的被告(張三の被告)”、“张三的社长(張三の社長)”のような無限の可能性がある。

(93-①)の論理式は「張三がuである」という意を表す。この論理式の中で、“原告”は変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、uの領域{w₁, w₂, ..., w_n}のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので、(93-①)は次の(93-②)になる。

(93-②) ^是' (张三, u)

そして、「あるもの」である“原告”を「張三が何かである」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れる。つまり、この[役割の判断]という内包が、“原告”という個体に存在しているので論理式は次のように書ける。

(93-③) 在' {^是' (张三, u), 原告}

アル ～ガ' ～ニ

「あるもの」である“原告”を「張三が何かである」という「事態の可能性」で構成する論理空間に入れると、限定語“张三”と中心語“原告”が結合し、“张三的原告”になり、事態の可能性が確定される。(93-③)の論理式では“^是' (张三, u)”という内包が“原告”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(93-④) 在' {^ ^是' (张三, u), 原告} & =' (原告, u_n)

アル ～ガ' ～ニ ヒトシイ ～ガ' ～ニ

これが(93)の例の論理式になる。この論理式で、「&」の左の命題に変項uが含まれることはさらに演算を「&」の右の命題で実施することを強制する。この「強制」を保証するのが“原告”の連鎖である。この論理式は「張三がuであるという内包が「原告」という個体にあり外延化する、かつ、「原告」がu_nに等しい」と読む。

この論理式によって、限定語である“张三”は意味上“是”構文の主語となり、中

心語の“原告”は連鎖関係により“是”構文の目的語となることがわかる。

以上の解析方法に倣うと、(94)の“老张的主席”の部分についても同様に解釈することができる。従って、(94)の“老张的主席”の部分を論理式にして表すと、

$$\begin{array}{c} \text{アル} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{デ} \\ (94\text{-}\textcircled{1}) \text{在'} \{ \vee^{\wedge} \text{是'} (老张, u), \text{主席} \} \& = ' (主席, u_n) \\ \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{ガ} \quad \quad \quad \sim\text{ニ} \quad \quad \quad \text{ヒシイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

と書ける。この論理式は“是’(老张, u)”が「張さんがuである」という意味を表し、論理式全体が「張さんがuであるという内包が「主席」という個体にあり外延化する、かつ、「主席」が u_n に等しい」という意味を表している。この論理式の“是’(老张, u)”の中の第1項である“老张”は統語上は限定語であるが、意味上は“是”構文の主語となる。“主席”は統語上は中心語であるが、連鎖関係により意味上“是”構文の目的語となる。

このタイプの「定中構造」は、統語上「限定語—中心語」の関係を構成しているが、意味上は動詞“是”により構成される役割判断文である。限定語に対し、後ろの中心語になれるのは、“原告, 主席, ……”等のような職業や役柄など社会関係に存在する身分を表す名詞或いは名詞性構造である。

このように、このタイプの定中構造の論理式は、「是’」を関数とする2項関数と捕らえることができるので、論理式は次のように書ける。ここで、変項のuは「&」の左側の命題の演算を「&」の右側の命題での演算に強制することを示し、その強制は[社会身分]が連鎖することにより保証されている。

$$(95) \text{在'} \{ \vee^{\wedge} \text{是'} (\alpha, u), [\text{社会身分}] \} \& = ' ([\text{社会身分}], u_n)$$

3.3.2.2 “他的篮球打得好”類

また、朱德熙(1982)は「準限定語」について、次の例も挙げた。

(96) 他的篮球打得好(彼のバスケットボールがうまい)

(97) 你的老师当得不错(君は先生の仕事をよくやった)

(朱德熙 1982 : 146)

朱德熙(1982)の分析によると、このタイプの文構造はすべて“的”を落とすことにより、次のように定中構造が、主述構造が述語となる文に変換することができる。

(96a) 他的篮球打得好 → 他篮球打得好

(97a) 你的老师当得不错 → 你老师当得不错

さらに、述語となる主述構造に動詞を補足することによって、主述構造を動目構造に変換することもできる。

(96b) 他籃球打得好 → 他打籃球打得好

(97b) 你老师当得不错 → 你当老师当得不错

これらの変換式から、このタイプの定中構造は、限定語となる名詞と中心語になる名詞の間で「修飾－被修飾」の関係を持たず、「動作主－受動者」の意味関係を持っていることがわかる。(96)の文では、“他”が動作主であり、“籃球”が受動者である。(97)の文では、“你”が動作主であり、“老师”が受動者である。

また、次の文を比較してみよう。

(98) 他的籃球打坏了(彼のバスケットボールが壊れた。)

(99) 你的老师教得好(君の先生はうまく教えた。)

この二つの文における限定語“他”、“你”と中心語“籃球”、“老师”はそれぞれ「修飾－被修飾」の関係を持っていて、[所属]の意味を表している。

(96)と(98)の文における“他的籃球”は、統語上からみると、いずれも限定語と中心語からなる「定中構造」であるが、意味からみれば、(96)の“他”と“籃球”の間には「動作主－受動物」の意味関係があり、(98)の“他”と“籃球”の間には「所有者－被所有物」の意味関係がある。同様に、(97)と(99)の文における“你的老师”という連語は、統語上から考えると、いずれも限定語と中心語からなる「定中構造」であるが、意味上は、(97)の“你”と“老师”の間には「動作主－受動者」の意味関係があり、(99)の“你”と“老师”の間には「所有者－被所有者」の意味関係がある。

また、李紹群(2011: 45)では、(96)と(97)の中の“籃球”、“老师”は「無指示(“无指” non-referential)」であり、(98)と(99)の中の“籃球”、“老师”は「有指示(“有指” referential)」であると述べている。即ち、(96)と(97)の中の“籃球”、“老师”はある具体的な物や人を指すことではなくて、その名詞の抽象的な意味を表す。(98)と(99)の中の“籃球”、“老师”は具体的な人や物を指す。つまり、確定的なバスケットボールや先生を指している。

そこで、以上の考察を踏まえて、(96)の文の“他的籃球”を中心に議論することにする。“他的籃球”という連語は実は「彼がバスケットボールをする」という意味を表すので、述語論理によって表記すると“打”(α , β)という命題として捉えることにするとよい。

“籃球”という「あるもの」が「彼が何かをする」という「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。そこで、まず“籃球”が生起しうる「事態の可能性」は次の(96-①)になる。

(96-①) 打' (他, u)

スル ～ガ' ～ヲ

(96)の用例では、“籃球”が生起しうる「事態の可能性」は「彼が何かをする」である。この事態の可能性が無限にあり、一つの論理空間に満ちている。つまり、「彼が何かをする」という事態が他の色々な物と結びつく可能性も論理空間の中では予定していることになる。その結果、“他的籃球(彼のバスケットボール)”のほかにも、“他的网球(彼のテニス)”、“他的乒乓球(彼の卓球)”等々、無限の可能性がある。

また、(96-①)の論理式は「彼がuをする」という意を表す。この論理式の中では、“籃球”を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、uの領域{w₁, w₂, ..., w_n}である可能世界のどれにも存在するので、内包である。そこで、(96-①)は次の(96-②)になる。

(96-②) ^打' (他, u)

次に、「あるもの」である“籃球”を「彼が何かをする」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が“籃球”という個体に存在しているので、次の論理式が書ける。

(96-③) 在' {^打' (他, u), 籃球}

アル ～ガ' ～ニ

「あるもの」である“籃球”を「彼が何かをする」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れると、限定語“他”と中心語“籃球”が結合して、“他的籃球”を構成し、事態の可能性が唯一に確定される。

(96-③)の論理式では、“^打' (他, u)”という内包が“籃球”という個体、つまり外延と結合することになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(96-④) 在' {^打' (他, u), 籃球} & =' (籃球, u_n)

アル ～ガ' ～ニ ヒトシイ ～ガ' ～ニ

これが(96)の例の論理式である。この論理式は「彼がuをするという内包が「バスケットボール」という個体にあり外延化する、かつ、「バスケットボール」がu_nに等しい」と読む。この論理式にある“打' (他, u)”は“他”が[動作主]であることを明示している。また、連鎖関係によって“籃球”が[受動物]の意味役割を持つことがわかる。即ち、限定語“他”と中心語“籃球”の間に「動作主—受動物」の意味関係がある。

続いて、(97)の文の“你的老师”を中心に議論することにする。この例も(96)と同様に論理表記しておこう

$$\begin{array}{ccccccc} \text{ナル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & & & & \\ (97\text{-}\textcircled{1}) & \text{在'} & \{\text{V}^{\wedge}\text{当'} & (\text{你}, \text{u}), & \text{老师}\} & \& \text{' (老师}, \text{u}_n) \\ & \text{アル} & & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & \text{ヒトシイ} & \sim\text{ガ} \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は“当’ (你, u)”が「君が u になる」という意を表し、論理式全体が「君が u になるという内包が「先生」という個体にあり外延化する、かつ、「先生」が u_n に等しい」という意味を表している。この論理式にある“当’ (你, u)”は“你”が[動作主]であることを明示している。また、連鎖関係により“老师”が[受動者]であることがわかる。

前述のように、このタイプでは、限定語が表す人や物は、動作を行う側（[動作主]）であり、中心語が表す人や物は動作や動作の影響を受ける側（[受動者]）であり、限定語と中心語の間に「動作主－受動者」の意味関係があることがわかる。

3.3.2.3 “我来帮你的忙”類

最後に、朱德熙(1982)で論じた「準限定語」のもう一つのタイプについて考察してみよう。次のような例がある。

(100) 我来帮你的忙(私が君に手伝ってやろう)

(朱德熙 1982 : 146)

朱德熙(1982)によると、動目構造は目的語をとれないが、意味の面から言えば、動目構造に受動者が存在することはありえる。通常、他動詞の場合に、意味上の受動者が目的語の位置に現れうるが、動目構造それ自身は目的語をとることができない。そこで、受動者を文に表すには、三つの方法が用いられる。一つは、受動者を二重目的語構造における近置目的語として表す。もう一つは、前置詞を用いて受動者を導入する。最後は、受動者を準限定語として表す。

この観点に基づく、(100)の文の中の限定語“你”は中心語“忙”を修飾するのではなく、動目構造“帮忙”の受動者を表す。即ち、限定語“你”は中心語を修飾するのではなく、述語動詞“帮”の受動者としての対象を表すことになる。

このような考察は他の研究者による見解とも整合性を有する。例えば、蔡淑美(2010)はこのタイプの限定語を「特殊与格構造 V+X+的+0」と呼び、「X は V0 の対象成分であるが、統語構造の面からみれば、動作の対象がよく現れる目的語の位置に置かず、0 の限定語の位置に現れる。この時は一般的な限定語と明らかに異なっている」と述べている。具体的な例として以下のものがある。

次に、「あるもの」である“忙”を「私が何かをするということが君に到る」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が“忙”という個体に存在しているので、次の論理式が書ける。

(100-③) 在' $\left[\begin{array}{c} \text{アル} \\ \text{^対'} \end{array} \left[\begin{array}{c} \text{我, 你, 帮'} \\ \text{(我, u) \& 到'} \end{array} \right] \left\{ \begin{array}{c} \text{帮'} \\ \text{(我, u), 你} \end{array} \right\} \right], \text{忙}$ $\begin{array}{cc} \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} \end{array}$

そして、「あるもの」である“忙”を「私が何かをするということが君に到る」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れる瞬間、限定語“你”と中心語“忙”が結合し、“你的忙”になり、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一に確定される。(100-③)の論理式では、“^対' [我, 你, 帮' (我, u) & 到' {帮' (我, u), 你}]”という内包が“忙”という個体、つまり外延と結合することになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(100-④) 在' $\left[\begin{array}{c} \text{アル} \\ \text{^V対'} \end{array} \left[\begin{array}{c} \text{我, 你, 帮'} \\ \text{(我, u) \& 到'} \end{array} \right] \left\{ \begin{array}{c} \text{帮'} \\ \text{(我, u), 你} \end{array} \right\} \right], \text{忙}$ $\begin{array}{cc} \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} \end{array}$
 $\& = ' (\text{忙}, u_n)$
 $\begin{array}{ccc} \text{ヒトシ} & \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} \end{array}$

論理式全体が「私が君に、私がuをする、かつ、私がuすることが君に到るということをする」という内包が「助け」という個体にあり外延化する、かつ、「助け」が u_n に等しい」という意味を表している。以上の論理式による解釈によって、“你”は[受動者]であり、動作“帮忙”の対象であることを厳密に明示することができた。この論理式では「&」の前の命題の第二項の“忙”と「&」の後の命題の第一項の“忙”が連鎖している。“忙”は統語的には自立語ではないが、意味的には自立成分として捕える。

続いて、(101)の例を“他捣你的鬼”に簡略して考察しておこう。(101)の文では、限定語“你”は統語上後ろの中心語“鬼”と「定中構造」を構成するが、意味の面から考えると、限定語“你”は動目構造の単語“捣鬼”が表す動作の受け手、つまり受動者としての動作対象である。この文では、“他”が“捣鬼”ということをすることによって、“你”が何らかの被害を受けるので、“你”は受動者と同時に被害者でもある。(101)の文の意味を論理式で表記すると、次のようになる。

(101-①) 在' $\left[\begin{array}{c} \text{スル} \\ \text{^V対'} \end{array} \left\{ \begin{array}{c} \sim \text{ガ} \sim \text{ヲ} \text{イタル} \\ \text{他, 你, 捣'} \end{array} \right\} \left(\begin{array}{c} \text{他, u) \& 到'} \\ \text{(u, 你)} \end{array} \right), \text{鬼}$ $\begin{array}{cc} \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} \end{array}$
 $\begin{array}{ccc} \text{スル} & \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} \end{array}$ $\begin{array}{cc} \sim \text{トイウコトヲ} & \end{array}$
 $\begin{array}{ccc} \text{アル} & \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} \end{array}$
 $\& = ' (\text{鬼}, u_n)$

この論理式は“搗’ (他, u)”が「彼が u をする」という意を示し、“到’ (u, 你)”が「u が君に到る」という意を示している。“対’ {他, 你, 搗’ (他, u) & 到’ (u, 你)}”は「君が彼に、彼が u をする、かつ、u が君に到るということをする」と読む。そして、この論理式全体は「君が彼に、彼が u をする、かつ、u が君に到るということをする」という内包が「悪さ」という個体にあり外延化する、かつ、「悪さ」が u_n に等しい」と読める。

この論理式によって、限定語である“你”は[受動者]の意味を表すことが明示され、また、動作“搗鬼”の対象であることもわかる。この論理式においても、「&」の前の命題の第二項の“鬼”と「&」の後の命題の第一項の“鬼”が連鎖している。“鬼”は統語的には自立語ではないが、意味的には自立成分と捉える。

最後に、(102)の例の“我们吃这小子的亏”を中心に議論を進めていこう。限定語“这小子”は統語上後の中心語“亏”と「定中構造」を構成しているが、意味上は限定語“这小子”は動目構造の単語“吃亏”が表す動作の対象ではなくて、執行者である。“我们”が“吃亏”の対象である。つまり、“这小子”は「動作主」であり、“我们”は「受動者」である。また、“这小子”は“我们”に“吃亏”ということをしてさせるので、“这小子”が「使役者」であり、“我们”が「被使役者」である。この分析を踏まえて、(102)の文の意味を論理式で表記すると、次のようになる。

$$\begin{array}{c}
 \text{スル} \quad \sim\text{ガ}^{\circ} \quad \sim\text{ヲ} \\
 (102\text{-}\textcircled{1}) \text{ 在' } \left[\text{ }^{\vee}\text{対' } \left[\text{这小子, 我们, 让' } \{ \text{这小子, 我们, 吃' (我们, u) } \} \right], \text{亏} \right] \\
 \text{サセル} \quad \sim\text{ガ}^{\circ} \quad \sim\text{ニ} \quad \sim\text{トイコトヲ} \\
 \text{スル} \quad \sim\text{ガ}^{\circ} \quad \sim\text{ニ} \quad \sim\text{トイコトヲ} \\
 \text{アル} \quad \sim\text{ガ}^{\circ} \quad \sim\text{ニ} \\
 \& = ' (\text{亏}, u_n) \\
 \text{ヒトシイ} \quad \sim\text{ガ}^{\circ} \quad \sim\text{ニ}
 \end{array}$$

この論理式は、“吃’ (我们, u)”が「私達が u をする」という意を表し、“让’ {这小子, 我们, 吃’ (我们, u)}”が「こいつが私達に、私達が u をするということをしてさせる」という使役の意味を表し、“対’ [这小子, 我们, 让’ {这小子, 我们, 吃’ (我们, u)}]”が「こいつが私達に、こいつが私達に、私達が u をするということをしてさせる、ということをする」という意を表している。この論理式全体は「(こいつが私達に、こいつが私達に、私達が u をするということをしてさせる、ということをする)」という内包が「損」という個体にあり外延化する、かつ、「損」が u_n に等しい」と読める。この例においても、「&」の前の命題の第二項の“亏”と「&」の後の命題の第一項の“亏”が連鎖していることが重要である。“亏”は統語上は自立語ではないが、意味上は自立成分として捉えるのである。

この論理式によって、限定語である“这小子”が[動作主]を表すことを明示し、また、「使役者である」という内在する意味を記述することもできた。

以上の三つの例文の分析により、このタイプの限定語は意味上、述語動詞が表す動作の受動者となることもあるし、述語動詞が表す動作の動作主となることもある、ということがわかる。

最後に、「同一性限定語」について考察しよう。

3.4 同一性限定語の意味と論理分析

丁声树等(1961)は、中心語と同格関係がある限定語を「同一性限定語」と呼んでいる。さらに、朱德熙(1982: 144)では、このような限定語を「同格性限定語」と呼び、「限定語の部分が偏正構造全体を指示代替できる」と指摘している。

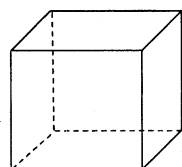
前述した内容と同様に、「ものの結合の原理」によると、同一性限定語と中心語の結合もけっして恣意的ではない。同一性限定語は同格関係と関わる「ある事態」を表している。その事態の可能性は無数であり、一つの論理空間を構成している。言い換えれば、この論理空間は同格関係と関わる事態のすべての可能性を含んでいる。次の(103)のように、中心語が表す「あるもの」をこの事態の全ての可能性を含んでいる論理空間に入れたとたんに、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一に確定される。そうすると、同一性限定語が中心語と結びつくことになる。

(103)

「同格関係と関わる無
数の事態の可能性」

「中心語」

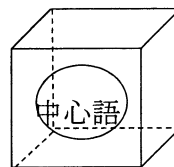
「同格関係を表す限定語＋中心語」



+



=



(限定語により構成
される論理空間)

(あるもの)

(確定された事態)

具体的に、次のような用例がある。

(104) 两公婆吵架的小事(夫婦げんかのささいなこと)

(丁声树等 1961: 45)

(105) 语义特征分析的方法(意味特徴分析の方法)

(邢福义 1996: 93)

(104)の用例では、“小事”は何を指しているかということ、“两公婆吵架”のことである。同様に、(105)の用例では、“方法”は具体的に何を指しているかということ、“语义特征分析”のことである。つまり、同一性限定語は中心語となる事物に対する具体的な解釈や説明であり、限定語と中心語は同じ対象を指している。したがって、この

種類の定中構造“X 的 Y”は“X 这种 Y”のような同格構造に変換できる。たとえば、(104)と(105)の例は次のように変換することができる。

(104a) 两公婆吵架这种小事(夫婦げんかというささいなこと)

(105a) 语义特征分析这种方法(意味特徴分析という方法)

次に、(104)の例の意味を論理式で表示してみよう。中心語の“小事”は「あるもの」であり、限定語は「ある事態」を構成する。「あるもの」が「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはいけない。まずはその事態の可能性に関する論理式を書く。“小事”が生起しうる「事態の可能性」は次の(104-①)になる。

(104-①) 是' (u, 两公婆吵架)

アル ～が ～デ

(104)の用例において、“小事”が生起しうる「事態の可能性」は「何かかが夫婦げんかである」である。この事態の可能性が無数あり、一つの論理空間を構成している。すなわち、「何かかが夫婦げんかである」という事態が他の様々な物と結びつく可能性が論理空間の中では先取りされていることになる。

(104-①)の論理式は「u が夫婦げんかである」と読める。この論理式の中で、“小事”は変項になるので、「u」を用いてで表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので、(104-①)は次の(104-②)になる。

(104-②) ^是' (u, 两公婆吵架)

次に、「あるもの」である“小事”を「何かかが夫婦げんかである」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が、“小事”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(104-③) 在' {^是' (u, 两公婆吵架), 小事}

アル ～が ～ニ

そして、「あるもの」である“小事”を「何かかが夫婦げんかである」という「事態の可能性」が構成する論理空間に入れると、限定語“两公婆吵架”と中心語“小事”が結合し、“两公婆吵架的小事”になり、他の可能性が排除され、事態の可能性が唯一に確定される。(104-③)の論理式では、“^是' (u, 两公婆吵架)”という内包が“小事”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定さ

れて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

$$(104-④) \text{在'} \{ \overset{\vee}{\wedge} \text{是'} (u, \text{两公婆吵架}), \text{小事} \} \& = ' (\text{小事}, u_n)$$

アル ～ガ ～ニ ヒトシ ～ガ ～ニ

これが(104)の例の論理式になる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「 u が夫婦げんかであるという内包が「ささいな事」という個体にあり外延化する、かつ、「ささいな事」が u_n に等しい」と読む。ここでも、“小事”が連鎖していることに注意されたい。

同様に、(105)の用例の論理式は次のように表記できる。

$$(105-①) \text{在'} \{ \overset{\vee}{\wedge} \text{是'} (u, \text{语义特征分析}), \text{方法} \} \& = ' (\text{方法}, u_n)$$

アル ～ガ ～デ ～ニ ヒトシ ～ガ ～ニ

(105)の用例において、まず、「あるもの」である“方法”が生起しうる「事態の可能性」は「何かの意味特徴分析である」である。その全ての「事態の可能性」が一つの論理空間を構成している。そして、「あるもの」である“方法”をその論理空間に入れると、同一性限定語“语义特征分析”が中心語“方法”と結合し、“语义特征分析的方法”となり、事態の可能性が唯一に確定される。

(105-①)が(105)の用例全体の論理式である。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「 u が意味特徴分析であるという内包が「方法」という個体にあり外延化する、かつ、「方法」が u_n に等しい」と読める。“方法”の連鎖が重要である。

以上、「一般性限定語」、「所属性限定語」と「同一性限定語」の三種類の意味類型について、形式意味論の演繹的手法を用いて論理式で表記し、分析した。

3.5 本章の結び

本章では、丁声树等(1961)の分類方法をもとに、邢福义(1996)と朱德熙(1982)の観点も参考にして、現代中国語の限定語の意味類型を形式意味論の立場から考察した。分析する際に、各種類の限定語について、論理式を用いて、それぞれ明示的に記述した。最後に、すべての限定語と中心語の意味関係を明示できる基本的な論理構造の一般化された表示をまとめる。

中心語は「あるもの」であり、「 v 」で表記する。限定語が表わす内容は「ある事態」である。これを「 ϕ 」で表記する。「あるもの(v)」が「ある事態(ϕ)」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものに先取りされていなくてははいけない。

したがって、まず、その事態の可能性に関する論理式が書ける。それは“在”(\wedge)

$\phi, v)$ ”となる。論理式の中で、限定語を命題として捉えているので、「 ϕ 」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、変数 u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので、内包演算子「 \wedge 」を付けて論理式が次のように表記できる。

$$(106) \wedge \phi$$

そして、この内包が中心語となる具体的な個体(v)に存在しているので、論理式は次のようになる。

$$(107) \text{ 在}'(\wedge \phi, v)$$

最後に、内包が中心語である個体(v)、つまり外延と結合することにより、内包の可能世界の要素が指定され、外延化する。その結果、限定語と中心語から構成される連語の論理式は次のようになる。論理式の末尾の“在’($u_n, \vee \wedge \phi$)”は u_n が事態の中に存在することを示している。

$$(108) \text{ 在}'(\vee \wedge \phi, v) \& = ' (v, u_n) \& \text{ 在}'(u_n, \vee \wedge \phi)$$

ここで、限定語と中心語が恣意的に結びついているのではなく、この二つの成分が意味的に結びつくには動機が必要であることを論理式で明示的に示した。

第4章 現代中国語の限定語による多義構造と論理分析

4.0 はじめに

多義とは、一つの連語や文などが二つあるいは二つ以上の意味を持ち、二種あるいは二種以上の分析をすることができるという文法現象である。現代中国語の多義性は、しばしば限定語と関わる。たとえば、朱德熙(1980)は次のような例を挙げている。

(109) 发现了敌人的哨兵(敵の歩哨を発見した/敵を発見した歩哨)

(朱德熙 1980 : 85)

この用例は「誰かが敵の歩哨を発見した」と理解してもいいし、「敵を発見した歩哨である」と理解してもよい。

また、吕叔湘(1984)は次の例を挙げた。

(110)a. (四个医学院的)学生参加了巡回医疗队

(四つの医学院の学生が巡回医療チームに参加した)

b. 四个(医学院的)学生参加了巡回医疗队

(四人の医学院の学生が巡回医療チームに参加した)

(吕叔湘 1984 : 322) ((18)の再掲)

(110a)では、巡回医療チームに参加する学生は四つの医科大学の学生であるが、具体的な人数はわからない。(110b)では、巡回医療チームに参加する学生は四人だけである。(110a)と(110b)の学生の人数の差が不明である。

以上の用例に現れる多義性はすべて限定語と関係している。限定語の多義構造は現代中国語の中でよく現れる文法現象である。今までの限定語の多義構造に関する研究は、ほとんど統語論、語用論の視点からの研究に留まっているが、限定語の多義構造の論理構造と意味関係についてはあまり言及していない。しかし、自然言語の機械処理の場合は、コンピューターに提供される情報が少ないので、限定語の多義構造の意味判別を機械で処理するのは難しいことである。この問題を解決するには、限定語の多義構造の論理構造と意味関係を究明しなければならないのである。

本章では、朱德熙(1980)、林祥楣主编《现代汉语》(1991)、邵敬敏(1999)と朱华丽(2009)の多義構造に関する研究を紹介し、主として邵敬敏(1999)と朱华丽(2009)の観点に基づき、現代中国語における限定語に関わる多義構造をいくつかのタイプに分け、第3章で提出した「ものの結合の原理」を分析の理論的根拠として、それぞれの論理構造を究明し、意味関係を考察することにする。

4.1 現代中国語の多義構造に関する考察

4.1.1 朱德熙(1980)の記述

朱德熙(1980: 81-92)は「文法的曖昧性 (grammatical ambiguity)とは文の多義現象である。一つの単語が一つの意味にとどまらなければ多義語と呼ぶ。一つの文が一つの意味にとどまらなければ多義文 (polysemous sentence) と呼ぶ。」と述べた。また、「多義文には二種類ある。一つは文中のある語が多義語であるため、その文がそれに応じて多義文になった場合である。」と主張した。例えば。

(111) 他一天不吃饭也不行。(彼は一日たりとも米/食事を食べなくてははいけない)

(朱德熙 1980 : 81)

ここでの“飯”は「米」と「食事」という二つの意味を持つので、この文にも二種の意味が存在する。一つは「彼は毎日欠かさず米を食べるはずだ」ということであり、もう一つは「彼は一日たりとも腹をすかしておれない」ということである。このような多義文は語彙範囲内のことであり、文法とは無関係である。

もう一種の多義文は文法上の多義文である。文法上の多義文について、朱德熙(1980)は以下二つの多義構造を挙げた。

① “V²+的+是+N”

(112) a. 看的是病人(診察する/診察されるのは病人である)

b. 关心的是她的母亲(関心を寄せる/関心を寄せられるのは彼女の母親である)

(朱德熙 1980 : 81)

一定の文脈を離れると、この文の意味は確定できない。ここでの“看的”“关心的”は「動作主」と理解してもよいし、また「受動者」と理解してもよい。このように、動詞が“双向(二項) (注12)”のものでありさえすれば、その文はいずれも二種の意味を有しうる(注13)。

② “N₁+的+N₂”

(113) a. 大地主的父亲(大地主である父親/大地主の持つ父親)

b. 诗人的风度(詩人のような気風/詩人が持つ気風)

(朱德熙 1980 : 82)

この構造も多義性を持っている(注14)。

また、朱德熙(1980)は、一つの多義構造を一義的構造に分化させるいくつかの根拠を以下の四項目に分けた。

① 構成成分の品詞類(form classes of the constituents)

② 階層構造(immediate constituents)

③顕在的文法関係(overt grammatical relations)

④潜在的文法関係(covert grammatical relations)

すべての相対応する直接成分の間には必ず一定の文法関係が存在するので、階層構造に基づいて多義構造を分析するときには、いつも文法関係に対する分析と絡ませるのである。

4.1.2 林祥楣主编《现代汉语》(1991)の記述

林祥楣主编(1991: 346-359)は多義の統語構造の定義、多義の統語構造が生じる原因および多義の統語構造の分析方法について論じた。

まず、林祥楣主编(1991)は多義の統語構造の定義について、「含まれた語およびその配列順序は完全に同じであるが、意味は一つにとどまらない統語構造」と指摘している。

次に、統語構造の多義性を引き起こす原因は次の三つであると主張した。

①構造階層が違う。ある統語構造は内部に異なる構造階層が含まれるため、異なる意味を生ずる。

②構造階層は同じであるが、構造関係が違う。内部の構造階層は一つだけであるのに、二種の意味を有することがある。それは、階層が同じである統語構造の二つの構成部分の間に異なる構造関係が存在しているからである。

③構造階層と構造関係は同じであるが、意味関係が違う。ある語句は異なる構造階層と異なる構造関係を持っていないが、意味関係が違うので、多義が生まれる。

最後に、多義の統語構造の分析方法について、以下の三つの方法を挙げた。

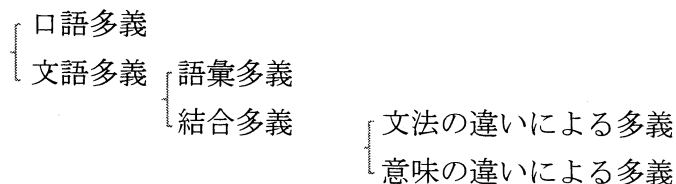
I 階層分析

II 構造関係分析

III 変換分析

4.1.3 邵敬敏(1999)の記述

邵敬敏(1999: 362-381)は多義に関する研究概況、多義の類型、多義分化の方法と多義性を消去する手段の四つの面から中国語の多義現象について考察した。多義の類型について、邵敬敏(1999)は次の〈図 4-1〉のように分類した。



(邵敬敏 1999: 362-381 参照)

〈図 4-1: 邵敬敏(1999)による現代中国語の多義類型〉

口語多義は同音語による多義現象である。文語多義は多義性を生み出す原因によっ

て、語彙多義(“词汇歧义”)と結合多義(“组合歧义”)に分けられる。語彙多義は語彙自身の多義性による多義現象である。結合多義は文法の違いによる多義(“语法组合歧义”)と意味の違いによる多義(“语义组合歧义”)に分類した。また、文法の違いによる多義には、品詞類別の違いによる多義、品詞と構造が同形による多義、構造関係の違いによる多義と階層構造の違いによる多義が含まれている。その中で、構造関係の違いによる多義と階層構造の違いによる多義がよく一緒に現れる。例としては次のようなものがある。

- (114) a. 今天进行了 qizhong (期中/期末) 考试(学期の中間/期末)(口語多義)
 b. 今天她买了好多菜(野菜/料理)(語彙多義)
 c. 菜不热了(温かい/温める)(品詞類の違いによる多義)
 d. 他要炒菜(炒めた料理/料理を炒める)(品詞と構造が同形による多義)
 e. 进口彩电(テレビを輸入する/輸入したテレビ)(構造関係の違いによる多義)
 f. 一个工人的建议(階層構造の違いによる多義)
 (一人の労働者のアドバイス/一個の労働者のアドバイス)
 g. 小熊猫的杯子(意味関係による多義)
 (小パンダの所有するコップ/小パンダの絵があるコップ)
 (邵敬敏 1999 : 367-371)

また、多義性を消去するために、邵敬敏(1999)は以下の五つの方法を提出した。

- ①語音制約により多義性を消去する
- ②文法制約により多義性を消去する
- ③意味制約により多義性を消去する
- ④文脈制約により多義性を消去する
- ⑤会話環境制約により多義性を消去する

4.1.4 朱华丽(2009)の記述

朱华丽(2009 : 33-36)は、現代中国語の限定語の多義構造を六種類に分類した。その分類を表で示すと次の<表 4-1>のようになる。

限定語の多義構造	例文
①動詞 + 名詞 ₁ + “的” + 名詞 ₂	热爱人民的总理
②“对” + 名詞 ₁ + “的” + 名詞 ₂	对领导的意见
③“对” + 名詞 + “的” + 動詞	对王主任的误解
④名詞 ₁ + “和” + 名詞 ₂ + “的” + 名詞 ₃	哥哥和弟弟的朋友都来了
⑤代詞 + “的” + 名詞	姐姐的针扎得不痛

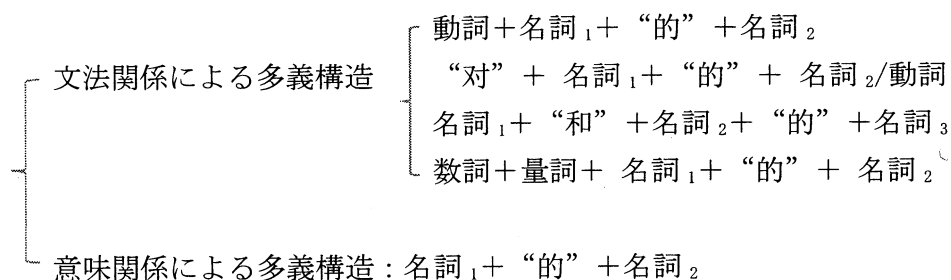
⑥数詞＋量詞＋名詞 ₁ ＋“的”＋名詞 ₂	一个工人的建议
---	---------

(朱华丽 2009 : 33-36 参照)

〈表 4-1 : 朱华丽(2009)による現代中国語の限定語の多義構造〉

4.1.5 本論文の捉え方

本論文では、邵敬敏(1999)の分類方法を参考にし、朱华丽(2009)の提出した現代中国語の限定語に関わる六種類の多義構造を再分類して分析を行う。ただし、朱华丽(2009)の提出した②と③の多義構造は、いずれも前に置く前置詞“对”により多義性を生じて、“的”の後につく単語は名詞であるか、動詞であるか、別に関係はないので、本論文はこの二種の多義構造を一つの種類にする。また、⑤の多義構造について、「代詞＋“的”＋名詞」の他に、「名詞＋“的”＋名詞」の例もよく見られるので、本論文では⑤の多義構造を拡張して、「名詞₁＋“的”＋名詞₂」のように捉えることにする。具体的には、次のように分類することにする。



〈図 4-2 : 本論文における現代中国語の限定語の多義構造〉

4.2 現代中国語の限定語による多義構造の論理分析

中国語の多義構造に関する研究は数多く現れている。その中で、限定語の多義構造に関する研究もよく見られる。本節では、以上の研究者の記述を参考し、邵敬敏(1999)と朱华丽(2012)の研究を踏まえて、現代中国語の限定語の多義構造を再検討し、論理式を用いて限定語を含む多義構造の意味を明示的に分析することにする。

4.2.1 文法関係による多義構造

前述のように、朱华丽(2012)の述べた限定語の多義構造を邵敬敏(1999)の分類法に従い、現代中国語の限定語に関する多義構造を「文法関係による多義構造」と「意味関係による多義構造」の二種類に分ける。「文法関係による多義構造」に現れる多義は統語上の階層構造の違いと構造の間の関係の違いにより生じている。本節では、「文法関係による多義構造」を四つのタイプに分けて考察してみよう。まずは、「動詞＋名詞₁＋“的”＋名詞₂」の多義構造について検討したい。

4.2.1.1 動詞＋名詞₁＋“的”＋名詞₂

朱德熙(1962)は文の統語構造を考察した際に、次の例を挙げた。

(115)咬死了猎人的狗

朱德熙(1962 : 351) ((17)の再掲)

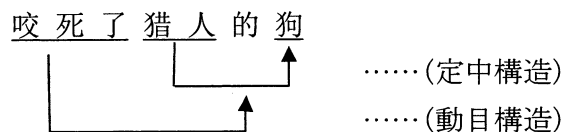
朱德熙(1962)によると、(115)の文には次のような二つの意味があり、それぞれ二つの異なる文法構造を代表している。

(115a)咬死了/猎人的狗(獵人の犬を噛み殺した)

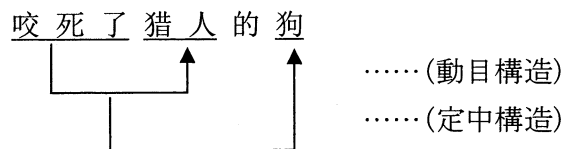
(115b)咬死了猎人的/狗(獵人を噛み殺した犬)

「115a と 115b の形式は全く同じである(含まれた語とその配列順序は完全に同じである)が、両者の階層構造は等しくない。a は“咬死了”と“猎人的狗”からなり、b は“咬死了猎人的”と“狗”から成っている」と指摘している。言語の統語構造には階層があるので、分析をする際に、それを基本単位に分ち、その階層構造を分析しなければならない。(115a)と(115b)の階層構造と構造関係は次の<図 4-3>のように分析できる。

(115a)の階層構造：



(115b)の階層構造：



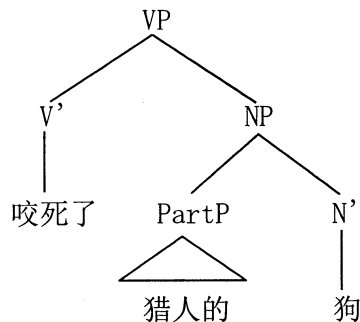
<図 4-3 : “咬死了猎人的狗” の階層構造と構造関係>

(115a)と(115b)は表面上は同じであるが、統語の階層構造が異なり、意味も違っている。(115a)はまず“猎人”が“狗”を修飾し、“猎人的狗”という定中構造を構成する。そして、定中構造“猎人的狗”は述語“咬死了”の目的語となり、動目構造を構成する。つまり、(115a)全体は動目構造の連語であり、“猎人的狗”は受動者である。(115b)はまず述語“咬死了”と“猎人”が動目構造を構成し、次にこの動目構造“咬死了猎人”全体が限定語になり、“狗”を修飾し定中構造を構成している。つまり、(115b)全体は一つの定中構造の連語である。

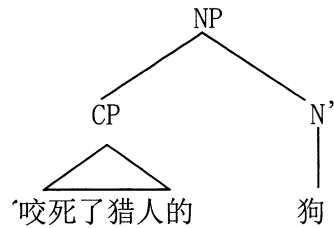
(115a)と(115b)の階層構造の違いを明晰に示すために、ここでは、何元建(2011)の現代中国語の生成文法に関する理論を参考にし、次の<図 4-4>のように、簡単な樹形

図を用いて、(115a)と(115b)の派生の過程を示す。

(115a)の階層構造の樹形図：



(115b)の階層構造の樹形図：



〈図 4-4：“咬死了猎人的狗”の階層構造の樹形図〉

(115a)の樹形図では、まず名詞“猎人”は構造助詞“的”と助詞フレーズ“猎人的”を生成し、「PartP」で表記する。そして、この助詞フレーズ(PartP)“猎人的”は名詞(N')“狗”と結合して名詞フレーズ(NP)“猎人的狗”を生成する。最後に動詞(V')“咬死了”と結合し動詞フレーズ(VP)“咬死了猎人的狗”を生成している。

(115b)の樹形図では、“咬死了猎人”は名詞を修飾する関係節(“关系语句”) (注 15)である。“的”はその関係節と後ろの名詞の境目の標識であり、「標句詞(“标句词”）」と呼ぶ。標句詞“的”と関係節“咬死了猎人”から標句詞フレーズ“咬死了猎人的”を生成し、アルファベットの「CP」で表記する。最後に、標句詞フレーズ“咬死了猎人的”が名詞(N')“狗”と結合し名詞フレーズ(NP)“咬死了猎人的狗”を生成している。

次に、形式意味論の考え方をを用いる論理式による解析を行い、(115a)と(115b)の意味を厳密に表記することにしよう。論理式には日本語のカタカナを付記したが、これはメタ言語と呼び、論理式に対する統語解釈を行う。

まず、(115a)の意味を表す論理式を書いてみよう。ただし、表記するときに、“了”は複雑になるのでここでは省略して説明しない。

(115a)の階層構造の樹形図のように、まず、“猎人”は“狗”の限定語になり、定中構造を構成し、“狗”の所属関係を表すので、本論文の第3章で提出した「ものの結合の原理」に従い、“猎人的狗”を論理式で示すと、

$$\begin{array}{ccccccc}
 \text{モツ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ヲ} & \text{アル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & \\
 (115a\text{-}\textcircled{1}) & \text{在}' & [^{\vee\wedge} \{ \text{有}' (\text{猎人}, u) \& \text{在}' (u, \text{猎人}) \} , \text{狗}] & \& = ' & (\text{狗}, u_n) & \\
 \text{アル} & & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ニ} & \text{ヒトシイ} & \sim\text{ガ} \sim\text{ニ}
 \end{array}$$

となる。この論理式は「獵人がuを持つ、かつ、uが獵人にあるという内包が「犬」

という個体にあり外延化する、かつ、「犬」が u_n に等しい」と読める。

次に、“咬死”という動詞は「～が～を噛み殺す」という2項をとる関数であるので、論理式で表すと、“咬死”(α , β)”となり、「 α 」に[動作主]が生起し、「 β 」に[受動者]が生起する。(114a)は「誰かが獵人の犬を噛み殺す」という意味を表す。[動作主]は不確定であるので、「 ϕ 」で表記し、“獵人的狗”は[受動者]である。故に、(115a-①)の論理式を“咬死”(α , β)”に当てはめると、(115a)全体の論理式は次のようになる。

$$(115a-②) \text{咬死}' \left[\phi, \text{在}' \left[\vee^{\wedge} \{ \text{有}'(\text{獵人}, u) \& \text{在}'(u, \text{獵人}) \}, \text{狗} \right] \& ='(\text{狗}, u_n) \right]$$

$\begin{matrix} \text{カミコロス} & \sim\text{ガ} \\ \& ='(\text{狗}, u_n) \\ \sim\text{ヲ} \end{matrix}$

この論理式の記述は、“咬死”の右側に置かれたプライム“'”は論理式において“咬死”が述語であることを表している。この論理式は“在” $\left[\vee^{\wedge} \{ \text{有}'(\text{獵人}, u) \& \text{在}'(u, \text{獵人}) \}, \text{狗} \right] \& ='(\text{狗}, u_n)$ ”が「獵人の犬」という意味を表している。その論理式全体は「 ϕ がそれ(獵人の犬)を噛み殺す」という意味を示している。

この論理式によって、“獵人”が“狗”を修飾し、“獵人的狗”という定中構造を構成し、また“獵人的狗”は述語“咬死”の目的語となり、動目構造を構成する、ということが明示されている。

続いて(115b)の論理式を書いてみよう。同様に、表記するときに、“了”は複雑になるのでここでは省略して説明しない。まず関係節“咬死獵人”の論理式を書く。“咬死”という動詞は2項をとる関数であるので、論理式で表すと、“咬死”(α , β)”となり、「 α 」に[動作主]が生起し、「 β 」に[受動者]が生起する。ここでは、“獵人”が受動者であるので、“咬死獵人”の論理式は次のようになる。

$$(115b-①) \text{咬死}'(u, \text{獵人})$$

$\begin{matrix} \text{カミコロス} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ヲ} \end{matrix}$

そして、この関係節全体が限定語になり、後の“狗”を修飾するので、「ものの結合の原理」に従い、(115b)の論理式は次のようになる。

$$(115b-②) \text{在}' \left[\vee^{\wedge} \text{咬死}'(u, \text{獵人}), \text{狗} \right] \& ='(\text{狗}, u_n)$$

$\begin{matrix} \text{アル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & \text{ヒトシイ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} \end{matrix}$

この論理式は、“咬死”(u, 獵人)”が「uが獵人を噛み殺す」という意を表している。論理式全体が「uが獵人を噛み殺すという内包が「犬」という個体にあり外延化する、かつ、「犬」が u_n に等しい」と読める。

この論理式によって、“猎人”が“咬死”の目的語であり、“咬死猎人”全体が“狗”を修飾し定中構造を構成する、ということが明示される。

以上の解析方法に倣い、もう一つの似た例を分析しておこう。

(116) 我们需要关心留学生的老师。

(朱华丽 2009 : 33)

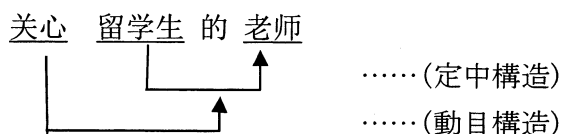
朱华丽(2009)によれば、“关心留学生的老师”は次のような二つの意味がある。

(116a) 关心/留学生的老师(留学生の先生に関心を寄せる)

(116b) 关心留学生的/老师(留学生に関心を寄せる先生)

(116a)では、“留学生”は限定語であり、中心語の“老师”を修飾し、“关心留学生的老师”全体は動目構造である。この場合、中心語“老师”は「受動者」である。(116b)では、“关心留学生”は限定語であり、“老师”は中心語であり、“关心留学生的老师”全体は定中構造である。この時、“老师”は「動作主」となる。(116a)と(116b)の階層構造と構造関係は次の<図 4-5>のように分析できる。

(116a)の階層構造：



(116b)の階層構造：



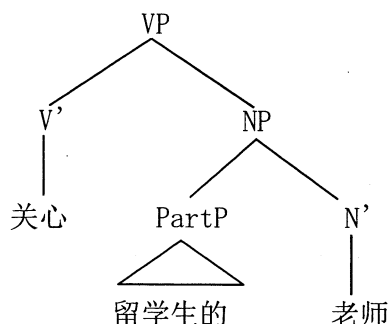
<図 4-5：“关心留学生的老师”の階層構造と構造関係>

(116a)と(116b)は表面上は同じであるが、統語の階層構造が異なり、意味も違っている。(116a)はまず、“留学生的老师”という定中構造を構成する。そして、定中構造“留学生的老师”は述語“关心”の目的語となり、動目構造を構成する。つまり、(116a)全体は動目構造の連語であり、“留学生的老师”は受動者である。(116b)はまず述語“关心”と“留学生”が動目構造を構成し、そしてこの動目構造“关心留学生”全体が限定語になり、“老师”を修飾し定中構造を構成している。つまり、(116b)全体は一つの定中構造の連語である。

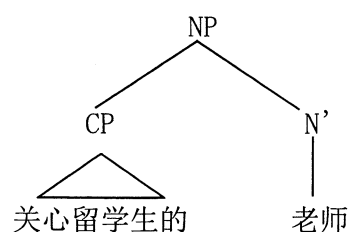
(116a)と(116b)の階層構造の違いを明晰に示すために、次の<図 4-6>のように、簡

単な樹形図を用いて、(116a)と(116b)の派生の過程を示すこともできる。

(116a)の階層構造の樹形図：



(116b)の階層構造の樹形図：



〈図 4-6：“关心留学生的老师”の階層構造の樹形図〉

(116a)の樹形図では、まず“留学生”は構造助詞“的”と一緒に助詞フレーズ(PartP)を構成する。次に、この助詞フレーズ“留学生的”は名詞(N')“老师”と名詞フレーズ(NP)“留学生的老师”を生成する。最後に動詞(V')“关心”と結合し動詞フレーズ(VP)“关心留学生的老师”を生成している。

(116b)の樹形図では、“关心留学生”は名詞を修飾する関係節であり、標句詞である“的”と一緒に標句詞フレーズ(CP)“关心留学生的”を生成する。最後に、標句詞フレーズ“关心留学生的”は名詞(N')“老师”と結合し名詞フレーズ(NP)“关心留学生的老师”を生成している。

次に、論理式による解析を行い、(116a)と(116b)の意味を厳密に表記することにしよう。まず、(116a)の意味を表す論理式を書いてみよう。(116a)は“留学生”は“老师”の限定語になり、“留学生的老师”という定中構造を構成する。そして、定中構造“留学生的老师”は述語“关心”の目的語となり、動目構造を構成する。したがって、まず“留学生的老师”の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 \text{イル} & & \sim \text{ニ} & & \sim \text{ガ} & & \\
 (116a\text{-}\textcircled{1}) & \text{在'} & \{ \text{V}^{\wedge} \text{有'} & (\text{留学生}, u), \text{老师} \} & \& = ' & (\text{老师}, u_n) \\
 \text{イル} & & \sim \text{ガ} & & \sim \text{ニ} & \text{ヒトシイ} & \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}
 \end{array}$$

この論理式は「留学生にuがいるという内包が「先生」という個体にあり外延化する、かつ、「先生」が u_n に等しい」と読める。

次に、“关心”という動詞は2項関数であるので、論理式で表すと、“关心'(α , β)”となり、「 α 」に[動作主]が生起し、「 β 」に[受動者]が生起する。(116a)は「誰かが留学生の先生に関心を寄せる」という意味を表し、[動作主]は不確定であるので、「 ϕ 」で表記し、“留学生的老师”は[受動者]である。故に、(116a-①)の論理式を“关心'(α , β)”に当てはめると、(116a)全体の論理式が次のようになる。

(116a-②) 关心' [ϕ , 在' $\{V^{\wedge}$ 有' (留学生, u), 老师 $\}$ &= ' (老师, u_n)]

カンシンヲヨセル ～ガ

～ニ

この論理式は“在' $\{V^{\wedge}$ 有' (留学生, u), 老师 $\}$ &= ' (老师, u_n)”が「留学生の先生」という意味を表している。その論理式全体は「 ϕ がそれ(留学生の先生)に関心を寄せる」という意味を示している。この論理式によって、“留学生”が“老师”の限定語であり、また“留学生的老师”は述語“关心”の目的語であるということを明示している。

続いて(116b)の論理式を書いてみよう。まず関係節“关心留学生”の論理式は次のようになる。

(116b-①) 关心' (u , 留学生)

カンシンヲヨセル ～ガ ～ニ

そして、この関係節全体が限定語になり、後の“老师”を修飾するので、「ものの結合の原理」に従い、(116b)全体の論理式は次のようになる。

(116b-②) 在' $\{V^{\wedge}$ 关心' (u , 留学生), 老师 $\}$ &= ' (老师, u_n)

アル

～ガ

～ニ

ヒトシイ

～ガ ～ニ

この論理式は、“关心' (u , 留学生)”が「 u が留学生に関心を寄せる」という意を表している。論理式全体は「 u が留学生に関心を寄せるという内包が「先生」という個体にあり外延化する、かつ、「先生」が u_n に等しい」と読める。

この論理式によって、“留学生”が“关心”の目的語であり、“关心留学生”全体が“老师”の限定語である、ということがわかる。

以上の分析によってわかることは、“動詞”が他動詞であり、“名詞₁”と動目構造を構成することもできるし、“名詞₁+的+名詞₂”と動目構造を構成することもできることである。また、“動詞+名詞₁”が“名詞₂”の限定語になることもできるし、“名詞₁”だけが“名詞₂”の限定語になることもできる。これはこの種類の構造が多義性を生ずる条件である。

次節では、「“对”+名詞₁+“的”+名詞₂/動詞」の多義構造について検討したい。

4.2.1.2 “对”+名詞₁+“的”+名詞₂/動詞

まず、以下の例について考えてみよう。

(117) 对领导的意见

(朱华丽 2009 : 34)

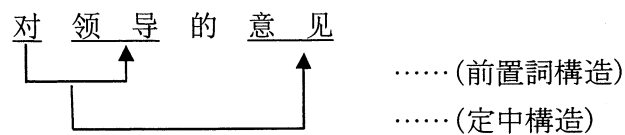
この例は「“对” + 名詞₁ + “的” + 名詞₂」の例であり、次のような二つの意味を持っている。

(117a) 对领导的/意见 (上司に対する意見)

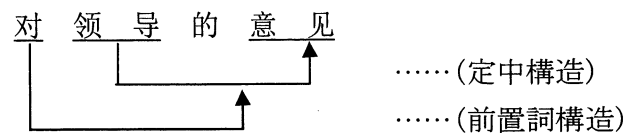
(117b) 对/领导的意见 (上司の意見に対する)

(117a) と (117b) に含まれた語とその配列順序は全く同じであるが、その階層構造と構造関係は異なる。具体的に次の図<4-7>のように分析できる。

(117a) の階層構造：



(117b) の階層構造：

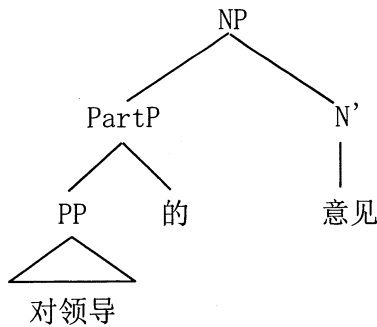


<図 4-7：“对领导的意见”の階層構造と構造関係>

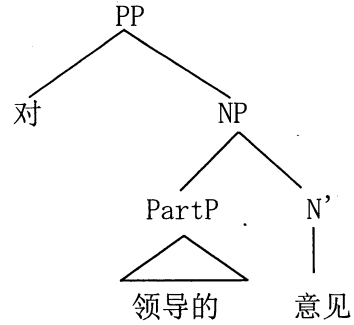
(117a) はまず前置詞である“对”が“领导”と前置詞構造を構成する。そしてこの前置詞構造が中心語“意见”を修飾し、定中構造を構成する。つまり、(117a)全体は一つの定中構造の連語である。(117b)はまず“领导”が“意见”を修飾し、“领导的意见”という定中構造を構成する。そして、この定中構造は前置詞“对”と前置詞構造を構成する。(117b)全体は一つの前置詞構造の連語である。

さらに、(117a) と (117b) の統語構造の違いを明らかに示すために、簡単な樹形図を用いると、次の<図 4-8>のようになる。

(117a)の階層構造の樹形図：



(117b)の階層構造の樹形図：



〈図 4-8：“对领导的意见”の階層構造の樹形図〉

(117a)の樹形図では、まず前置詞“对”と名詞“领导”から前置詞構造(PP)“对领导”を構成し、“领导”は“对”の目的語である。そして、“的”は構造助詞であり、前置詞構造“对领导”と助詞フレーズを構成し、「PartP」で表記する。最後に名詞(N')“意见”を修飾し、名詞フレーズ(NP)“对领导的意见”を生成する。

(117b)の樹形図では、まず構造助詞“的”は名詞(N')“领导”と助詞フレーズ(PartP)を生成する。そして、この助詞フレーズ“领导的”は名詞(N')“意见”と名詞フレーズ(NP)“领导的意见”を生成する。最後に前置詞“对”と結合し、前置詞フレーズ(PP)“对领导的意见”を生成している。

ここで、形式意味論の演繹的手法で(117a)を論理式で表すことにしよう。まず、前置詞構造“对领导”の部分のみをみられたい。朱德熙(1982：175)が述べるように、前置詞の働きは動作と関わる対象(動作主、受動者、間接関与者、道具)及び場所、時間などを導くことにある。その中で、前置詞“对”は間接関与者を導く。したがって、“对领导”の論理式は次のようになる。

ダス ～ガ ～ヲ

(117a-①) 对' {φ, 领导, 提' (φ, u)}

スル ～ガ ～ニタイテ ～ヲ

この論理式は“提' (φ, u)”が「φがuを出す」という意を表し、“对' {φ, 领导, 提' (φ, u)}”が「φが上司に対して、それ(φがuを出す)をする」という意を表している。即ち、“对”は“φ”と“领导”とある出来事の間を関係性を指定する役割を果たしている。

そして、“对领导”は限定語になり、“意见”を修飾するので、「ものの結合の原理」に従い、(117a)全体の論理式は次のようになる。

(117a-②) 在' [∧^对' {φ, 领导, 提' (φ, u)}, 意见] &= ' (意见, u_n)

アル ～ガ ～ニ ヒトシ ～ガ ～ニ

この論理式は、「 ϕ が上司に対して、 ϕ が u を出すということをするという内包が「意見」という個体にあり外延化する、かつ、「意見」が u_n に等しい」と読める。この論理式によって、“领导”は前置詞“对”によって導かれた間接関与者であり、“对领导”全体が“意见”の限定語であることが明らかになる。

次に、(117b)の論理式を書いてみよう。まず、“领导”は“意见”の限定語になり、定中構造を構成し、所属関係を表すので、「ものの結合の原理」に基づくと、“领导的意见”の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{ccccccc} \text{ダス} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ヲ} & & & & \\ (117b-①) \text{在'} & \{ \text{V}^{\wedge} \text{提'} & (\text{领导}, u), & \text{意见} \} & \& = ' & (\text{意见}, u_n) \\ \text{アル} & & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & \text{ヒシイ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「上司が u を出すという内包が「意見」という個体にあり外延化する、かつ、「意見」が u_n に等しい」と読む。

そして、この“领导的意见”は前置詞“对”の目的語になる。前置詞“对”は「 \sim が \sim に対して \sim をする」という 3 項をとる関数であるので、論理式で表記すると、“对”(α , β , γ)となる。「 α 」に[動作主]が生起し、「 β 」に[間接関与者]が生起し、「 γ 」に[ある出来事]が生起する。(117b)は「誰かが上司の意見に対して何かをする」という意味を表す。[動作主]は不確定であるので、「 ϕ 」で表記し、“领导的意见”は[間接関与者]である。ゆえに、(117b-①)の論理式を“对”(α , β , γ)に当てはめると、(117b)全体の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc} (117b-②) \text{对'} & [\phi, & \text{在'} & \{ \text{V}^{\wedge} \text{提'} & (\text{领导}, u), & \text{意见} \} & \& = ' & (\text{意见}, u_n), & [\text{出来事}]] \\ \text{スル} & \sim\text{ガ} & & & \sim\text{ニタイシ} & & \sim\text{ヲ} \\ & \alpha & & & \beta & & \gamma \end{array}$$

この論理式は“在”(V^{\wedge} 提’ (领导, u), 意见) $\& =$ ’ (意见, u_n)”が「上司の意見」という意味を表している。論理式全体は「 ϕ がそれ(上司の意見)に対してある[出来事]をする」という意味を示している。

この論理式によって、“领导”は“意见”を修飾し、“领导的意见”という定中構造を構成し、この“领导的意见”は前置詞“对”の[間接関与者]となり、前置詞構造を構成する、ということを明示している。

さらに、もう一つの“对”+名詞₁+“的”+名詞₂の例を見られたい。

(118) 对孩子们的态度

(朱华丽 2009 : 34)

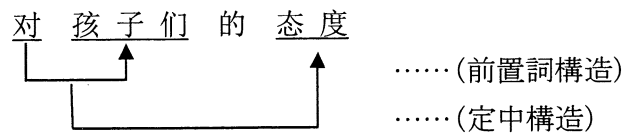
この用例は次のような二つの異なる意味がある。

(118a) 对孩子们的/态度(子供達に対する態度)

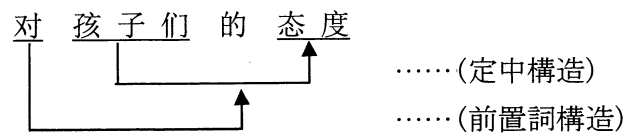
(118b) 对/孩子们的態度(子供達の態度に対する)

(118a) と (118b) に含まれた語とその配列順序は全く同じであるが、その階層構造と構造関係は違い、次の図<4-9>のように分析できる。

(118a) の階層構造：



(118b) の階層構造：

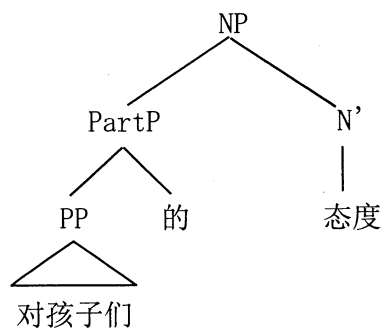


〈図 4-9：“对孩子们的態度”の階層構造と構造関係〉

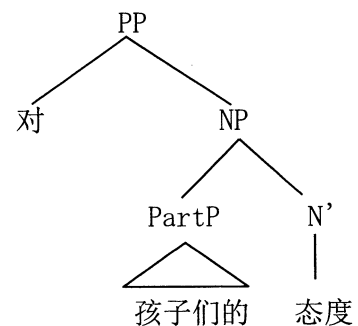
(118a) はまず前置詞“对”が“孩子们”と前置詞構造を構成し、そしてこの前置詞構造が後ろの名詞“态度”を修飾し、定中構造を構成する。(118a) 全体は一つの定中構造の連語である。(118b) はまず“孩子们”が“态度”を修飾し、“孩子们的態度”という定中構造を構成する。そして、この定中構造は前置詞“对”と前置詞構造を構成する。(118b) 全体は前置詞構造の連語である。

(118a) と (118b) の統語構造の違いを明示するために、簡単な樹形図を用いて、次の〈図 4-10〉のように示す。

(118a) の階層構造の樹形図：



(118b) の階層構造の樹形図：



〈図 4-10：“对孩子们的態度”の階層構造の樹形図〉

(118a) の樹形図では、まず前置詞“对”と名詞(N') “孩子们” から前置詞構造(PP)

“对孩子们”を構成し、“的”は構造助詞であり、前置詞構造“对孩子们”と助詞フレーズを構成し、「PartP」で表記する。最後に名詞(N')“态度”を修飾し、名詞フレーズ(NP)“对孩子们的态度”を生成している。

(118b)の樹形図では、まず名詞(N')“孩子们”は構造助詞“的”と助詞フレーズ(PartP)“孩子们的”を生成する。次に、この助詞フレーズ“孩子们的”は名詞(N')“态度”と名詞フレーズ(NP)“孩子们的态度”を生成する。最後に前置詞“对”と結合し、前置詞フレーズ(PP)“对孩子们的态度”を生成している。

続いて、(118a)を論理式で表記してみよう。まず、前置詞構造“对孩子们”の部分のみをみられたい。前置詞“对”は間接関与者“孩子们”を導くので、“对孩子们”の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} \text{モツ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \\ (118a-①) \text{对}' \{ \phi, \text{孩子们}, \text{有}'(\phi, u) \} \\ \text{スル} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニタイシテ} \quad \sim\text{ヲ} \end{array}$$

この論理式は“有'(ϕ , u)”が「 ϕ が u を持つ」という意を表し、“对'(ϕ , 孩子们, 有'(ϕ , u))”が「 ϕ が子供達に対して、それ(ϕ が u を持つ)をする」という意を表している。即ち、“对”は“ ϕ ”と“孩子们”とある出来事の間接関与者を指定する役割を果たしている。

そして、“对孩子们”が限定語になり、“态度”を修飾するので、「ものの結合の原理」に従い、(118a)全体の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} (118a-②) \text{在}' [\text{V}^{\wedge} \text{对}' \{ \phi, \text{孩子们}, \text{有}'(\phi, u) \}, \text{态度}] \& = '(\text{态度}, u_n) \\ \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{ガ} \quad \quad \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は、「 ϕ が子供達に対して、 ϕ が u を持つということをする」という内包が「態度」という個体にあり外延化する、かつ、「態度」が u_n に等しい」と読める。この論理式によって、“孩子们”は前置詞“对”によって導かれる間接関与者であり、“对孩子们”全体が“态度”の限定語であることが明らかになる。

次に、(118b)の論理式を書いてみよう。まず、“孩子们”が“态度”の限定語になり、定中構造を構成し、所属関係を表すので、「ものの結合の原理」に従うと、“孩子们的态度”の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{c} \text{モツ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \\ (118b-①) \text{在}' \{ \text{V}^{\wedge} \text{有}'(\text{孩子们}, u), \text{态度} \} \& = '(\text{态度}, u_n) \\ \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{ガ} \quad \quad \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「子供達が u を持つという内包が「態度」という個体にあり外延化する

る、かつ、「態度」が u_n に等しい」という意を表している。

そして、この“孩子们的態度”は前置詞“对”の目的語になる。前置詞“对”は3項関数であるので、論理式で表記すると、“对”(α , β , γ)となる。「 α 」に[動作主]が生起し、「 β 」に[間接関与者]が生起し、「 γ 」に[ある出来事]が生起する。(118b)は「誰かが子供達の意見に対してある出来事をする」という意味を表す。[動作主]は不確定であるので、「 ϕ 」で表記し、“孩子们的態度”は[間接関与者]である。ゆえに、(118b-①)の論理式を“对”(α , β , γ)に当てはめると、(118b)全体の論理式は次のようになる。

$$(118b-②) \text{对} \left[\begin{array}{ccc} \phi, & \text{在} \{ \vee^{\wedge} \text{有} \} (\text{孩子们}, u), & \text{态度} \} \&= \{ (\text{态度}, u_n), [\text{出来事}] \} \\ \text{スル} & \sim \text{ガ} & \sim \text{ニタイシテ} & \sim \text{ヲ} \\ & \alpha & \beta & \gamma \end{array} \right]$$

この論理式は“在”(\vee^{\wedge} 有)(孩子们, u), 态度}&=’(态度, u_n)”が「子供達の態度」という意味を表している。論理式全体は「 ϕ がそれ(子供達の態度)に対してある[出来事]をする」という意味を表している。この論理式から、“孩子们”は“態度”の限定語であり、“孩子们的態度”は前置詞“对”の[間接関与者]であることが明示される。

さらに、次の例を見てみよう。

(119) 对王主任的误解

(朱华丽 2009 : 34)

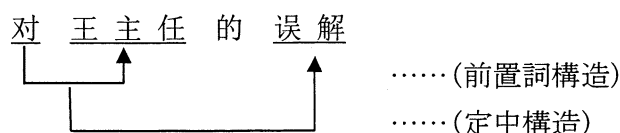
朱华丽(2009)によると、この例は「“对”+名詞₁+“的”+動詞」の例であるが、この例における“误解”は動詞であるが、名詞の機能を有しているので、朱德熙(1982 : 60)はこのような動詞を「名動詞」と呼んでいる。したがって、「“对”+名詞₁+“的”+動詞」の多義構造は前述した「“对”+詞名₁+“的”+名詞₂」の多義構造と同様に解析することができる。(119)の例は次のような二つの意味を持ち、それぞれ二つの異なる文法構造を反映している。

(119a) 对王主任的/误解(王主任に対する誤解)

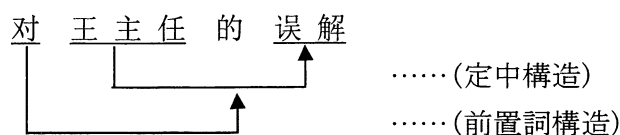
(119b) 对/王主任的误解(王主任の誤解に対する)

(119a)と(119b)の形式は完全に同じであるが、両者の階層構造は等しくない。それぞれの階層構造と構造関係を分析すると、次の<図 4-11>のようになる。

(119a)の階層構造：



(119b)の階層構造：

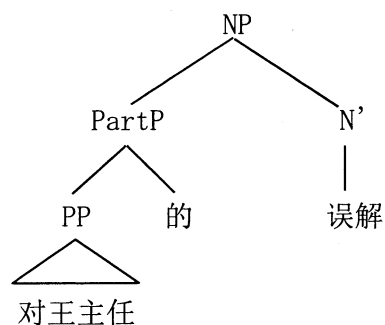


〈図 4-11：“对王主任的误解”の階層構造と構造関係〉

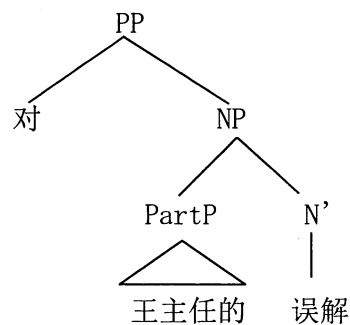
(119a)はまず前置詞“对”が“王主任”と結合して前置詞構造を構成し、そしてこの前置詞構造が後ろの名詞“误解”を修飾し、定中構造を構成する。(119a)全体は定中構造の連語である。(119b)はまず“王主任”が“误解”を修飾し、“王主任的误解”という定中構造を構成する。そして、この定中構造は前置詞“对”と前置詞構造を構成する。(119b)全体は前置詞構造の連語である。

簡単な樹形図を用い、(119a)と(119b)の統語構造の違いを次の〈図 4-12〉のように示す。

(119a)の階層構造の樹形図：



(119b)の階層構造の樹形図：



〈図 4-12：“对王主任的误解”の階層構造の樹形図〉

(119a)の樹形図では、まず前置詞“对”と“王主任”から前置詞構造(PP)“对王主任”を生成し、そして、“的”は構造助詞であり、前置詞構造“对王主任”と一緒に助詞フレーズ(PartP)を構成する。最後に名動詞“误解”を修飾し、名詞フレーズ(NP)“对王主任的误解”を生成している。

(119b)の樹形図では、まず名詞“王主任”は構造助詞“的”と結合して助詞フレーズ(PartP)“王主任的”を生成する。そして、この助詞フレーズは名動詞“误解”と名詞フレーズ(NP)“王主任的误解”を生成する。最後に前置詞“对”と結合し、前置

詞フレーズ(PP) “对王主任的误解” を生成している。

次に、(119a)を論理式で表記してみよう。まず、前置詞構造“对王主任”の部分を見られたい。前置詞“对”は間接関与者“王主任”を導くので、“对王主任”の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} \text{モツ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \\ (119a\text{-}\textcircled{1}) \text{对}' \{ \phi, \text{王主任}, \text{有}' (\phi, u) \} \\ \text{スル} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニツイテ} \quad \sim\text{ヲ} \end{array}$$

この論理式は“有' (ϕ , u)”が「 ϕ が u を持つ」という意を表し、“对' { ϕ , 王主任, 有' (ϕ , u)}”が「 ϕ が王主任に対して、それ(ϕ が u を持つ)をする」という意を表している。即ち、前置詞“对”は“ ϕ ”と“王主任”とある出来事の間接関係者を指定している。

そして、“对王主任”は“误解”を修飾し、限定語になるので、「ものの結合の原理」に従い、(119a)全体の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} (119a\text{-}\textcircled{2}) \text{在}' [\vee^{\wedge} \text{对}' \{ \phi, \text{王主任}, \text{有}' (\phi, u) \}], \text{误解}] \&= ' (\text{误解}, u_n) \\ \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{ガ} \quad \quad \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒツイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は、「 ϕ が王主任に対して、 ϕ が u を持つということをする」という内包が「误解」という個体にあり外延化する、かつ、「误解」が u_n に等しい」と読む。この論理式によって、“王主任”は前置詞“对”によって導かれる間接関与者であり、“对王主任”全体が“误解”の限定語であることがわかる。

さて、(119b)の論理式を書いてみよう。まず、“王主任”は“误解”の限定語になり、定中構造を構成するので、「ものの結合の原理」に従い、“王主任的误解”の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{c} \text{モツ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \\ (119b\text{-}\textcircled{1}) \text{在}' \{ \vee^{\wedge} \text{有}' (\text{王主任}, u), \text{误解} \} \&= ' (\text{误解}, u_n) \\ \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{ガ} \quad \quad \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒツイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「王主任が u を持つという内包が「误解」という個体にあり外延化する、かつ、「误解」が u_n に等しい」という意を表している。

そして、この“王主任的误解”は前置詞“对”の目的語となる。前置詞“对”は論理式で表記すると、“对' (α , β , γ)”となる。(119b)は「誰かが王主任の误解に対してある出来事をする」という意味を表すので、(119b-①)の論理式を“对' (α , β , γ)”に当てはめると、(119b)全体の論理式は次のように書ける。

(119b-②) 对' [ϕ , 在' { \vee^{\wedge} 有' (王主任, u), 误解} &= ' (误解, u_n), [出来事]]

スル ～ガ ～ニタイシテ ～ヲ

α β γ

この論理式は“在' { \vee^{\wedge} 有' (王主任, u), 误解} &= ' (误解, u_n)”が「王主任の誤解」という意味を表している。論理式全体は「 ϕ がそれ(王主任の誤解)に対してある[出来事]をする」という意味を表している。この論理式から、“王主任”は“誤解”の限定語であり、“王主任的誤解”は前置詞“对”の[間接関与者]であることを明示している。

以上(117)～(119)の例から、「“对”+名詞₁+“的”+名詞₂/動詞」という多義構造において、前置詞“对”は名詞₁と前置詞構造を構成することもできるし、名詞₁+“的”+名詞₂/動詞と前置詞構造を構成することもできるので多義性が生ずることがわかった。

次の節では、「名詞₁+“和”+名詞₂+“的”+名詞₃」の多義構造について論じることになしたい。

4.2.1.3 名詞₁+“和”+名詞₂+“的”+名詞₃

ここでは、「名詞₁+“和”+名詞₂+“的”+名詞₃」の多義構造を考えてみたい。以下の二例をあげる。まず(120)の例を見られたい。

(120) 哥哥和弟弟的朋友

(朱华丽 2009 : 34)

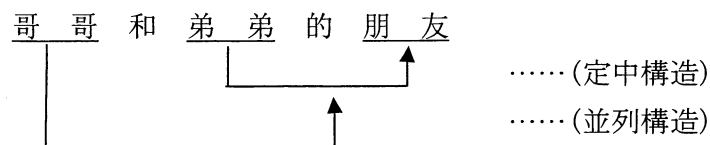
(120)の例には次のような二つの意味が含まれている。

(120a) 哥哥和/弟弟的朋友(兄と弟の友達)

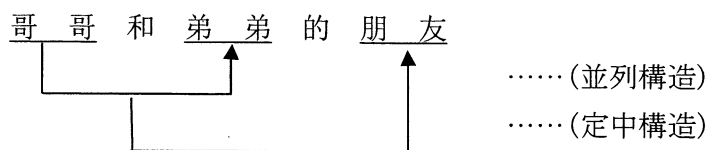
(120b) 哥哥和弟弟的/朋友(兄の友達と弟の友達)

(120a)では、“朋友”は弟のみの友達であるに対し、(120b)では、“朋友”は兄と弟の共通の友達である。含まれた語と配列順序から見れば、(120a)と(120b)は全く同じであるが、階層構造から考えると、両者は異なっている。(120a)と(120b)の階層構造と構造関係は次の<図 4-13>のように分析できる。

(120a)の階層構造：



(120b)の階層構造：

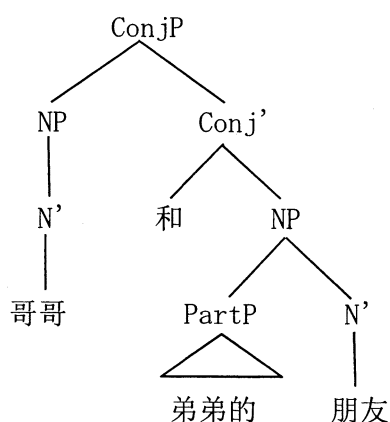


〈図 4-13：“哥哥和弟弟的朋友”の階層構造と構造関係〉

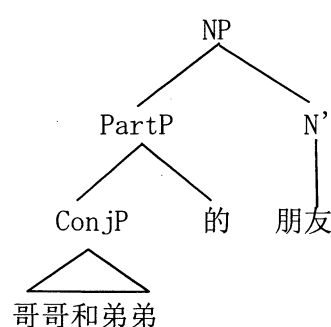
(120a)と(120b)の形式は同じであるが、統語上の階層構造は違い、表す意味も違っている。(120a)では、まず“弟弟”が限定語であり、“朋友”を修飾し、定中構造を構成する。そして、この定中構造“弟弟的朋友”は接続詞“和”を通して“哥哥”と組み合わされて並列構造を構成している。つまり、(120a)全体は並列構造の連語である。(120b)では、まず“哥哥”は接続詞“和”を通して“弟弟”と並列構造を構成し、そして、この並列構造“哥哥和弟弟”が限定語になり、“朋友”を修飾し、一つの定中構造を構成している。つまり、(120b)全体は定中構造の連語である。

続いて、簡単な樹形図を用い、(120a)と(120b)の階層構造の違いを次の〈図 4-14〉のように示す。

(120a)の階層構造の樹形図：



(120b)の階層構造の樹形図：



〈図 4-14：“哥哥和弟弟的朋友”の階層構造の樹形図〉

(120a)の樹形図では、まず助詞フレーズ(PartP)“弟弟的”は名詞(N')“朋友”と名詞フレーズ(NP)“弟弟的朋友”を生成し、そして、接続詞“和”を通して名詞“哥哥”と接続詞フレーズ“哥哥和弟弟的朋友”を生成し、「ConjP」で表記する。

(120b)の樹形図では、まず“哥哥”と“弟弟”は接続詞“和”を通して接続詞フレーズ(ConjP)を生成する。そして、この接続詞フレーズ“哥哥和弟弟”は構造助詞“的”と一緒に助詞フレーズ(PartP)“哥哥和弟弟的”を生成する。最後に名詞(N')“朋友”と結合し、名詞フレーズ(NP)“哥哥和弟弟的朋友”を生成している。

次に、命題論理、述語論理と「ものの結合の原理」を併用した論理式による解釈を行い、(120a)と(120b)の意味関係の違いを厳密に表記することにしよう。まず(120a)の論理式を書いてみよう。

(120a)はまず“弟弟的朋友”という定中構造を構成し、そして、この定中構造は接続詞“和”を通して“哥哥”と並列構造を構成している。ゆえに、最初に「ものの結合の原理」に従い、定中構造“弟弟的朋友”の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc} & & \text{モツ} & \sim\text{カ}^{\circ} & \sim\text{ヲ} & & \\ (120a-①) & \text{在'} & \{\vee^{\wedge}\text{有'} & (\text{弟弟}, u), & \text{朋友}\} & \& = ' & (\text{朋友}, u_n) \\ & \text{アル} & & \sim\text{カ}^{\circ} & \sim\text{ニ} & \text{ヒトシイ} & \sim\text{カ}^{\circ} \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「弟が u を持つという内包が「友達」という個体にあり外延化する、かつ、「友達」が u_n に等しい」と読む。

次に、“弟弟的朋友”は“哥哥”と並列構造を構成し、並列の関係を表しているの
で、連言結合子「 \wedge 」を用いて、(120a)全体の論理式は次のように書ける。

$$(120a-②) \text{哥哥} \wedge \text{在'} \{\vee^{\wedge}\text{有'} (\text{弟弟}, u), \text{朋友}\} \& = ' (\text{朋友}, u_n)$$

この論理式は、“在' $\{\vee^{\wedge}\text{有'} (\text{弟弟}, u), \text{朋友}\} \& = ' (\text{朋友}, u_n)$ ”が「弟の友達」の意を表し、この論理式全体は「兄と弟の友達」という意味を表している。この論理式によって、“哥哥”と“弟弟的朋友”の間に並列の関係を備えていることがわかる。

続いて(120b)の論理式を表記してみよう。朱德熙(1982: 157-158)は「並列構造を成分として成り立つ統語構造には二種のタイプがある。一つは並列成分を分解して別々に言い分けることのできるタイプである。たとえば、掛け算の分配律に符合するタイプである。即ち、 $(A+B) \times C = A \times C + B \times C$ 」と述べている。したがって、この観点に基づくと(120b)の意味は次のように理解できる。

$$(120b) \text{哥哥和弟弟的/朋友} = \text{哥哥的朋友} + \text{弟弟的朋友}$$

そのため、(120b)の論理式は次のように表記できる。

$$\begin{array}{l} (120b-①) \text{在'} \{\vee^{\wedge}\text{有'} (\text{哥哥}, u), \text{朋友}\} \& = ' (\text{朋友}, u_n) \\ \quad \wedge \text{在'} \{\vee^{\wedge}\text{有'} (\text{弟弟}, u), \text{朋友}\} \& = ' (\text{朋友}, u_n) \end{array}$$

この論理式は、“在' $\{\vee^{\wedge}\text{有'} (\text{哥哥}, u), \text{朋友}\} \& = ' (\text{朋友}, u_n)$ ”が「兄の友達」という意を表し、“在' $\{\vee^{\wedge}\text{有'} (\text{弟弟}, u), \text{朋友}\} \& = ' (\text{朋友}, u_n)$ ”が「弟の友達」という意を表している。そして(120b-①)の論理式全体は「兄の友達と弟の友達」という意味を示している。この論理式により、“哥哥”と“弟弟”が並列して“朋友”

の限定語になることがわかる。

もう一つの似た用例を考察してみよう。

(121) 车票和零用的钱都在这里了

吕叔湘(1984 : 323)

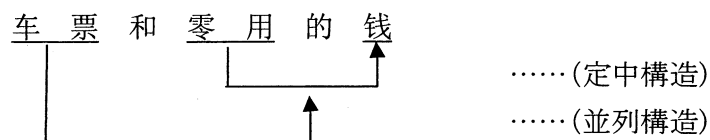
この例も上記と同じような解釈が可能である。(121)の例には次のような二つの意味が含まれている。

(121a) 车票和/零用的钱都在这里了(乗車券と小遣いのお金は全てここにある)

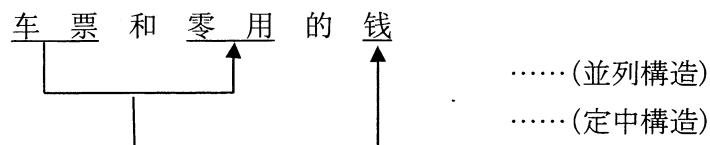
(121b) 车票和零用的/钱都在这里了(乗車券のお金と小遣いのお金は全てここにある)

(121a)と(121b)における“车票和零用的钱”の部分だけを取り出して分析を行う。(121a)では、“钱”は小遣いになるお金であるが、(121b)では、“钱”は乗車券を買うお金と小遣いになるお金の両方のことである。文に含まれた語及び語の配列順序から見れば、(121a)と(121b)は完全に同じであるが、階層構造から考えると、両者は異なっている。(121a)と(121b)における“车票和零用的钱”の階層構造と構造関係は次の<図 4-15>のように分析できる。

(121a)の階層構造：



(121b)の階層構造：



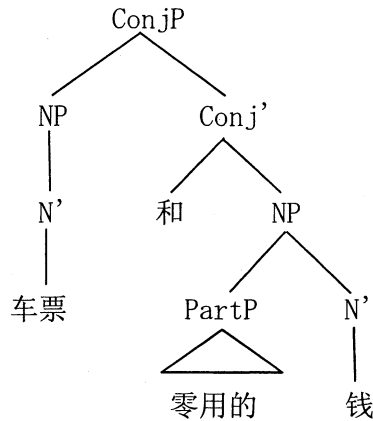
<図 4-15 : “车票和零用的钱”の階層構造と構造関係>

<図 4-15>によると、両者の形式は同じであるが、統語上の階層構造は違い、表す意味も違っている。(121a)では、まず“零用”が限定語となり、“钱”を修飾し、定中構造を構成する。そして、この定中構造“零用的钱”は接続詞“和”を通して“车票”と組み合わせられて並列構造を構成している。つまり、(121a)全体は並列構造の連語である。(121b)では、まず“车票”は接続詞“和”を通して“零用”と並列構造を構成し、そして、この並列構造“车票和零用”が限定語になり、“钱”を修飾し、一つの

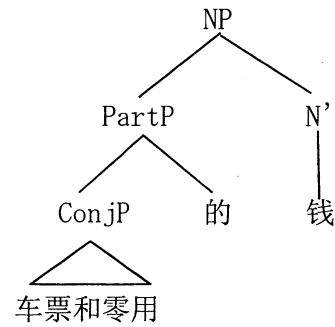
定中構造を構成している。(121b)全体は定中構造の連語である。

(121a)と(121b)の階層構造の違いをわかりやすくするために、次の〈図 4-16〉のように樹形図を用いて示そう。

(121a)の階層構造の樹形図：



(121b)の階層構造の樹形図：



〈図 4-16：“车票和零用的钱”の階層構造の樹形図〉

(121a)の樹形図では、まず助詞フレーズ(PartP)“零用的”は名詞(N')“钱”と名詞フレーズ(NP)“零用的钱”を生成する。そして、接続詞“和”を通して名詞“车票”と接続詞フレーズ(ConjP)“车票和零用的钱”を生成している。

(121b)の樹形図では、まず“车票”と“零用”が接続詞“和”を通して接続詞フレーズ(ConjP)“车票和零用”を生成する。そして、“车票和零用”は構造助詞“的”と一緒に助詞フレーズ(PartP)“车票和零用的”を生成する。最後に名詞(N')“钱”と結合し、名詞フレーズ(NP)“车票和零用的钱”を生成している。

次に、これまでと同様に論理表記しておこう。まずは(121a)の論理式を書いてみよう。

(121a)はまず“零用的钱”という定中構造を構成し、そして、この定中構造は接続詞“和”を通して“车票”と並列構造を構成している。そのために、最初に「ものの結合の原理」に従い、定中構造“零用的钱”の論理式は次のようになる。

モチイ ～ガ～ヲ ナル ～ガ～ニ

(121a-①)在' [$\vee^{\wedge}\{\text{用}'(\phi, u) \& \text{到}'(u, \text{零用})\}$], 钱] & = ' (钱, u_n)

アル ～ガ ～ニ ヒトシイ ～ガ ～ニ

この論理式は「 ϕ が u を用いて、かつ、 u が小遣いになるという内包が「金」という個体にあり外延化する、かつ、「金」が u_n に等しい」と読む。

次に、“零用的钱”は“车票”と並列構造を構成し、並列の関係を表しているのので、連言結合子「 \wedge 」を用いて、(121a)全体の論理式は次のように書ける。

(121a-②) 车票 \wedge 在' [\vee^{\wedge} {用' (ϕ , u) & 到' (u , 零用)}, 钱] & = ' (钱, u_n)

この論理式は、“在' [\vee^{\wedge} {用' (ϕ , u) & 到' (u , 零用)}, 钱] & = ' (钱, u_n)”が「小遣いのお金」の意を表し、この論理式全体は「乗車券と小遣いのお金」という意味を表している。この論理式によって、“车票”と“零用的钱”の間に並列の関係があることがわかる。

次に、(121b)の論理式を表記してみよう。前述のように、朱德熙(1982 : 157-158)において述べた観点に基づき、(121b)の意味は次のように理解できる。

(121b) 车票和零用的/钱 = 车票的钱 + 零用的钱

そのため、(121b)の論理式は次のように表記できる。

(121b-①) 在' [\vee^{\wedge} {用' (ϕ , u) & 买' (u , 车票)}, 钱] & = ' (钱, u_n)
 \wedge 在' [\vee^{\wedge} {用' (ϕ , u) & 到' (u , 零用)}, 钱] & = ' (钱, u_n)

この論理式は、“在' [\vee^{\wedge} {用' (ϕ , u) & 买' (u , 车票)}, 钱] & = ' (钱, u_n)”が「乗車券のお金」という意を表し、“在' [\vee^{\wedge} {用' (ϕ , u) & 到' (u , 零用)}, 钱] & = ' (钱, u_n)”が「小遣いのお金」という意を表している。そして(121b-①)の論理式全体は「乗車券のお金と小遣いのお金」という意味を示している。この論理式により、“车票”と“零用”が並列して“钱”を修飾し限定語になることがわかる。

以上の分析から、「名詞₁ + “和” + 名詞₂ + “的” + 名詞₃」の多義構造において、“名詞₁”が“名詞₂”と並列構造を構成することできるし、また、“名詞₁”が“名詞₂ + “的” + 名詞₃”と並列構造を構成することもできる、ということがわかった。

次節では「数詞 + 量詞 + 名詞₁ + “的” + 名詞₂」について考察したい。

4.2.1.4 数詞 + 量詞 + 名詞₁ + “的” + 名詞₂

まず、次の用例を考察してみよう。

(122) 一个工人的建议

(朱华丽 2009 : 35)

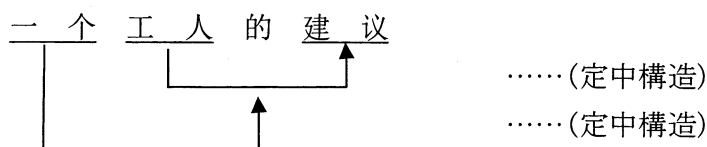
(122)の例には次のような二つの理解方がある。

(122a) 一个/工人的建议 (一つの労働者の提案)

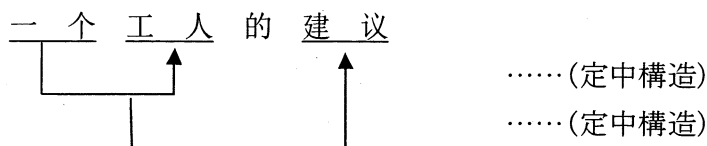
(122b) 一个工人的/建议 (一人の労働者の提案)

(122a)は“一个”と“工人的建议”からなり、数量詞“一个”が“建议”の数量を示している。(122b)は“一个工人的”と“建议”からなり、数量詞“一个”が“工人”の数量を表している。連語の形式からみると、(122a)と(122b)は全く同じであるが、階層構造から考えると、両者は異なっている。(122a)と(122b)の階層構造と構造関係をそれぞれ分析すると、次の<図 4-17>のようになる。

(122a)の階層構造：



(122b)の階層構造：

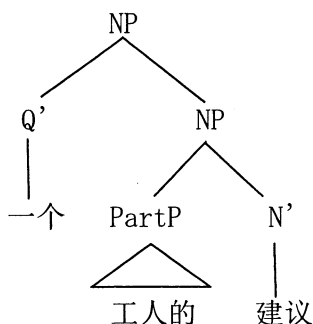


<図 4-17：“一个工人的建议”の階層構造と構造関係>

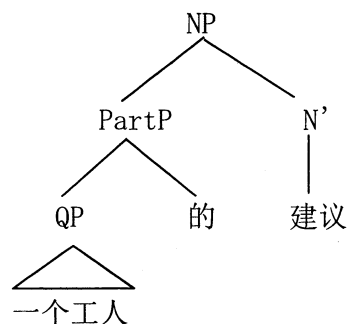
<図 4-17>のように、(122a)と(122b)の形式は同様であるが、統語上の階層構造は違い、表す意味も異なる。(122a)では、まず“工人”が限定語となり、“建议”を修飾する。そして、数量詞“一个”は“工人的建议”を修飾し、“工人的建议”の[数量]を表している。(122b)では、まず数量詞“一个”は“工人”を修飾し、“工人”の[数量]を表す。そして、“一个工人”全体が限定語になり、名詞“建议”を修飾する。

樹形図を用いて、両者の階層構造の違いを次の<図 4-18>のように明晰に示すことにする。

(122a)の階層構造の樹形図：



(122b)の階層構造の樹形図：



<図 4-18：“一个工人的建议”の階層構造の樹形図>

(122a)の樹形図では、まず助詞フレーズ(PartP) “工人的” は名詞(N’) “建议” と名詞フレーズ(NP) “工人的建议” を生成する。そして、この名詞フレーズ “工人的建议” は数量詞 “一个” とあわせて名詞フレーズ(NP) “一个工人的建议” を生成している。

(122b)の樹形図では、まず “一个” と “工人” から数量詞フレーズ(QP) “一个工人” を生成する。次に、この数量詞フレーズは構造助詞 “的” とあわせて助詞フレーズ(PartP) “一个工人的” を生成する。最後に名詞 “建议” と結合し、名詞フレーズ “一个工人的建议” が生成されている。

次に、形式意味論の演繹的手法を用いて、(122a)と(122b)の論理式を書いてみよう。まず(122a)の論理表記をしておこう。(122a)はまず “工人的建议” という定中構造を構成しているので、最初に「ものの結合の原理」に従い、定中構造 “工人的建议” の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{ccccccc} & \text{ダス} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ヲ} & & & \\ (122a-①) \text{在'} & \{ \text{V}^{\wedge} \text{提'} (\text{工人}, u), \text{建议} \} & \& \text{' (建议}, u_n) \\ \text{アル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & \text{ヒトシ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「労働者がuを出すという内包が「提案」という個体にあり外延化する、かつ、「提案」が u_n に等しい」と読む。

そして、“工人的建议” は数量詞 “一个” と結合して数量関係を表している。この数量関係を明示するために、“有’ (α, β)” という2項関数を用いて表記する。(122a-①)の論理式を “有’ (α, β)” に当てはめると、(122a)全体の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc} (122a-②) \text{有'} & [\text{在'} & \{ \text{V}^{\wedge} \text{提'} (\text{工人}, u), \text{建议} \} & \& \text{' (建议}, u_n), \text{一个}] \\ \text{アル} & & & \sim\text{ガ} & \text{ヒトツ} \end{array}$$

この論理式は “在’ { V^{\wedge} 提’ (工人, u), 建议 } & =’ (建议, u_n)” が「労働者の提案」という意を表し、論理式全体は「それ(労働者の提案)が一つある」という意味を表している。この論理式によって、数量詞 “一个” は “工人的建议” の[数量]を表すことがわかった。

さて、(122b)の論理式を書いてみよう。まず、“一个工人” の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{cccc} (122b-①) \text{有'} & (\text{工人}, \text{一个}) \\ \text{イル} & \sim\text{ガ} & \text{ヒトリ} \end{array}$$

この論理式は「労働者が一人いる」と読める。数量詞 “一个” は “工人” の[数量]

を表している。

そして、“一个工人”は後ろの名詞“建议”を修飾して定中構造を構成するので、「ものの結合の原理」に従い、(122b)全体の論理式は次のように書ける。

$\begin{array}{ccccccc} \text{ガス} & & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ヲ} & & \\ (122b-②) \text{在'} & [\text{V}^{\wedge}\text{提'} & \{\text{有'} & (\text{工人}, & \text{一个}), & u\}, & \text{建议}] & \& = ' & (\text{建议}, & u_n) \\ \text{アル} & & \sim\text{ガ} & & \sim\text{ニ} & & \text{ヒトシイ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} \end{array}$

この論理式は“有’ (工人, 一个)”が「一人の労働者」という意味を表している。論理式全体は「それ(労働者が一人いる)が u を出すという内包が「提案」という個体にあり外延化する、かつ、「提案」が u_n に等しい」と読める。この論理式から、“数量詞“一个”は“工人”の[数量]を表すことがわかった。

もう一つの例を考えてみよう。

(123) 两个学生的家长

(朱华丽 2009 : 35)

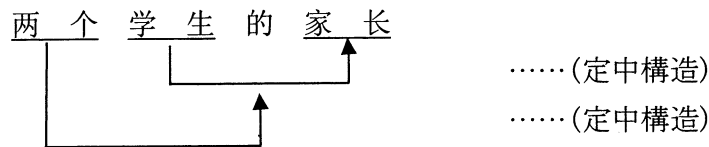
(122) の例と同じように、(123) の例にも次のような二つの意味がある。

(123a) 两个/学生的家长(二人の/学生の保護者)

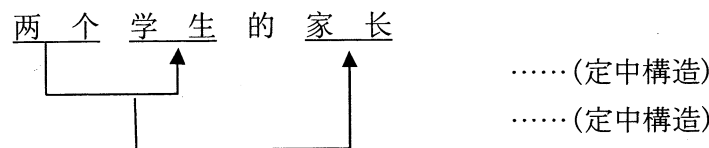
(123b) 两个学生的/家长(二人の学生の/保護者)

(123a) は“两个”と“学生的家长”からなり、数量詞“两个”が“家长”の数量である。(123b) は“两个学生的”と“家长”からなり、数量詞“两个”が“学生”の数量を表している。文に含まれる語と語の配列順序から考えると、両者は全く同じであるが、階層構造から考えると、両者は異なっている。(123a) と (123b) の階層構造と構造関係を次の〈図 4-19〉のように分析できる。

(123a) の階層構造 :



(123b) の階層構造 :



〈図 4-19 : “两个学生的家长” の階層構造と構造関係〉

(123a)と(123b)の形式は同様であり、構造の間の関係は全て定中構造であるが、階層構造は違っているので、表す意味も異なる。(123a)では、まず“学生”が限定語となり、“家长”を修飾する。そして、数量詞“两个”は“学生的家长”を修飾し、“学生的家长”の[数量]を表している。(123b)では、まず数量詞“两个”は“学生”を修飾し、“学生”の[数量]を表す。そして、“两个学生”全体が限定語になり、名詞“家长”を修飾する。つまり、(123a)と(123b)の構造の間の関係はいずれも定中構造であるが、成分の間の数量関係は違っている。

簡単な樹形図を用いて、(123a)と(123b)の階層構造の違いは、次の<図 4-20>のように示すことができる。

(123a)の階層構造の樹形図：

(123b)の階層構造の樹形図：



<図 4-20： “两个学生的家长” の階層構造の樹形図>

(123a)の樹形図では、まず助詞フレーズ(PartP)“学生的”と名詞(N')“家长”から名詞フレーズ(NP)“学生的家长”を成っている。そして、この名詞フレーズ“学生的家长”は数量詞“两个”とあわせて名詞フレーズ(NP)“两个学生的家长”を生成している。

(123b)の樹形図では、まず“两个”と“学生”から数量詞フレーズ(QP)“两个学生”は構造助詞“的”とあわせて助詞フレーズ(PartP)“两个学生的”を生成する。最後に名詞“家长”と結合し、名詞フレーズ(NP)“两个学生的家长”が生成されている。

続いて、論理式を用いて(123a)と(123b)の意味を明らかに示しておこう。まず(123a)を論理式で表記してみよう。(123a)はまず“学生的家长”という定中構造を構成しているので、「ものの結合の原理」に基づく、定中構造“学生的家长”の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{c}
 \text{モツ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \\
 (123a\text{-}\textcircled{1}) \text{在'} \{ \text{V}^{\wedge} \text{有'} (\text{学生}, u), \text{家长} \} \&= ' (\text{家长}, u_n) \\
 \text{アル} \quad \quad \quad \sim\text{ガ} \quad \quad \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ}
 \end{array}$$

この論理式は「学生が u を持つという内包が「保護者」という個体にあり外延化す

そして、数量詞“两个”は“学生的家长”の数量を表している。この数量を明示するために、“有’(α , β)”という2項関数を用いて表記する。(123a-①)の論理式を“有’(α , β)”に当てはめると、(123a)全体の論理式は次のようになる。

この論理式は“在’ $\{^{\vee\wedge}$ 有’(学生, u), 家长}&=’(家长, u_0)”が「学生の保護者」という意を表し、論理式全体は「それ(学生の保護者)が二人いる」という意味を表している。この論理式によって、数量詞“两个”は“学生的家长”の[数量]を表すことがわかった。

次に、(123b)の論理式を書いてみよう。まず、“两个学生”の論理式は次のように書ける。

この論理式は「学生が二人いる」と読める。数量詞“两个”は“学生”の[数量]を表している。

そして、“两个学生”は後ろの名詞“家长”を修飾して定中構造を構成するので、「ものの結合の原理」に従い、(123b)全体の論理式は次のように書ける。

この論理式は「有' (学生, 两个)」が「学生が二人いる」という意味を表している。論理式全体は「それ(学生が二人いる)が u を持つという内包が「保護者」という個体にあり外延化する、かつ、「保護者」が u_0 に等しい」と読める。この論理式から、“数量詞「两个」は「学生」の「数量」を表すことがわかった。

以上の分析によると、この種類の多義構造の統語構造はいずれも定中構造であるが、構造階層が違っているので多義性を生じる。数量詞は名詞₁と名詞₂を修飾することができる。さらに、名詞₁は名詞₂を修飾することもできる。

本節では文法関係による四つのタイプの多義構造について考察した。次の節では、意味関係による多義構造「名詞₁ + “的” + 名詞₂」について検討していきたい。

4.2.2 意味関係による多義構造

普段、我々が言う「主述関係、動目関係、定中関係、動補関係、述連関係」などは文法関係である。一方、意味関係というのは一つの文における成分と成分の間の意味上の関係である。例えば、動作主・受動者関係、目的関係、結果関係、所属関係、性質関係などがある。

邵敬敏(1999)によれば、意味関係による多義構造「名詞₁＋“的”＋名詞₂」は意味関係の違いにより多義を生じるものである。例えば、次のような例がある。

(124) 教授的父亲(教授である父親/教授の持つ父親)

(邵敬敏 1999 : 371)

また、朱德熙(1980)は、“小白兔的书”という例について、「“小白兔的书”は“白い兔についての本”と解釈することができるし、“白い兔が所有する本”と理解することもできる。表面的には、“小白兔”と“书”という二語が結びつき、偶々曖昧性を生み出したようであるが、実はそうではないのである。“小白兔的书”には二種の意味があり、それは次の“N₁＋的＋N₂”という構造の多義性に反映されている。」と述べ、同時に以下の例を挙げた。

(125) 小熊猫的杯子(小パンダの絵柄のあるコップ/小パンダの所有するコップ)

(126) 鲁迅的书(鲁迅の書いた本/鲁迅の所有する本)

(朱德熙 1980 : 82)

(124)から(126)の三つの例については、統語構造から考えると、いずれも典型的な定中構造であり、階層構造と構造関係により多義を生み出さない。意味関係から考えれば、限定語と中心語の間に多種の意味関係を有し、多義を生み出している。

袁毓林(1995)によると、「名詞₁＋“的”＋名詞₂」という構造は述詞が隠される構造であり、名詞₁と名詞₂の間に他動性を表す述詞が現れない。「名詞₁＋“的”＋名詞₂」という構造の意味を理解する時に、名詞₁と名詞₂の間の意味関係によってその隠された述詞をアクティヴにしないと、この構造の意味解釈を得られない。アクティヴにされる述詞が一つだけではない場合、多義を生み出してしまう。

ただし、具体的な文脈や聞き手の認知により、隠された述詞に対する意味の解釈が数多く出る。全ての解釈を一々説明することが不可能であるので、ここでは、(124)から(126)の例について、それぞれ二つの解釈を考察することにする。

まず、(124)の例を見られたい。(124)の例は袁毓林(1995)の観点に基づくと、次のような二種の解釈がある。

(124a) (是)教授的父亲(教授である父親)

(124b) 教授(所有)的父亲(教授の持つ父親)

(124a)では、隠された述詞は“是”であり、「教授である父親」という意味と理解できる。この時、限定語“教授”が中心語“父親”の[属性]の意味を表している。(124b)では、隠された述詞は“所有”であり、「教授の持つ父親」の意味と理解できる。この場合、限定語“教授”が中心語“父親”の[所属]の意味を表している。

次に、「ものの結合の原理」に従って、論理式を用いて(124a)と(124b)の意味関係の違いを明示しておこう。まず(124a)を論理式で表記してみよう。“父親”という「あるもの」が「誰かが教授である」という「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。“父親”が生起しうる「事態の可能性」は次の(124a-①)になる。

(124a-①)是' (u, 教授)

アル ~ガ ~デ

「誰かが教授である」というある事態の可能性が複数あり、一つの論理空間を構成している。この「誰かが教授である」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。つまり、「あるもの」が「ある事態」の中に現れる可能性は論理空間の中では全て存在されている。

(124a-①)の論理式は、「u が教授である」という意味を示している。この論理式の中で、“父親”を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ という可能世界の集合のどの要素にも存在しうる。つまり内包であるので、内包記号を付して次の(124a-②)になる。

(124a-②) ^是' (u, 教授)

そして、「あるもの」である“父親”をあらゆる事態の可能性の総体である論理空間に入れる。つまり、この[属性]という内包が、“父親”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(124a-③)在' {^是' (u, 教授), 父親}

アル ~ガ ~ニ

「あるもの」である“父親”をあらゆる事態の可能性の総体である論理空間に入れる瞬間、限定語“教授”が中心語“父親”と結合し、“教授的父亲”となり、他の事態の可能性が排除される。言い換えれば、「誰かが教授である」という事態の可能性が先に存在することなしに、限定語“教授”と中心語“父親”が結合できない。

(124a-③)の論理式では“^是' (u, 教授)”という内包が“父親”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。そ

の結果、論理式は次のようになる。

$$(124a-④) \text{在'} \{ \overset{\vee}{\wedge} \text{是'} (u, \text{教授}), \text{父亲} \} \& = ' (\text{父亲}, u_n)$$

アル ～ガ ～ニ ヒトシイ ～ガ ～ニ

これが(124a)の論理式になる。この論理式は「uが教授であるという内包が「父親」という個体にあり外延化する、かつ、「父親」が u_n に等しい」と読む。この論理式により、限定語“教授”が中心語“父親”の[属性]を表すことが証明される。

次に、(124b)を論理式で表記しておこう。(124b)では、“父親”という「あるもの」が「教授が何かを持つ」という「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。“父親”が生起する「事態の可能性」は次の(124b-①)になる。

$$(124b-①) \text{有'} (\text{教授}, u)$$

モツ ～ガ ～ヲ

「教授が何かを持つ」という事態の可能性が無数あり、一つの論理空間を構成している。この「教授が何かを持つ」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。つまり、「あるもの」が「ある事態」の中に現れる可能性は論理空間の中では全て存在されている。したがって、“教授(所有)的父亲(教授の持つ父親)”のほかにも、“教授(所有)的汽车(教授の持つ車)”、“教授(所有)的衣服(教授の持つ服)”等々の複数の可能性がある。

(124b-①)の論理式は、「教授がuを持つ」という意味を示している。この論理式の中で、“父親”は変項になるので、「u」を用いてで表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、uの領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり内包であるので、内包記号を付して次の(124b-②)になる。

$$(124b-②) \wedge \text{有'} (\text{教授}, u)$$

次に、「あるもの」である“父親”を「教授が何かを持つ」という「事態の可能性」で構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が、“父親”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

$$(124b-③) \text{在'} \{ \wedge \text{有'} (\text{教授}, u), \text{父亲} \}$$

アル ～ガ ～ニ

「あるもの」である“父親”を「教授が何かを持つ」という「事態の可能性」で構成する論理空間に入れる瞬間に、数量を表す限定語“教授”が中心語“父親”と結び

つき、“教授的父亲”となり、事態の可能性が唯一に確定される。(124b-③)の論理式では“ \wedge 有’ (教授, u)”という内包が“父亲”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(124b-④) 在’ { \vee \wedge 有’ (教授, u), 父亲} & =’ (父亲, u_n)
アル ~が ~ニ ヒソイ ~が ~ニ

これが(124b)の論理式になる。この論理式は「教授がuを持つという内包が「父親」という個体にあり外延化する、かつ、「父親」が u_n に等しい」と読む。この論理式によって、限定語“教授”と中心語“父亲”の間に[所有]の意味関係を有することがわかった。

さて、今度は上記の分析に倣い、(125)の例を論じてみよう。(125)の例は次のような二種の意味がある。

(125a) (属于)小熊猫的杯子(小パンダの所有するコップ)

(125b) (画有)小熊猫的杯子(小パンダの絵柄のあるコップ)

(125a)では、隠された述詞は“属于”であり、この連語は「小パンダの所有するコップ」の意味と理解することができるので、限定語“小熊猫”と中心語“杯子”が[所有]の意味関係を表している。(125b)では、隠された述詞は“画有”であり、「小パンダの絵柄のあるコップ」の意味と理解できるので、限定語“小熊猫”と中心語“杯子”が[属性]の意味関係を表している。

次に、論理式による解析を行い、(125a)と(125b)の意味を厳密に表記することしよう。まず(125a)について、“杯子”という「あるもの」が「小パンダが何かを所有する」という「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。“杯子”が生起しうる「事態の可能性」は次の(125a-①)になる。

(125a-①) 有’ (小熊猫, u) & 在’ (u, 小熊猫)
モツ ~が ~ヲ アル ~が ~ニ

“杯子”が生起しうる「事態の可能性」は「小パンダが何かを所有する」である。この事態の可能性が数え切れないほど存在している。全ての可能性が一つの論理空間を構成している。つまり、この「小パンダが何かを所有する」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。

この論理式は、「小パンダがuを持つ、かつ、uが小パンダにある」という意味を表している。この論理式の中で、“杯子”を変数として捉えているので、「u」で表記す

(125a-②) ^ {有' (小熊猫, u) & 在' (u, 小熊猫)}

(125a-③) 在' [[^]{有' (小熊猫, u) & 在' (u, 小熊猫)}, 杯子]

 \approx

(125a-④) 在' [^V {有' (小熊猫, u) & 在' (u, 小熊猫)}, 杯子] & = ' (杯子, u_n)

「カ」

(125b-①) 画' (ϕ , 小熊猫) & 到' (小熊猫, u)

106

(125b-①)の論理式は、「 ϕ が小パンダを描く、かつ、小パンダが u に到る」という意を示している。この論理式の中で、「 u 」は「あるもの」を表す個体変項である。この論理式は「事態の可能性」を表わすので、 u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在する。つまり、内包であるので、内包記号を付して次の(125b-②)になる。

(125b-②) $\wedge \{ \text{画}'(\phi, \text{小熊猫}) \& \text{到}'(\text{小熊猫}, u) \}$

そして、「あるもの」である“杯子”を「何かに小パンダの絵柄が書いてある」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が、“杯子”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(125b-③) 在' $\{ \wedge \{ \text{画}'(\phi, \text{小熊猫}) \& \text{到}'(\text{小熊猫}, u) \}, \text{杯子} \}$
アル 〜ガ 〜ニ

「あるもの」である“杯子”を「何かに小パンダの絵柄が書いてある」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れる瞬間に、限定語“小熊猫”が中心語“杯子”と結びつき、“小熊猫的杯子”となり、事態の可能性が確定される。(125b-③)の論理式では“ $\wedge \{ \text{画}'(\phi, \text{小熊猫}) \& \text{到}'(\text{小熊猫}, u) \}$ ”という内包が“杯子”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(125b-④) 在' $\{ \vee \wedge \{ \text{画}'(\phi, \text{小熊猫}) \& \text{到}'(\text{小熊猫}, u) \}, \text{杯子} \} \& \text{ =}'(\text{杯子}, u_n)$
アル 〜ガ 〜ニ ヒトシ 〜ガ 〜ニ

これが(125b)の論理式となる。この論理式は「 ϕ が小パンダを描く、かつ、小パンダが u に到るという内包が「コップ」という個体にあり外延化する、かつ、「コップ」が u_n に等しい」と読む。この論理式によって、限定語“小熊猫”が中心語“杯子”の[属性]の意味を表すことがわかった。

最後に、(126)の例を分析してみよう。(126)の連語に隠された述詞をアクティブにすると、次の二つの意味を表すことができる。

(126a) 鲁迅(写)的书(鲁迅の書いた本)

(126b) 鲁迅(拥有)的书(鲁迅の所有する本)

(126a)では、隠された述詞は“写”であり、この連語は「鲁迅の書いた本」の意味と理解できる。(126b)では、隠された述詞は“拥有”であり、「鲁迅の所有する本」の意味と理解できる。

次に、論理式を用いて、(126a)と(126b)の意味を分析してみよう。まず(126a)では、

“書”という「あるもの」が「魯迅が何かを書く」という「ある事態」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。“書”が生起しうる「事態の可能性」は次の(126a-①)になる。

(126a-①) 写’ (魯迅, u)

カ ～カ’ ～ヲ

(126a)では、事態の可能性は「魯迅が何かを書く」である。この事態の可能性が数え切れないほど存在し、一つの論理空間を構成している。つまり、「魯迅が何かを書く」が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。(126a-①)の論理式は、「魯迅がuを書く」という意味を表している。また、“書”を個体変項として捉えるので、「u」を使って表記する。この論理式は「事態の可能性」を表わすので、uの領域{w1, w2, …, wn}のどの要素にも存在するので、内包である。そこで、(126a-①)は次の(126a-②)になる。

(126a-②) ^写’ (魯迅, u)

次に、「あるもの」である“書”を「魯迅が何かを書く」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が、“書”という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(126a-③) 在’ {^写’ (魯迅, u), 書}

アル ～カ’ ～ニ

「あるもの」である“書”を「魯迅が何かを書く」という「事態の可能性」の総体から構成される論理空間に入れると、性質を表す限定語“聪明”が中心語“孩子”と結びつき、“聪明的孩子”となり、他の可能性が排除され、唯一の事態の可能性が確定される。(126a-③)の論理式では“^写’ (魯迅, u)”という内包が“書”という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(126a-④) 在’ {^V^写’ (魯迅, u), 書} & =’ (書, u_n)

アル ～カ’ ～ニ ヒトシ ～カ’ ～ニ

これが(126a)の論理式になる。この論理式は「魯迅がuを書くという内包が「本」という個体にあり外延化する、かつ、「本」がu_nに等しい」と読む。この論理式により、限定語“魯迅”が中心語“書”の[著者]であることがわかった。

また、(126b)では、“書”という「あるもの」が「魯迅が何かを所有する」という

4.3 本章の結び

本章では、邵敬敏(1999)と朱华丽(2012)の研究に基づいて、現代中国語の限定語の多義構造を再分類して考察した。主として、統語構造による多義と意味関係による多義の二つの視点から限定語と関係ある五つのタイプの多義構造について詳述した。

これらの多義構造を検討する際に、ウィトゲンシュタインの論考をヒントに本論文が提出した「ものの結合の原理」を元に分析を進めた。実例が表す意味に対して、論理構造は異なっていることを、論理式を運用しながら証明し、それぞれの論理構造を究明した。

第5章 現代中国語の限定語の意味指示と論理分析

5.0 はじめに

「意味指示」理論は1980年代に生まれた現代中国語の独特な言語分析理論であり、文法研究、特に意味に関する研究の発展に伴い、ますます重視され、中国語の意味分析に非常に役立っている。本章では、現代中国語における限定語を意味指示分析の立場から再検討する。限定語はいったいどのような文成分を意味指示するか、この疑問を解明するために、命題論理および述語論理の手法を用いて、限定語の意味指示に関する論理構造を記述し、その意味を明晰化する。

5.1 意味指示とは何か

5.1.1 意味指示の理論背景

周剛(1998)によれば、中国最初の文法書である『馬氏文通』が出版されてから50年代初期まで、中国語の文法研究は意味の研究を重んじ、形式の研究を重視しない伝統的な文法研究である。50年代から、アメリカ構造主義文法理論の影響を受け、記述文法の理論と方法を借用する論文や著作が次々と現れたが、形式を重んじ、意味を軽視する傾向も出てきた。60年代初め、文煉(1960)などの文法学者がこの傾向に気づき、「形式と意味を結合すべきだ」という原則を提唱し始めた^(注16)。70年代末期、朱德熙(1980)はこの原則に従い、「顕在的文法関係(“显性语法关系”)」と「潜在的な文法関係(“隐性语法关系”)」という二つの文法概念を提出した。陸儉明(1980)は「文成分の間にはいつも性質が異なる二つの関係——文法構造関係と意味構造関係が同時に存在している。」「この同時に存在している性質が違う二つの関係は同時に文の意味を左右している。」と明確に説明した。胡裕樹、范晓(1985)は、中国語の文法分析では、全面的かつ体系的に統語分析・意味分析・語用分析をはっきり区別し、「形式と意味を相互に結合すべきである」という原則を提出した。中国語文法研究に新しい道を開き、形式と意味の結合・静態と動態の結合を重視し、文法現象において、多視点・多層的な分析を促進した。「意味指示」理論はこのような背景において、誕生し発展してきた。

5.1.2 意味指示の定義

1980年代以来、意味指示は意味分析方法の一つとして、すでに中国語文法学界に認められ、幅広く応用されている。意味指示の定義に関しては、諸説がある。主なものは以下のようなものがある。

范晓、胡裕樹(1992: 275)は「意味指示というのは、文中の語が意味上支配するあるいは説明する方向である」と定義している。

卢英顺(1995: 22)は「意味指示は意味平面の研究内容である。……意味指示とは統語構造のある成分が意味上他の成分(一つあるいはいくつかの成分)と結合する可能性のことである。」と定義している。

王红旗(1997 : 73)は「意味指示とは、文の同じ統語位置にある同様な文法的性質を持つ語が他の統語成分との間に意味関係を生ずる現象である。これは統語成分の意味関係が文法関係と不对応になる現象である。」というように定義をしている。

周刚(1998 : 27)は「意味指示というのは、文中のある成分が文中あるいは文外の一つ或いはいくつかの成分と意味上直接的に関連することである。……言い換えれば、意味指示は主に統語上の非直接成分の間に発生した意味上の直接関係を考察する」と定義している。

周国光(2006 : 60)は「統語構造において、統語成分の間に一定の方向性と一定の目標性を持つ意味関係は意味指示である。」と定義している。

上に述べた各定義には少し差異があるが、伝える意味は大体同じである。本章では、以上の観点に基づき、「意味指示」を「文中における一つの文成分が意味上文中或いは文外の他の成分と直接に関わる」というように捉えることにする。

5.2 意味指示に関する先行研究

5.2.1 文炼(1960)による研究

文炼(1960 : 73-78)は形式と意味を結合し、「同じ形式は異なる意味を表すことができ、同じ意味は異なる形式で表すこともできる」という原則を提出し、例を挙げながら分析を行った。

(127) a. 他洗衣服洗得干干净净。(彼は服をきれいに洗った。)

b. 他看小说看得着了迷。(彼は小説に夢中になった。)

(文炼 1960 : 75)

(127a)と(127b)の形式は同じであり、いずれも「主語－述語－目的語－述語(重動)－補語」の形である。しかし、この二つの文の意味関係は同じではない。(127a)の文の補語“干干净净”は目的語の“衣服”を説明する。(127b)の文の補語“着了迷”は主語の“他”を説明する。

ここでは、文炼は「意味指示(“语义指向”)」という術語を使わなかったが、「説明(“说明”)」という言葉を使っており、これは「意味指示(“语义指向”)」に相当する。

5.2.2 吕叔湘(1979)による研究

吕叔湘(1979 : 52)は「こんな状況もある：構造関係からみれば、AはBに属するが、意味上は、AはCを指示する」と述べている。たとえば、

(128) a. 圆圆的排成一个圈。(圆的圈)(丸い円形に並べる。)

b. 走了一大截冤枉路。(走得冤枉)(大変な回り道をしてしまった。)

c. 几个大商场我都跑了。(都总括几个)(何か所のデパートにすべて行った。)

呂叔湘は文法学界で初めて明確に「指示（“指向”）」という術語を提出し、「形容詞状況語、限定語、副詞状況語」の三つの成分の意味指示を分析した。

5.2.3 刘宁生(1984)による研究

刘宁生(1984: 27-31)は初めて「意味指示（“语义指向”）」という術語を正式に使い、文頭における“在”から構成される前置詞構造の意味指示について検討し、二種類の意味指示を提出した。

①介词结构“在……”在语义上指向谓语（前置詞構造“在……”が意味上主語を指示する）。

(129) 在学校里，他是篮球选手。(学校において、彼はバスケットボール選手である。)

(刘宁生 1984 : 27)

②介词结构“在……”在语义上指向主语（前置詞構造“在……”が意味上主語を指示する）。

(130) 在掌声中，第一个走进来的是蓝东田。

(みんなの拍手の中で、始めて入ってきたのは藍東田である。)

(刘宁生 1984 : 29)

5.2.4 陆俭明(2005)による研究

陆俭明(2005 : 142-148)は《现代汉语语法研究教程》の第二章第六節において、意味指示を次のように分類した。

①意味指示の方向により、「前方指示（“前指”）」と「後方指示（“后指”）」に分けた。

②指示される成分が文中にあるか文外にあるかにより、「文中成分指示（“指向句内成分”）」と「文外成分指示（“指向句外成分”）」に分けた。

③意味指示の対象の性質により、「名詞性成分指示（“指向名词性成分”）」、「述詞性成分指示（“指向谓词性成分”）」と「数量成分指示（“指向数量成分”）」の三種に分けた。

④意味指示の対象との意味関係により、「動作主指示（“指向施事”）」、「受動者指示（“指向受事”）」、「道具指示（“指向工具”）」、「場所指示（“指向场所”）」などに分けた。

5.3 現代中国語の限定語の意味指示に関する先行研究

5.3.1 峻峽(1990)による研究

峻峽(1990 : 109-116)は限定語を「直接修飾限定語(直接中心語を修飾する限定語である。たとえば、“紅布”、“宽敞的房间”の“紅”、“宽敞”など)」と「間接修飾限定語(中心語を直接的に修飾せず、文中或いは文外のほかの成分を通して間接的に中心語を修飾する限定語である。たとえば、“快乐的星期天”の“快乐”)」の二種に分けた。その上で、間接修飾限定語を次のような六種類に分類し、例文を挙げながら説明した。

- ①指向主語(主語を意味指示する)
- ②指向主語的定语(主語の限定語を意味指示する)
- ③指向介词或动词的宾语(前置詞或いは動詞の目的語を意味指示する)
- ④指向中心語的另一个定语(中心語のほかの限定語を意味指示する)
- ⑤指向中心語的另一个定语中的某一名词性词语(中心語のほかの限定語にある名詞性成分を意味指示する)
- ⑥指向句外(文外の成分を意味指示する)

また、意味、構造、中心語の特徴などの面から間接修飾限定語の構成と使用に関する条件を分析した。

5.3.2 丁凌云(1999)による研究

丁凌云(1999 : 61-63)は限定語の意味指示を判断する二つの基準を提出した。

一つは「文の変換形式を考察する」という基準である。もし述詞性成分が限定語になる場合、この「定中構造」は主述構造に変換できる。たとえば、“她买了本新书”の限定語“新”は“书”を意味指示するので、“书新”に変換できる。

もう一つの判断基準は「意味特徴を利用して分析する」。たとえば、“他走了一大截冤枉路”の“冤枉”は[+感覚、+有生性]の意味特徴を持ち、“他”は[+有生性、+第三人称]の意味特徴を持ち、“路”は[－有生性]の意味特徴を持っているので、“冤枉”は“他”を意味指示することになる。

5.3.3 王金鑫(2004)による研究

王金鑫(2004 : 352-353、358)は感情形容詞の意味指示について詳しく論じている。その中で、感情形容詞が限定語になる場合、その意味指示の対象をどのように判定するかについて、次のような規則を提示した。

「感情形容詞が限定語になる場合、統語上に距離の一番近い人間を指し示す成分を意味指示する。もし感情形容詞に修飾される中心語が人間を指す語句であれば、感情形容詞がその中心語を意味指示する」と指摘している。

それに対して、中心語は人間を指す語句でなければ、他の成分を意味指示する。この場合、「もし、一つの統語構造にいくつかの人間を指す他の成分があれば、統語上の距離の遠近によって、意味指示の対象を判定する」と述べている。

5.3.4 邵敬敏編(2007)による研究

邵敬敏編(2007: 233)は限定語の意味指示を三種類に分類した。

①指向中心語(中心語を意味指示する)。たとえば、

(131) 我要好好地逛一逛美丽的西湖。(私はよくきれいな西湖を遊覧する。)

(邵敬敏編 2007: 233)

②指向主語(主語を意味指示する)。たとえば、

(132) 我过了一个愉快的暑假。(私は愉快的な夏休みを過ごした。)

(邵敬敏編 2007: 233)

③指向述語(述語を意味指示する)。たとえば、

(133) 陈小平看了一天的书。(陳小平は一日中本を読んでいた。)

(邵敬敏編 2007: 233)

5.3.5 蒋静忠(2008)による研究

蒋静忠(2008)は、「従来の研究は個人の語感で意味指示の対象を判定しているが、語感の個人差によって異なる結論を出すことがある。また、語感が不確定なものであるので、検証することが難しい。したがって、語感で意味指示の対象を判定することは科学的ではない」と指摘している。その上、形容詞限定語の意味指示の対象を判定する三つの規則を提出している。

- A. 意味特徴一致規則：形容詞限定語はその意味指示の対象と意味特徴が一致する。
 - B. 優先順位規則：形容詞限定語は優先的に統語上の修飾対象を意味指示する。
 - C. 動作主主語優先規則：形容詞限定語は優先的に動詞の動作主主語を意味指示する。
- この三つの規則は「A→B→C」の順序で使用する。

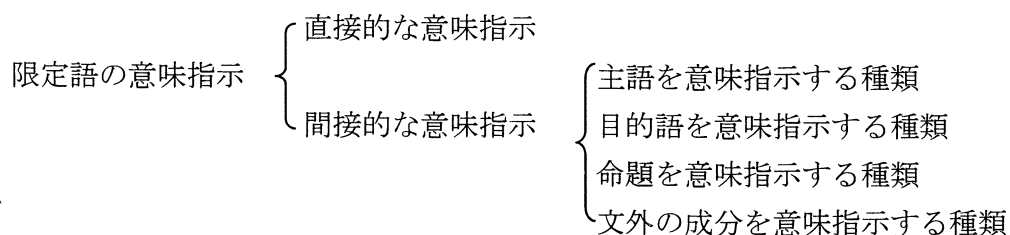
5.3.6 本論文の捉え方

峻峡(1990)で述べた「②指向主語的定语(主語の限定語を指示する)、④指向中心語的另一个定语(中心語のほかの限定語を指示する)と⑤指向中心語的另一个定语中的某一名词性词语(中心語のほかの限定語にある名詞性成分を指示する)」の三つの種類は一つの文に多重の限定語があるので、本研究はこの三つの種類を研究対象から取り除くことにする。

また、邵敬敏編(2007)によれば、“陈小平看了一天的书”の例にある限定語“一天”は述語“看”を意味指示すると述べているが、本章は論理式を運用する形式意味論の立場から、限定語“一天”は“陈小平看书”という命題を意味指示すると捉えるこ

とにする。

本章では峻峽(1990)と邵敬敏編(2007)の研究を参考し、現代中国語の限定語の意味指示を次の<図 5-1>のように分類して考察しておこう。



<図 5-1：本研究による現代中国語の限定語の意味指示の分類>

そして、意味指示の対象を判定することについては、丁凌云(1999)、王金鑫(2004)と蔣静忠(2008)の提出したいくつかの規則を総合的に運用し、意味指示の対象を判定することにする。

5.4 現代中国語の限定語の意味指示の論理分析

これまで、現代中国語における意味指示の研究は主に状況語、補語と副詞の研究に集中し、多くの重要な文法原則を発見した。それに対して、限定語の意味指示研究はあまり多くなく、今後研究する価値がある。本章では、従来の限定語の意味指示に関する研究を参考にし、形式意味論の方法を用いて、限定語の意味指示を論理式で示しながら分析する。

5.4.1 限定語の直接的な意味指示の論理分析

峻峽(1990:109)によると、「直接修飾限定語は直接中心語を修飾する限定語である」。この種の限定語は、統語上は中心語を修飾・限定し、中心語と「定中構造」という統語構造を構成する。意味上は中心語を意味指示し、中心語と直接的な意味関係が生じる。この類の限定語はすべての限定語の中によくある一種である。限定語と中心語の間の統語関係と意味関係が互いに対応しているので、「相同意味指示（“语义同指”）」^(注17)ともいう。例えば、次のような例がある。

(134) 我要好好地逛一逛美丽的西湖。(私はよくきれいな西湖を遊覧する。)

(邵敬敏編 2007 : 233) ((131) の再掲)

(135) 人民经受了严峻的考验。(人民は厳しい試練を受けた。)

(王进安 2005 : 93)

まず、(134)の例を考察してみよう。(134)の文は、統語関係から見れば、限定語“美丽”は後ろの中心語“西湖”を修飾し、「定中構造」という統語構造を構成する。

意味上は、“美丽”は「きれい、美しい」の意を表し、生命を持っている有生物の性質を表すこともできるし、生命を持っていない無生物の性質を表すこともできるので、[+性質、±有生性、]の意味特徴を持っている。“我”は人称代名詞であり、[+有生性]の意味特徴を持ち、“西湖”は非人間名詞であり、[－有生性]の意味特徴を持っている。

蒋静忠(2008)の提出した三つの規則に従い、“我”の意味特徴である[+有生性]と“西湖”の意味特徴である[－有生性]は“美丽”の意味特徴である[+性質、±有生性]に含まれているので、“我”と“西湖”は“美丽”と意味特徴が一致し、両方とも“美丽”の意味指示の対象となる可能性があるが、“西湖”は“美丽”の統語上の修飾対象であるので、“美丽”が優先に“西湖”を意味指示することになる。

次に、形式意味論を用いてこの文を考察してみよう。分析に際しては、便宜を図って、文中の限定語に関係する部分“我逛美丽的西湖”のみを取出し論理式で表記することにする。

この文には、“我逛西湖”(私は西湖を遊覧する)という命題内容と“西湖美丽”(西湖がきれいである)という命題内容の二つの命題内容が含まれている。第一の命題を述語論理で表すと、“逛’(我, 西湖)”になる。これは、「遊覧する」という他動詞を関数“逛’”とし、“我”と“西湖”を項とする2項関数である。第二の命題を述語論理で表すと、“美丽’(西湖)”となる。これは、「きれい」という形容詞を関数“美丽’”とし、“西湖”を項とする1項関数である。この二つの命題をすべて含む文全体の論理式は次の(134-①)になる。

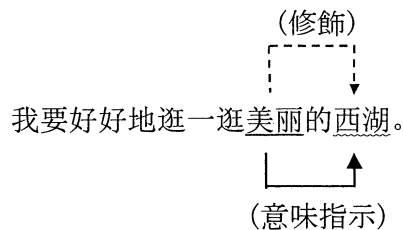
(134-①)逛’(我, 西湖)&美丽’(西湖)

遊覧スル ～ガ ～ヲ 綺麗デアル ～ガ

この論理式は「私が西湖を遊覧する、かつ、西湖がきれいである」と読む。ここでは、第一命題の“逛’”関数の第二項“西湖”が第二命題“美丽’(西湖)”の項になっているので、演繹モデルを構成し、この二項の間には連鎖関係がみられる^(注18)。

この論理式を見ると、限定語“美丽”が関数となり、中心語“西湖”がこの関数の項となり、直接第二命題の“美丽’(西湖)”を構成するので、限定語“美丽”が中心語“西湖”を意味指示し、直接的な意味関係を持つことを明示している。

以上の説明によると、限定語“美丽”と中心語“西湖”の間に、統語関係と意味関係が互いに対応していることがわかる。この統語関係と意味関係は次の<図 5-2>のように表示できる。(<→>は意味関係を表す。<-->は統語関係を表す。以下は同様である。)



〈図 5-2：“我要好好地逛一逛美丽的西湖”の統語関係と意味関係〉

続いて、(135)の例について考えてみよう。この文も上記と同じような解釈が可能である。統語関係から考えると、形容詞“严峻”は後の名動詞“考验”を修飾し、「定中構造」を構成し、“严峻”は“考验”の直接修飾成分となる。

意味上から考えると、“严峻”は「厳しい、重大だ」の意を表し、情勢・事態・方式などを記述するので、[－有生性]の意味特徴を持っている。“人民”は人間を表す名詞であり、[＋有生性]の意味特徴を持ち、“严峻”の意味特徴と一致していない。

“考验”は非人間名詞であり、[－有生性]の意味特徴を持ち、“严峻”の意味特徴と一致している。その結果、限定語“严峻”は中心語“考验”を意味指示し、直接的な意味関係を構成する。

次に、(135)の文を論理式で表記し分析する。便宜を図って“人民经受严峻的考验”に簡略して考察を進めることにする。

この文は、“人民经受考验”（人民は試練を受ける）と“考验严峻”（試練が厳しい）の二つの命題を含んでいる。第一の命題を述語論理で表記すると、「经受’（人民，考验）”になる。これは、「受ける」という他動詞を関数“经受’”とし、“人民”と“考验”を項とする2項関数である。第二の命題を述語論理で表すと、“严峻’（考验）”となる。これは、「厳しい」という形容詞を関数“严峻’”とし、“考验”を項とする1項関数である。さらに、命題論理で連言の論理結合子をつけると、次の(135-①)になる。

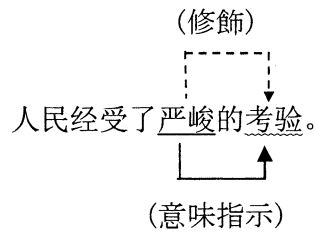
(135-①) 经受’（人民，考验）& 严峻’（考验）

ウケル ～が ～ヲ キビシイ ～が

この論理式は「人民が試練を受ける、かつ、試練が厳しい」と読む。この論理式で、第一命題の“经受’（人民，考验）”の第二項“考验”が第二命題“严峻’（考验）”の項になっているので、演繹モデルを構成し、またこの二項の間には連鎖関係が存在する。

この論理式を見ると、限定語“严峻”が関数となり、中心語“考验”がこの関数の項となる。“考验”が第二命題“严峻’（考验）”の項“考验”と連鎖関係を構成する。つまり、限定語“严峻”が中心語“考验”を意味指示し、直接的な意味関係を持つことが明示されている。

従って、限定語“严峻”は中心語“考验”の統語関係と意味関係が互いに対応しているので、次の<図 5-3>のように表示できる。



<図 5-3：“人民经受了严峻的考验”の統語関係と意味関係>

念のために、もう一つの例を見たい。

(136) 反对者遭到了强烈的镇压。(反对者は残酷な镇压を受けた。)

(著者の自作例)

(136)の文は、統語関係から考えると、形容詞“强烈”は後ろの名動詞“镇压”を修飾し、「定中構造」を構成し、“强烈”は“镇压”の直接修飾成分となる。

意味関係から考えると、“强烈”は「激しい、強烈だ、猛烈だ」の意を表し、力や程度などの強さを表す形容詞であるので、[一有生性]の意味特徴を持っている。“反对者”は人間を表す名詞であり、[+有生性]の意味特徴を持ち、“严峻”の意味特徴と一致していない。“镇压”は非人間名詞であり、[一有生性]の意味特徴を持ち、“严峻”の意味特徴と一致している。その結果、限定語“强烈”は中心語“镇压”を意味指示し、直接的な意味関係を構成している。

次に、(136)の文を“反对者遭到强烈的镇压”に簡略して論理式を用いて意味構造を分析する。

この文は、“反对者遭到镇压”(反对者は镇压を受ける)と“镇压强烈”(镇压が残酷である)の二つの命題内容を含んでいる。第一の命題内容を述語論理で表すと、“遭到’(反对者, 镇压)”になる。これは、「受ける」という他動詞を関数“遭到’”とし、“暴动”と“镇压”を項とする2項関数である。第二の命題内容を述語論理で表すと、“强烈’(镇压)”となる。これは、「残酷だ」という限定語を関数“强烈’”とし、“镇压”を項とする1項関数である。この二つの命題をすべて含む文全体の論理式は次の(136-①)になる。

(136-①) 遭到’(反对者, 镇压)&强烈’(镇压)

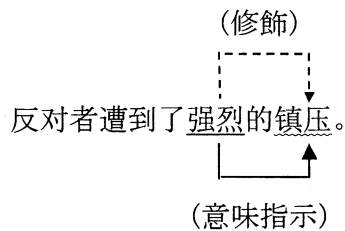
ウケル ～が ～ヲ 残酷が ～が

この論理式は「反对者は镇压を受ける、かつ、镇压は残酷である」と読む。ここでは、第一命題“遭到’(反对者, 镇压)”の第二項“镇压”が第二命題“强烈’(镇压)”

の項になっているので、演繹モデルを構成し、この二項の間には連鎖関係が存在する。

この論理式を見ると、限定語“强烈”が関数となり、中心語“镇压”がこの関数の項となり、“镇压”が連鎖して第二命題“强烈’(镇压)”を構成する。第二命題は限定語“强烈”が中心語“镇压”を意味指示し、直接な意味関係を持つことを明示している。

このように、限定語“强烈”は中心語“镇压”の統語関係と意味関係が互いに対応しているので、次の<図 5-4>のように表示できる。



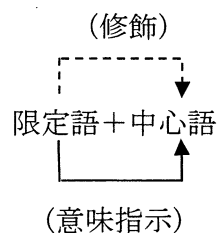
<図 5-4：“反对者遭到了强烈的镇压”の統語関係と意味関係>

この種の「定中構造」において、中心語が名詞であろうと名動詞であろうと、限定語は後ろの中心語を修飾し、直接成分関係となる。

また、論理式を考察すると、限定語が関数“X'”となり、中心語がその関数の項“ α ”になり、直接的に次の(137)のような一つの命題を構成することができる。

(137) X' (α)

(137)から限定語は中心語を意味指示し、直接的な意味関係を持つことがわかる。したがって、この種類の限定語は、統語面でも、意味面でも、いずれも直接な関係をもっているので、統語関係と意味関係が互いに対応している。本章はこのような限定語の意味指示を「直接的な意味指示」と呼ぶことにする。図で示すと次のようになる。



<図 5-5：限定語の直接的な意味指示の統語関係と意味関係>

5.4.2 限定語の間接的な意味指示の論理分析

前節において統語関係と意味関係が互いに対応している限定語の意味指示を検討したが、次のような場合もある。たとえば、

(138) 我过了一个愉快的暑假。(私は愉快な夏休みを過した。)

(邵敬敏編 2007 : 233) ((132)の再掲)

(139) 他做了一个惬意的梦。(彼は心地よい夢を見た。)

(邵敬敏編 2007 : 233)

統語関係は、これらの文の限定語“愉快”、“惬意”が後ろの中心語“暑假”、“梦”を修飾し、「定中構造」を構成し、直接成分関係となる。意味関係は、限定語は中心語以外のほかの成分を意味指示し、意味関係を構成している。統語関係と意味関係が対応せず、ずれが発生している。このような意味指示を「相違意味指示(“语义异指”)^(注19)と呼んでいる。ここでは意味指示の対象がどのような文成分になるかにより、次のいくつかの種類に分けて論じる。

5.4.2.1 主語を意味指示する種類

本節は、「命題論理」と「述語論理」を用いて、限定語を含む文の意味構造を論理式で示し、限定語が意味上主語を意味指示することを考察する。まず、(138)の文を見てみよう。

(138)の文の形容詞“愉快”は、統語構造から見れば、中心語の“暑假”を修飾し、「定中構造」を構成している。“愉快”は“暑假”の直接修飾成分となる。

しかし、“愉快”は「楽しく気持ちよい」という人間の感情・感覚などを表す感情形容詞であり、[+感情、+有生性]の意味特徴を持っている。“我”は人称代名詞であり、[+感情、+有生性]の意味特徴を持ち、“愉快”の意味特徴と一致している。

“暑假”は非人間名詞であり、[-感情、-有生性]の意味特徴を持ち、“愉快”の意味特徴と一致していない。その結果、限定語“愉快”はこの文の主語である“我”を意味指示し、直接的な意味関係を構成する。

次に、(138)の文を形式意味論の技法を用いて考察してみよう。(138)の命題表現には次の(138a)と(138b)の二つの命題内容が含まれている。

(138a) 我过了一个暑假。(私は夏休みを過ごした。)

(138b) 我在暑假愉快。(私は夏休みに愉快である。)

この二つの命題内容にある“暑假”は違う格役割を演じている。(138a)では“暑假”は“过”の[対格]であり、(138b)では“暑假”は“我愉快”の[位格]である。(138a)は顕在的な命題内容であり、(138b)は潜在的な命題内容である。

(138a)の命題内容は、“我过暑假”(私が夏休みを過す)、“暑假有一个”(夏休みが一つある)、の二つの命題表現を含んでいる。第一の命題表現を述語論理で表すと“过”(我, 暑假)となる。これは、「過す」という動詞を関数“过”とし、“我”と“暑假”を項とする2項関数である。第二の命題表現を述語論理で表すと“有”(暑假,

一个)”となる。これは、「ある」という動詞を関数“有’”とし、“暑假”と“一个”を項とする2項関数である。この二つの命題を単純に連言の論理結合子によって結合すると“过’ (我, 暑假)&有’ (暑假, 一个)”になる。

(138b)は潜在的な命題内容で、(138a)の顕在的な命題内容と共に起している。つまり、「私は夏休みを過す」という行為と同時に、「私は夏休みに愉快である」という事態が存在している。しかし、“过’ (我, 暑假)&有’ (暑假, 一个)”の論理式では、“我”と“愉快”の関係が示されていない。この関係を明示するには、(138a)と(138b)を含む文の論理式を“在”関数“在’ (α, β, γ)”として捉えることにすればよい。“在”構文は三つの項をとる三項述語である。第三項には関数の値が代入され、全体で二つの個体と一つの複合命題の関係を表す。この関数の項の α と β は個体で、 γ は命題である。 α 項には“我”が入り、 β 項には“暑假”が入ると、次のような式になる。

(138-①) 在’ (我, 暑假, γ)

アル ~ガ ~ニ ~トウ状態ニ

γ 項は複合命題である。 γ 項に含まれる命題をすべて表記すると以下のようなになる。

(138-②) γ 項の論理式:

スコス ~ガ ~ヲ アル ~ガ ヒツ イル ~ガ ~ニ ユイ ~ガ

过’ (我, 暑假)&有’ (暑假, 一个)&到’ (一个, 我)&愉快’ (我)

$\gamma 1$	$\gamma 2①$	$\gamma 2②$	$\gamma 2③$
(格役割)	(量化 1)	(量化 2)	(量化 3)
[動作]	[時相 1]	[時相 2]	[時相 3]

スル ~ガ [完了]ヲ

&有’ {愉快’ (我), 了}

$\gamma 3$

(着点)

[時態]

上記の式(138-②)の γ 項の最初の命題には命題表現「私が夏休みを過す」を表す論理式 $\gamma 1$ “过’ (我, 暑假)”が生起する。「私が夏休みを過す」は動作であり、“我”が「動作主」を“暑假”が「対格」の格役割を持つことを表している。続く命題表現「夏休みが一つある」を表す論理式は $\gamma 2①$ “有’ (暑假, 一个)”である。第三は命題表現「その一つが私に至る」で、その論理式は $\gamma 2②$ で“到’ (一个, 我)”になる。第四は命題表現「私が愉快である」で、論理式は $\gamma 2③$ “愉快’ (我)”である。第二から第四の命題は“暑假”の量“一个”とそれにかかわる対象“我”とその精神活動“愉快”を決定するので(数)量化と考えることができる。第五の命題表現「私

は愉快だった」は量化されたできごとを参照時間軸上に配置するので、[着点]となり、 $\gamma 3$ “有’ {愉快’ (我), 了}”となる。このように γ 項の $\gamma 1$ には[格役割]が、 $\gamma 2$ には[時相]が、 $\gamma 3$ には[時態]が現れる。 γ 項の式を(138-①)の式に代入し、(138)の文全体の意味構造を表すと、論理式は以下のように書ける。

(138-③) 在’ [我, 暑假, 过’ (我, 暑假)&有’ (暑假, 一个)&到’ (一个, 我)

アル ~が ~に

α β

&愉快’ (我)&有’ {愉快’ (我), 了}}

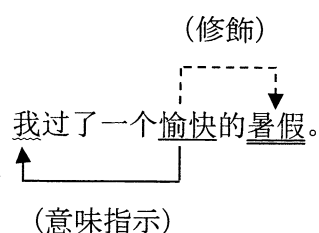
~トウ状態=

γ

この論理式は、「私が夏休みに、私が夏休みを過す、かつ、夏休みが一つある、かつ、一つが私に至る、かつ、私が愉快である、かつ、私が愉快であることが[完了]をするという状態にある」と読む。

γ 項は連言で結ばれた複合命題であり、連鎖関係を持っている。(138-③)の論理式中では、「暑假」と「暑假」、「一个」と「一个」、「我」と「我」が連鎖し、最後に「愉快’ (我)」と「愉快’ (我)」の間に連鎖関係が存在しているので、全体として一つのできごとを表す。

(138-③)の“愉快’ (我)”($\gamma 2$ ③)は命題表現「私が愉快である」を表すことから、“愉快”は“我”を意味指示していることがわかる。したがって、(138)の文の限定語に関する統語関係と意味関係を表示すると次の<図 5-6>になる。



<図 5-6 : “我过了一个愉快的暑假”の統語関係と意味関係>

この図から、限定語“愉快”は“暑假”を修飾し、直接統語成分関係を構成しているが、意味上は文中にある主語“我”を意味指示し、直接的な意味関係を構成している。統語関係と意味関係の間にずれが生じていることがわかる。

次に、(139)の文を見てみよう。(139)の文の形容詞“惬意”は後ろの中心語“梦”を修飾し、「定中構造」を構成し、直接統語成分関係となる。

しかし、“惬意”は「気持ちがいい、心地よい、満足する」の意味を表し、人の心理感情・感覚を表す形容詞であり、[+感情、+有生性]の意味特徴を持っている。“梦”

は非人間名詞であり、[－感情、－有生性]の意味特徴を有し、“惬意”の意味特徴と一致していない。一方、“他”は人称代名詞であり、[＋感情、＋有生性]の意味特徴を持ち、“惬意”の意味特徴と一致している。その結果、限定語“惬意”はこの文の主語である“他”を意味指示し、直接的な意味関係を構成する。

続いて、(139)の例を形式意味論の方法を使用して考察してみよう。(139)の例は(138)の例と同様に二つの命題内容を含んでいる。

(139a) 他做了一个梦。(彼は夢を見た。)

(139b) 他在梦里惬意。(彼は夢に心地よい。)

この二つの命題内容にある“梦”は二つの格役割を果たしている。(139a)では“梦”は“做”の[対格]であり、(139b)では“梦”は“我惬意”の[位格]である。(139a)は顕在的な命題内容であるのに対し、(139b)は潜在的な命題内容である。

(139a)の命題内容は、“他做梦”(彼が夢を見る)、“梦有一个”(夢が一つある)の二つの命題表現を含んでいる。第一の命題表現を述語論理で表すと、“做’(他, 梦)”となる。これは「見る」という動詞を関数“做’”とし、“他”と“梦”を項とする2項関数である。第二の命題表現を述語論理で表すと、“有’(梦, 一个)”となる。これは、「ある」という動詞を関数“有’”とし、“梦”と“一个”を項とする2項関数である。この二つの命題を連言「&」で結ぶと“做’(他, 梦)&有’(梦, 一个)”になる。

(139b)は潜在的な命題内容で、(139a)の顕在的な命題内容と共起している。つまり、「彼は夢を見る」と同時に、「彼は夢に心地よい」という事態が存在しているが、“做’(他, 梦)&有’(梦, 一个)”の式では、“他”と“惬意”の関係が示されていない。この関係を明示するために、(139a)と(139b)を含む文の論理式を“在’関数“在’(α, β, γ)”で統合する。この関数の項の α と β は個体で、 γ は命題である。 α 項には“他”が入り、 β 項には“梦”が入ると、次のような式になる。

(139-①) 在’ (他, 梦, γ)

アル ~ガ ~ニ ~トウ状態ニ

γ 項は複合命題であり、含まれる命題をすべて表記すると次の(139-②)になる。

(139-②) γ 項の論理式：

ミル	~ガ	~ヲ	アル	~ガ	ヒツ	イタル	~ガ	~ニ	コチヨイ	~ガ
做’	(他,	梦)	&有’	(梦,	一个)	&到’	(一个,	他)	&惬意’	(他)
$\gamma 1$			$\gamma 2①$			$\gamma 2②$			$\gamma 2③$	
(格役割)			(量化 1)			(量化 2)			(量化 3)	
[動作]			[時相 1]			[時相 2]			[時相 3]	

$\text{スル} \quad \sim\text{ガ} \quad [\text{完了}] \gamma$
 &有' {惬意' (他), 了}
 $\gamma 3$
 (着点)
 [時態]

上記の式(139-①)の γ 項の最初の命題には命題表現「彼が夢を見る」を表す論理式 $\gamma 1$ “做' (他, 夢)” が生起する(139-②)。「彼が夢を見る」は動作であり、“他” が[動作主]を、“夢” が[対象格]を表すので格役割を表示している。次の命題表現「夢が一つある」を表す論理式は $\gamma 2$ ① “有' (夢, 一个)” である。第三は命題表現「その一つが彼に至る」で、その論理式は $\gamma 2$ ②で “到' (一个, 他)” になる。第四は命題表現「彼が心地よい」で、その論理式は “惬意' (他)” ($\gamma 2$ ③)である。第二から第四の命題は“夢”の量“一个”とそれにかかわる対象“他”とその精神活動“惬意”を決定するので(数)量化と考えることができる。「量化」の概念は「時相」を表す。第五の命題表現「彼が心地よかった」は量化されたできごとを時間体系の中の参照時間軸上の[完了]という「時態」、つまり一種の[着点]に導く役割、つまり「着点」表示をして、 $\gamma 3$ “有' {惬意' (他), 了}” となる。このように γ 項の $\gamma 1$ には[格役割]が、 $\gamma 2$ には[時相]が、 $\gamma 3$ には[時態]が現れる。 γ 項の式を(139-①)の式に代入し、(139)の文全体の意味構造を表すと、論理式は以下のように書ける。

(139-③) 在' [他, 夢, 做' (他, 夢) & 有' (夢, 一个) & 到' (一个, 他)]

$\text{アル} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ}$
 $\alpha \quad \beta$

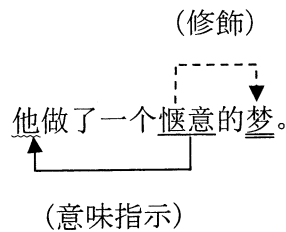
&惬意' (他) & 有' {惬意' (他), 了}}

～トウ状態＝

γ

この論理式は「彼が夢に、彼が夢を見る、かつ、夢が一つある、かつ、一つが彼に至る、かつ、彼が心地よい、かつ、彼が心地よいことが[完了]をするという状態にある」と読む。 γ 項は連言で結ばれた複合命題であり、連鎖関係を持っているので、全体が一つの文の意味を表示できる。

(139-③)の論理式の中で、 $\gamma 2$ ③の“惬意' (他)”は「彼が心地よい」という潜在的な命題内容を示すことから、限定語の“惬意”は主語の“他”を意味指示することがわかる。そこで、(139)の文の統語関係と意味関係を図で示すと、次のようになる。



〈図 5-7：“他做了一个惬意的梦”の統語関係と意味関係〉

この図から、限定語“惬意”は統語上“梦”を修飾し、直接成分関係を構成しているが、意味上は文中にある主語“他”を意味指示し、直接的な意味関係を構成している。統語関係と意味関係が互に対応しない、ということがわかる。

5.4.2.2 目的語を意味指示する種類

峻峡(1990)によれば、意味指示される目的語は前置詞の目的語と動詞の目的語の二つのタイプがある。例えば、

(140) 等着吧，学校一定会给你们一个最满意的答复。

(待ってなさい。学校側は必ず君たちに最も満足な返事を与える。)

(峻峡 1990 : 113)

(141) 它都就马上应合着，给祥子以最顺心的帮助。

(そのものはすぐに応じて、祥子に最も気に入る助けをあげる。)

(老舍《骆驼祥子》峻峡 1990 : 113 引用例)

この二つの例は動詞の目的語に関する例である。朱德熙(1982:117-118)によると、二重目的語とは一つの動詞の後に二つの目的語が連なって現れるものをいう。二重目的語のうちで動詞に近い方の目的語を近置目的語と呼び、動詞から遠い方の目的語を遠置目的語と呼ぶ。授与の意味を表す二重目的語構造では、近置目的語が受け取り手を示し、遠置目的語が授与物を示す。

二重目的語構造のある文において、遠置目的語を修飾する限定語が人間の感情、精神、動作などとかかわる。つまり[+有生性]の意味特徴を有する場合、その限定語は意味上近置目的語を意味指示する。まず、(140)の例を考察してみよう。議論の便宜を図って(140)の文を“学校给你们一个满意的答复”に簡略し、分析を進めることにする。

統語関係の視点から考察すれば、形容詞“满意”は後ろの“答复”を修飾し、「定中構造」をなすので、“满意”は“答复”の限定語と呼ばれる。

しかし、[+感情、+有生性]の意味特徴を有している。中心語となる“答复”は人間ではないので、[-感情、-有生性]の意味特徴を持っている。

“满意”と“答复”の意味特徴が一致していないので、“答复”が“满意”の意味指

次に、形式意味論の演繹的視点から(140)の文を考察する。(140)の命題表現には二つの命題内容が含まれている。

(140b) 你们满意。(君たちは満足である。)

アタエ ～ガ^レ ～ヲ アル ～ガ^レ ヒトツ

スル ～カ^ニ ～ニ

イタル ～カ³ ～ニ

～コトヲ

スル　　～ガ^ニ　　～ニ満足スル　～カ^ゞ

～コトヲ

127

(140-②) 给' {学校, 你们, 给'(学校, 答复)&有'(答复, 一个)&到' (一个, 你们)}

$\gamma 1$	$\gamma 2①$	$\gamma 2②$
(格役割)	(量化 1)	(量化 2)
[動作]	[時相 1]	[時相 2]
α	β	

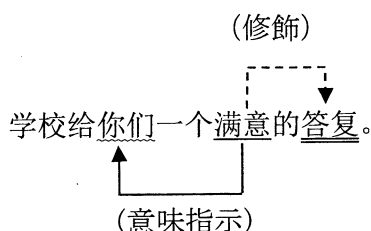
&满意' (你们)}

$\gamma 3$
(着点)
[時態]
 γ

ここでは、 γ の部分が文の意味を構成する複合命題を表し、 α と β はその中から抽出された文中の役割を表す成分である。ここで $\gamma 1$ 、 $\gamma 2$ 、 $\gamma 3$ が何を表しているかを述べる。 $\gamma 1$ は“学校”と“答复”が「動作主」と「対象格」という関係にあることを表している。つまり $\gamma 1$ は「格役割」を表す。 $\gamma 2①$ は「対象格」“答复”の数量を“一个”に決定する(数) 量化の役を果たし、 $\gamma 2②$ は「対象格」“一个”が“你们”に至るとい動作“给”の「終息」を表し、「量化」(時相)と捉えられる。その結果 $\gamma 3$ は“你们”が“满意”という感情を持つことを表し、結果事態であり、命題全体の「着点」を表す。 α の“学校”、 β の“你们”は γ から抽出されているので、それぞれ話題、副話題となる。

上記の式では、 $\gamma 1$ の第二項が $\gamma 2①$ の第一項に生起し、 $\gamma 2①$ の第二項が $\gamma 2②$ の第一項に生起し、 $\gamma 2②$ の第二項が $\gamma 3$ の第一項に生起するというように、四つの命題が連鎖しているので命題が生起する順序が維持される。この連鎖により、ある現実世界(可能世界)において $\gamma 1 \sim \gamma 3$ が同時に成立することが保証される。

(140-①) の論理式の中で、 $\gamma 3$ の“满意' (你们)”は「君たちが満足である」という潜在的な命題内容を示すことから、限定語の“满意”は近置目的語“你们”を意味指示することがわかる。すると、(140) の文の統語関係と意味関係を図で示すと、次のようになる。



〈図 5-8：“学校给你们一个满意的答复”の統語関係と意味関係〉

この図は、限定語“满意”は統語上“答复”を修飾し、直接成分関係を構成してい

129

(141-①) 给' {它, 祥子, 给' (它, 帮助) & 到' (帮助, 祥子) & 顺心' (祥子)}
 3ル ~カ° ~ニ ~コト

この論理式は「そのものが、祥子に、そのものが助けを与え、かつ、助けが「祥子」にいたり、かつ、「祥子」が気に入る、ことをする」と読める。そこで、この式の“給”関数の各項をそれぞれ α 、 β 、 γ とし、さらに γ を下位区分して γ_1 、 γ_2 、 γ_3 として、それぞれの果たしている役割を考えてみよう。

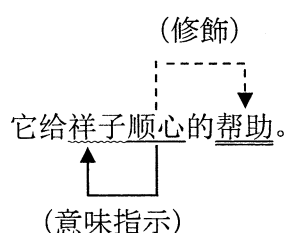
(141-②) 给' {它, 祥子, 给' (它, 帮助) & 到' (帮助, 祥子) & 顺心' (祥子)}

	γ 1	γ 2	γ 3
	(格役割)	(量化)	(着点)
	[動作]	[時相]	[時態]
α	β		γ

上記の式では、 γ の部分が文の意味を構成する複合命題を表し、 α と β はそこから抽出された文中の役割を表す成分である。 γ_1 は“它”と“帮助”が「動作主」と「対象格」という関係にあることを表している。つまり γ_1 は「格役割」を表す。 γ_2 の命題は、“帮助”が“祥子”に到達すること示している。この“帮助”の空間的移動は数量として計算可能なので、「量化」を表しているといえる。中国語の文では動作が量を持つことで[時相]が確定する。最後に、 γ_3 に生起する命題“顺心”(祥子)は、「祥子が気に入る」という意味を表す。 γ 項の複合命題の中で、この命題は「そのものが助けを与える」ことが原因で生じた結果事態を表している。つまり、 γ_3 は結果事態を表すので、これを「着点」と呼ぶことにする。 α の“它”、 β の“祥子”は γ から抽出されているので、それぞれ話題、副話題となる。

γ_1 の第二項が γ_2 の第一項に生起し、 γ_2 の第二項が γ_3 の第一項に生起するというように、三つの命題が連鎖しているので命題が生起する順序が維持される。この連鎖により、一つの文の意味を表示できる。

(141-①)の論理式の中で、 $\gamma 3$ の“顺心”(祥子)は「祥子が気に入る」という潜在的な命題内容を示すことから、限定語の“顺心”は近置目的語“祥子”を意味指示することがわかる。(141)の文の統語関係と意味関係を図で示すと、次のようになる。



〈図 5-9：“它给祥子顺心的帮助”の統語関係と意味関係〉

この図は、限定語“顺心”は統語上“帮助”を修飾し、直接成分関係を構成しているが、意味上は述語“给”の近置目的語“祥子”を意味指示し、直接的な意味関係を構成していることを示す。統語関係と意味関係が互いに対応しないことがわかる。

また、前置詞の目的語を意味指示する例として、峻峽(1990)は次の例を挙げている。

(142) 道静一边擦着眼泪一边说,“所以(父亲)给我取了这么个讨厌的名字。”

(道静が涙を拭きながら、「だから(父)は私にこんな嫌な名前を付けてくれた」と言った。)

(杨沫《青春之歌》峻峽 1990 : 113 引用例)

ここで、“(父亲)给我取讨厌的名字”に簡略して考察することにする。統語構造から考えると、形容詞“讨厌”は後ろの“名字”を修飾し、「定中構造」を構成するので、“讨厌”は“名字”の限定語となる。

しかし、意味上から考えれば、“讨厌”は「嫌い、好きではない」という人間の感情を表すので、[+感情、+有生性]の意味特徴を備え、人間を表す語だけと意味関係を構成できる。中心語“名字”は非人間を表す名詞であるので、[-感情、-有生性]の意味特徴を持ち、“讨厌”を感じる主体となることができない。“讨厌”と“名字”の意味特徴が一致していないので、“讨厌”が“名字”を意味指示することができない。

一方、主語の“父亲”と前置詞の目的語の“我”が人間を指す名詞であり、両方とも[+有生性]の意味特徴を持っているので、“讨厌”の意味特徴と一致しているが、統語上の距離から考えると、“我”が“讨厌”と一番近い。その結果、限定語“讨厌”は近置目的語“我”を意味指示する。

この文は前置詞“给”により構成され、“我”は前置詞の目的語である。限定語“讨厌”は中心語“名字”と直接の意味関係を持たず、前置詞の目的語“我”と直接の意味関係を持っている。つまり、限定語“讨厌”は前置詞の目的語“我”を意味指示する。

この例も(140)と(141)の例と同じような解釈ができる。(142)の命題表現は次の二つの命題内容を含んでいる。

(142a) (父亲)给我取名字。(父が私に名前を付けてくれる。)

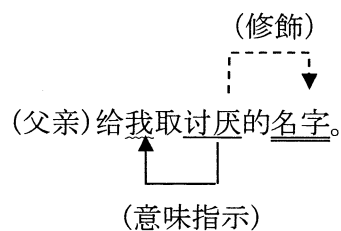
(142b) 我(感到)讨厌。(私が嫌だ。)

(142a)は顕在的な命題内容であり、(142b)は潜在的な命題内容である。二つの命題を明示するために、次の論理式で示す。

ツケル ～ガ° ～ヲ			イタル ～ガ° ～ニ			イヤダ° ～ガ°		
(142-①) 给’ {父亲, 我, 取’ (父亲, 名字) & 到’ (名字, 我) & 讨厌’ (我)}								
スル ～ガ° ～ニ						～コトヲ		
γ 1			γ 2			γ 3		
(格役割)			(量化)			(着点)		
[動作]			[時相]			[時態]		
α β			γ					

上記の式では、γ 1 の第二項が γ 2 の第一項に生起し、γ 2 の第二項が γ 3 の第一項に生起するというように、三つの命題が連鎖しているので命題が生起する順序が維持される。この連鎖により、一つの文の意味を表示できる。

(142-①) の論理式の中で、γ 3 の“讨厌’ (我)”は「私が嫌だ」という潜在的な命題内容を示すことから、限定語の“讨厌”は前置詞の目的語“我”を意味指示することがわかる。(142) の例の統語関係と意味関係を図で示すと、次のようになる。



＜図 5-10：“(父亲)给我取讨厌的名字”の統語関係と意味関係＞

この図は、限定語“讨厌”は統語上“名字”を修飾し、直接成分関係を構成しているが、意味上は前置詞“给”の目的語“我”を意味指示し、直接的な意味関係を構成していることを示す。統語関係と意味関係が互いに対応しないことがわかった。

5.4.2.3 命題を意味指示する種類

邵敬敏编(2007)は限定語の意味指示について、次のような例を挙げた。

(143) 陈小平看了一天的书。(陳小平は一日中本を読んでいた。)

(邵敬敏编 2007 : 233) ((133) の再掲)

(144) 孙静在家等了一上午的电话。(孫静は家で午前中に電話を待っていた。)

(邵敬敏编 2007 : 233)

邵敬敏编(2007)は、(143) の文を“陈小平看书+看了一天”に変換し、(144) の文を“孙静在家等电话+等了一上午”に変換することができるので、限定語になる“一天”“一上午”が述語の“看”“等”を意味指示すると考えている。本節では、邵敬敏编(2007)で挙げているこの二つの文を論理式を用いて詳しく論じることにする。

まず、(143)の文を考察する。(143)の文を統語構造から考察すると、時間量詞“一天”は後ろの名詞“书”を修飾し、「定中構造」を構成するので、“一天”は“书”の限定語となる。

一方、意味関係から考えるならば、限定語になる“一天”は瞬間性を表す時間量詞ではなくて、一定の時間量を持つ持続性を表す時間量詞であるので、[+持続]の意味特徴を有する。しかし、中心語“书”は持続性を持っていない具体名詞であるので、[-持続]の意味特徴を備えている。したがって、限定語“一天”と中心語“书”の間に統語的には修飾と被修飾のような関係を持っているが、直接の意味関係は持っていない。なお、“一天”は一定の時間量を持っていて、動作・行為などの持続時間を表すので、(143)の文では“看书”という動作の持続する時間を表し、直接の意味関係を構成する。

続いて形式意味論の演繹的視点から改めて(143)の文を考察する。(143)の命題表現には次の二つの命題内容が含まれる。

(143a) 陈小平看书。(陳小平が本を読む。)

(143b) 陈小平看书看了一天。(陳小平が本を読むことが一日である。)

(143a)は顕在的な命題内容であり、述語論理で表記すると、「読む」という他動詞を関数“看’”とし、“陈小平”と“书”を項とする二項関数である。論理式は次の(143a-①)になる。

(143a-①) 看’ (陈小平, 书)

ヨム ~ガ ~ヲ

しかし、(143a-①)の論理式では(143b)の潜在的な命題内容が表示されていない。この命題内容を明示するために、まず次のメタ言語付きの論理式で表示する。

ヨム ~ガ ~ヲ ナル ~ガ ~ニ スル

(143-①) 看’ (陈小平, 书) & 到’ {看’ (陈小平, 书), 一天} & 有’ [到’ {看’ (陈

~ガ [完了]ヲ

小平, 书), 一天}, 了]

(143)の文を中国語に即して考えると、まず「陳小平が本を読む」という単純命題が構成され、それは“看’ (陈小平, 书)”で表記される。次にこの命題が“一天”と組み合わせられる。“看”が「開始を表す動詞」で“一天”が「終息を表す成分(時間)」である。意味は少し不自然であるが、「陳小平が本を読むことが一日になる」という

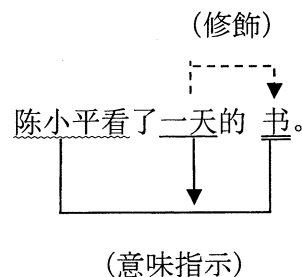
複合命題が成立する。この複合命題は“到’{看’(陈小平, 书), 一天}”と表される。ここまでの「本を読む」という「動作の時間量」が決定され、時間に至ると肉体的動きがゼロになるので数量化が行われて、時相が決定する。最後に「陳小平が本を読むことが一日になる」という動作が参照時間点において[完了]をするので、これは“有’[到’{看’(陈小平, 书), 一天}, 了]”という複合命題で表記される。これらの命題内容はこの順に同時に成立しなければならないので、連言の論理結合子で結合すると次の論理式になる。 $\gamma 1$ が格役割、 $\gamma 2$ が量化、 $\gamma 3$ が着点を表示している。

(143-②) 看’ (陈小平, 书) & 到’ {看’ (陈小平, 书), 一天} & 有’ [到’ {看’ (陈小平, 书), 一天}, 了]

$\gamma 1$	$\gamma 2$	$\gamma 3$
(格役割)	(量化)	(着点)
[動作]	[時相]	[時態]

この論理式は「陳小平が本を読む、かつ、陳小平が本を読むことが一日になる、かつ陳小平が本を読むことが一日になることを[完了]する」と読む。(143-②)の論理式では $\gamma 1$ が $\gamma 2$ の第一項に生起し、 $\gamma 2$ が $\gamma 3$ の第一項に生起するというように連鎖しているの、全体として一つのできごとを表す。

(143-②)の論理式の $\gamma 2$ から、限定語の“一天”と命題“陈小平看书”の間に直接の意味関係が存在していることがわかる。すなわち、“一天”は命題“陈小平看书”を意味指示する。(143)の文の統語関係と意味関係を図で示すと、次のようになる。



〈図 5-11：“陈小平看了一天的书”の統語関係と意味関係〉

この図は、限定語“一天”は統語上中心語“书”を修飾し、直接成分関係を構成しているが、意味上は命題“陈小平看书”を意味指示し、直接的な意味関係を構成していて、統語関係と意味関係が対応しないことを示している。

次に、(144)の文を考えてみよう。統語構造を考えると、時間量詞“一上午”は名詞“电话”を修飾し、「定中構造」を構成するので、統語的には“一上午”と“电话”は限定語と中心語の関係になる。

しかしながら、意味の面から考察すると、“一上午”は持続性を持っている時間量詞であり、[+持続]の意味特徴があるので、通常持続性を持つほかの文成分と直接の

意味関係を構成することが求められる。一方、中心語の“电话”は持続性を持っていない具体名詞であるので、「一持続」の意味特徴がある。その結果、限定語“一上午”と中心語“电话”の間には統語関係は存在しているが、直接の意味関係は構成することができない。(144)の文では、“等电话”という持続できる動作が存在する。この動作の持続する時間を表して、直接の意味関係を構成することは可能である。

(143)の文と同様に、(144)の文の必要な部分を取り出して分析すると、(144)の命題表現は次の二つの命題内容を含んでいる。

(144a) 孙静等电话。(孙静が電話を待つ。)

(144b) 孙静等电话等了一上午。(孙静が電話を待つことが午前中になる。)

(144a) は顕在的な命題内容であり、「待つ」という他動詞を関数「等」とし、“孙静”と“电话”を項とする二項関数である。述語論理で表記すると、次の(144a-①)になる。

(144a-①) 等' (孙静, 电话)

マツ ~ガ ~ヲ

しかし、(144a-①)の論理式では(144b)の潜在的な命題内容が表示されていない。この命題内容を明示するために、先に次のメタ言語付きの論理式で示しておこう。

マツ ~ガ ~ヲ ナル ~ガ ~ニ スル

(144-①) 等' (孙静, 电话) & 到' {等' (孙静, 电话), 一上午} & 有' [到' {等' (孙

~ガ [完了]ヲ

静, 电话), 一上午}, 了]

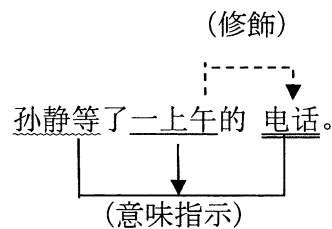
(144)の文を中国語の意味に従って考察すると、まず第一に「孫静が電話を待つ」という命題内容が構成され、それは“等' (孙静, 电话)”という命題で表記される。第二にこの命題が“一天”と組み合わせられて、「孫静が電話を待つことが午前中になる」という命題内容が作られ、それは“到' {等' (孙静, 电话), 一上午}”という命題で表される。ここまでに「電話を待つ」という「動作の持続の時間量」が「午前中」と決定され、時間が終わると肉体的動きがゼロになり、数量化が行われるので時相が決まる。最後に「孫静が電話を待つことが午前中になる」という動作が仮想の参照時間軸上に配置されて[完了]をするので、これは“有' [到' {等' (孙静, 电话), 一上午}, 了]”という複合命題で表記される。これらの命題内容はこの順に同時に成立しなければならないので、それらを連言の論理結合子で結びつけると(144-②)のようになる。この論理式にも格役割(γ1)、量化(γ2)、着点(γ3)の情報を付与しておこう。

(144-②)等’ (孙静, 电话)&到’ {等’ (孙静, 电话), 一上午}&有’ [到’ {等’ (孙

$\gamma 1$	$\gamma 2$	$\gamma 3$
(格役割)	(量化)	(着点)
[動作]	[時相]	[時態]
静, 电话), 一上午}, 了]		

この論理式は「孫静が電話を待つ、かつ、孫静が電話を待つことが午前中になる、かつ、孫静が電話を待つことが午前中になることを[完了]する」と読む。(144-②)の論理式では $\gamma 1$ が $\gamma 2$ の第一項に生起し、 $\gamma 2$ が $\gamma 3$ の第一項に生起する。三つの命題が連鎖しているので命題が生起する順序が維持される。この連鎖により、一つの文の意味を表示できる。

(144-②)の論理式の $\gamma 2$ から、限定語の“一上午”と命題“孙静等电话”の間に直接の意味関係があることがわかる。つまり、“一上午”は“孙静等电话”という命題内容を意味指示する。(144)の文の統語関係と意味関係を図で示すと、次のようになる。



〈図 5-12：“孙静等了一上午的电话”の統語関係と意味関係〉

この図は、限定語になる時間量詞“一上午”は統語上中心語の“电话”と「修飾と被修飾」の関係を構成しているが、意味上は“孙静等电话”という命題内容を意味指示し、直接的な意味関係を構成していて、統語関係と意味関係が対応しないことを示している。

5.4.2.4 文外の成分を意味指示する種類

次に、文外の成分を意味指示する状況を論理式で明示しながら考察を進めていく。まず、(145)の文を見てみよう。

(145)那是一个幸福的雨夜。(あれはある幸福な雨の夜であった。)

(张炜《美妙雨夜》朱华丽 2009：27 引用例)

(145)の文の形容詞“幸福”は、文の統語構造から考察すると、後ろの中心語“雨夜”を修飾し、「定中構造」を構成しているので、“幸福”は“雨夜”の直接修飾成分

となる。

一方、“幸福”は「心が満ち足りて、不平や不満がなく、満足や幸せ」という人間の心理感情を表す形容詞であるので、[+感情、+有生性]の意味特徴を備えている。それに対し、中心語“雨夜”は非人間の対象を表す名詞であるので、[-感情、-有生性]の意味特徴を持っている。さらに、主語“那”は指示代名詞であり、この文において、“雨夜”を指示するので、“雨夜”と同じように[-感情、-有生性]の意味特徴を持っている。意味上から考えれば、“幸福”は人間の感情を表す形容詞であるので、人を表す成分以外のものと結合できない。すなわち、“雨夜”も“那”も“幸福”のような感情を感じることができずに、文脈にある誰かがこの“幸福”を感じることになる。その結果、限定語“幸福”は後ろの中心語“雨夜”とも、前の主語“那”とも直接の意味関係を持たず、文外に隠された「幸福」の感情を持つ人間と直接の意味関係を持つことになる。具体的にどんな人間と直接の意味関係を持つかは、この文の前後の文脈による理解しかない。つまり、“幸福”は(145)の文外にある「幸福の感情」を持つ人間を意味指示することになる。

次に、論理式を用いて、(145)の文の意味構造を分析する。(145)の命題表現は、以下の二つの命題内容を含んでいる。

(145a) 那是一个雨夜。(あれはある雨の夜である。)

(145b) (u) 在雨夜幸福。((誰か)が雨の夜に幸福である。)

この二つの命題内容にある“雨夜”は異なる格役割を果たしている。(145a)では“雨夜”は“是”の[対格]であり、(145b)では“雨夜”は“(u) 幸福”の[位格]である。(145a)は顕在的な命題内容であり、(145b)は潜在的な命題内容である。

(145a)の命題内容に含まれる意味は、“那是雨夜”(あれが雨の夜である)と“雨夜有一个”(雨の夜が一つある)の二つの命題表現に分解される。“那是雨夜”の命題表現を論理式で記述すると、“是’(那, 雨夜)”となる。これは、動詞“是”を関数“是’”とし、“那”と“雨夜”を項とする2項関数である。“雨夜有一个”の命題表現を論理式で記述すると“有’(雨夜, 一个)”と表記できる。これは、「ある」という動詞を関数“有’”とし、“雨夜”と“一个”を項とする2項関数である。この二つの命題を連言「&」で結ぶと“是’(那, 雨夜)&有’(雨夜, 一个)”になる。これは(145a)の論理式である。

(145b)は潜在的な命題内容であり、(145a)の顕在的な命題内容と共起している。つまり、「あれはある雨の夜である」という事態があると同時に、「誰かが雨の夜に幸せになる」という事態も存在している。しかし、“是’(那, 雨夜)&有’(雨夜, 一个)”の式では、(145a)の顕在的な命題内容を示しているのに、“u”と“幸福”の関係が示されていない。この関係を明示的に表示するために、(145a)と(145b)をともに含む文の論理式を“在”関数“在’(α , β , γ)”を使って表記することにする。この関数の項の α と β は個体で、 γ は命題である。 α 項に“u”が入り、 β 項に“雨夜”が入

ると、次のような式になる。

(145-①) 在' (u, 雨夜, γ)

アル \sim ガ \sim ニ \sim トウ状態ニ

γ 項は複合命題であり、含まれる命題をすべて表記すると次の(145-②)になる。

アル	\sim ガ	\sim デ	アル	\sim ガ	ヒツ	イタル	\sim ガ	\sim ニ	コウフク	\sim ガ
(145-②) 是' (那, 雨夜) & 有' (雨夜, 一个) & 到' (一个, u) & 幸福' (u)										
$\gamma 1$			$\gamma 2①$			$\gamma 2②$			$\gamma 3$	
(格役割)			(量化 1)			(量化 2)			(着点)	
[判断]			[時相 1]			[時相 2]			[時態]	

(145-②)はまず命題表現「あれは雨の夜である」の論理式“是' (那, 雨夜)”が生起し、“是' (那, 雨夜)”は“是”が“那”と“雨夜”の格関係を述べているのでこれを $\gamma 1$ と呼ぶことにする。次の命題表現「雨の夜が一つある」を表す論理式“有' (雨夜, 一个)”と命題表現「その一つが誰かに至る」を表す論理式“到' (一个, u)”は、“雨夜”の数量“一个”とそれにかかわる対象“u”を決定するので量化関係を表し、それぞれ $\gamma 2①$ 、 $\gamma 2②$ と呼ぶ。最後に生起している命題“幸福' (u)”は「誰かが幸福である」という意味を表し、参照時間軸上にある結果事態であり、 $\gamma 3$ と呼ぶ。このように γ 項の $\gamma 1$ には[格役割]が、 $\gamma 2$ には[時相]が、 $\gamma 3$ には[着点]が現れる。 γ 項の式を(145-②)の式に代入し、(145)の文全体の意味構造を表すと、論理式は以下のように書ける。

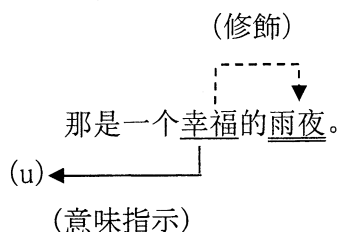
(145-③) 在' {u, 雨夜, 是' (那, 雨夜) & 有' (雨夜, 一个) & 到' (一个, u)}

アル \sim ガ \sim ニ
 α β
 & 幸福' (u)
 \sim トウ状態ニ
 γ

この論理式は「u が雨の夜に、あれが雨の夜である、かつ、雨の夜が一つある、かつ、一つが u に至る、かつ、u が幸福であるという状態にある」と読む。 γ 項は連言で結ばれた複合命題であり、連鎖関係が存在している。(145-③)の論理式中では、先行する命題の第二項とそれに続く命題の第一項「雨夜」と“雨夜”、“一个”と“一个”、“u”と“u”が連鎖しているので、全体として一つの文を表すことができる。

(145-③)の論理式の中で、 $\gamma 2③$ の“幸福' (u)”は「(u) が幸福である」という潜在的な命題内容を示すことから、限定語の“幸福”は文外にある主語の“(u)”を意

味指示することがわかる。そこで、(145)の文の統語関係と意味関係を図で示すと、次のようになる。



〈図 5-13：“那是一个幸福的雨夜”の統語関係と意味関係〉

この図は、限定語“幸福”が統語上“雨夜”を修飾し、直接成分関係を構成しているが、意味上は文外にある主語“(u)”を意味指示し、直接的な意味関係を構成している。統語関係と意味関係が互に対応しないことを示している。

もう一つの例を見られたい。

(146) 店内外充满了快活的空气。(店の内と外はうれしい雰囲気₁に充ちていた。)

(鲁迅《孔乙己》朱华丽 2009：27 引用例)

(146)の文の形容詞“快活”は、統語構造を考察するに当たっては、後ろの中心語“空气”を修飾し、「定中構造」を構成しているので、“快活”は“空气”の限定語となる。

だが、“快活”は「うれしい、楽しい、愉快」など人間の心理感情を表すので、[+感情、+有生性]の意味特徴を有する。それに対し、中心語“空气”は人間ではないので、[-感情、-有生性]の意味特徴を持っている。また、主語“店内外”も非人間の名詞であるので、[-感情、-有生性]の意味特徴を有している。意味上から考えると、“快活”は人間の感情を表すので、人を表す成分以外のものと結合することができない。つまり、主語“店内外”と中心語“空气”の両方とも“快活”を感じることができない。この店の内と外にいる誰かが“快活”という感情を持つことができる。従って、限定語“快活”は文頭の主語“店内外”とも、後ろの中心語“空气”とも直接の意味関係を持たず、文外に隠された“快活”という感情を持つ人間と直接の意味関係を持つことになる。限定語となる“快活”は(146)の文外にある「うれしい」という感情を持つ主語を意味指示する。

次に、論理式を用いて、(146)の文を考察してみよう。(146)の命題表現には、下記の二つの命題内容が含まれている。

(146a) 店内外充满了空气。(店の内と外はある雰囲気₁に充ちている。)

(146b) (u) 在空气里快活。((誰か)が雰囲気₁の中で楽しい。)

この二つの命題内容にある“空气”は異なる格役割を果たしている。(146a)では“空

気”は“充满”の[対格]であり、(146b)では“空气”は“(u)快活”の[位格]である。
(146a)は顕在的な命題内容であり、(146b)は潜在的な命題内容である。

(146a)の文は“店内外有空气”(店の内と外に雰囲気がある)という命題内容と、“空气满”(雰囲気がいっぱいである)という命題内容の二つの命題内容を意味表記に含まねばならない。そこで、“店内外有空气”という命題内容を“充’(店内外, 空气)”と表記する。これは、「ある」という動詞を関数“充’ ”とし、“店内外”と“空气”を項とする2項関数である。次に“空气满”という命題内容を“满’(空气)”と表記できる。これは、「満ちる」という動詞を関数“满’ ”とし、“空气”を項とする1項関数である。(146a)の意味はこの二命題を同時に含むので、連言“充’(店内外, 空气)&满’(空气)”を構成する。

(146b)は潜在的な命題内容であり、(146a)の顕在的な命題内容と共に起している。つまり、「店の内と外はある雰囲気に充ちている」という事態があると同時に、「(誰か)がこの雰囲気の中で楽しい」という事態も存在している。しかし、“充’(店内外, 空气)&满’(空气)”の式では、(146a)の顕在的な命題内容を示しているのに、(146b)の中の“u”と“快活”の間の関係が示されていない。この関係を明示的に表示するためには、(146a)と(146b)をすべて含む文の式を“在”関数“在’(α, β, γ)”を用いて表記すればよい。この関数の項のαとβは個体で、γは命題である。α項には“u”が入り、β項には“空气”が入ると、次のような式になる。

(146-①) 在’ (u, 空气, γ)
アル ~ガ’ ~ニ ~トウ状態ニ

γ項は複合命題であり、含まれる命題をすべて表記すると次の(146-②)になる。

アル	~ニ	~ガ’	ミル	~ガ’	イタル	~ガ’	~ニ
(146-②) 充’ (店内外, 空气)&满’ (空气)&到’ {满’ (空气), 快活’ (u)}							
						ウレシイ	~ガ’
	γ 1		γ 2①			γ 2②	
	(格役割)		(量化 1)			(量化 2)	
	[動作]		[時相 1]			[時相 2]	
スル	~ガ’	[完了]ヲ					
&有’ {快活’ (u), 了}							
	γ 3						
	(着点)						
	[時態]						

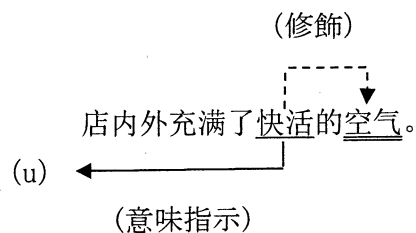
この式の γ の項を詳しく解釈すると、まず“充’(店内外, 空气)”は“充”が“店

内外”と“空气”の格役割を述べているのでこれを $\gamma 1$ と呼ぶことにする。次の“満’（空气）&到’ {満’（空气），快活’（u）}”は、“空气”の数量“満”とそれにかかわる対象“u”とその心理感情“快活”を決定するので量化関係を表し、それぞれ $\gamma 2①$ 、 $\gamma 2②$ と呼ぶ。最後に格役割、量化関係が決定された出来事を仮想の参照時間軸上に配置して、文全体の意味が決まる。これを表すのが“有’ {快活’（u），了’}”であるが、これを $\gamma 3$ として[着点]と名付ける。このように γ 項の $\gamma 1$ には[格役割]が、 $\gamma 2$ には[時相]が、 $\gamma 3$ には[時態]が現れる。 γ 項の式を(146-①)の式に代入し、(146)の文全体の意味構造を表すと、次の(146-③)ができる。

$$\begin{array}{c}
 (146-③) \text{ 在' } [u, \text{ 空气, 充' (店内外, 空气) \& 満' (空气) \& 到' \{満' (空气), \\
 \quad \quad \quad \text{アル} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \\
 \quad \quad \quad \alpha \quad \beta \\
 \quad \quad \quad \text{快活' (u) \} \& \text{有' \{快活' (u), 了'\}} \\
 \quad \quad \quad \sim \text{トワ状態} = \\
 \quad \quad \quad \gamma
 \end{array}$$

この論理式は「u が雰囲気において、店の内と外に「雰囲気」があり、かつ、「雰囲気」が満ち、かつ、「雰囲気」が満ちることが u がうれしいことに至り、かつ、u がうれしいことが[完了]をするという状態にある」と読む。 γ 項は連言で結ばれた複合命題であり、連鎖関係が存在している。(146-③)の論理式中では、「空气」と“空气”、「満’（空气）”と“満’（空气）”、「快活’（u）”と“快活’（u）”の間に連鎖関係があるので、全体として一つのできごとを表す。

(146-③)の論理式の中で、 $\gamma 2②$ の“快活’（u）”は「(u)がうれしい」という潜在的な命題内容を示すことから、限定語の“快活”は文外にある主語の“(u)”を意味指示することがわかる。すると、(146)の文の統語関係と意味関係は次のようになる。



〈図 5-14：“店内外充满了快活的空气”の統語関係と意味関係〉

この図は、限定語“快活”は統語上“空气”を修飾し、直接成分関係を構成しているが、意味上は文外にある主語“(u)”を意味指示し、直接的な意味関係を構成している。統語関係と意味関係が互いに対応しないことを示している。

5.4.2.5 まとめ

本節では、「主語を意味指示する種類」「目的語を意味指示する種類」「命題を意味指示する限定語」「文外の成分を意味指示する種類」の四種類に分けて考察した。この四種類の限定語は統語面において、後ろの中心語を修飾し、「定中構造」を構成するが、意味上は、限定語と中心語の間に直接の意味関係は存在しなくて、他の文成分を意味指示する。本章はこの種類の限定語の意味指示を「間接的な意味指示」と呼ぶことにする。

5.5 本章の結び

従来の現代中国語の限定語の意味指示に関する研究は、限定語の意味指示の原則と方法を提出したが、ほとんどの研究は個人の語感により意味指示の対象を判定するので、語感の個人差によって異なる結論を出すことがある。また、語感が不確定なものであるため、検証することが難しい。したがって、本論文は形式意味論の方法を導入し、論理式を用いて限定語と他の文成分の間の意味関係を明示することによって、意味指示の対象を科学的かつ論理的に判定した。

本章では、現代中国語の限定語の意味指示について統語的、意味的分析を試みた。限定語の意味指示に関する様々な文の意味構造を考察した結果、中国語の限定語の意味指示は、直接的な意味指示と間接的な意味指示の二種に分けられるという結論を得た。

限定語の直接的な意味指示については、統語上、限定語が中心語を修飾し、直接成分関係となる。また、意味上、論理式によって、限定語と中心語は“ X (α)”のような一つの命題を構成することができる(限定語が関数“ X ”となり、中心語がその関数の項“ α ”になる)ので、限定語は中心語を意味指示し、直接的な意味関係を持つことが証明された。

一方、限定語の間接的な意味指示については、論理式によって、いずれの種類も、限定語は直接に中心語と一つの命題を構成せず、文のほかの成分と命題を構成し、連鎖関係により中心語と間接的に関わるということがわかった。

第6章 現代日本語の限定語の論理構造の解明

6.0 はじめに

現代日本語の修飾語には、連体修飾語と連用修飾語がある。体言を修飾する成分が連体修飾語である。連体修飾語には、「白い花」「大きな家」のような語が修飾するものと、「梅の花」「飛び回っている蝶」のような文節や連文節が修飾するものがある。

前者は「連体修飾語」と呼ばれ、後者は「連体修飾節」や「連体修飾句」や「関係節」などと呼ばれる。両者を合わせて、「連体修飾成分」と呼ぶこともある。また、修飾される成分を「底の名詞」や「主名詞」や「被修飾名詞句」などと呼ぶことがある。さらに、修飾する成分と修飾される成分とで、「連体修飾構造」を構成する。

一方、現代中国語では、限定語は名詞性定中フレーズにある修飾語であり、主として主語や目的語などの文成分の前に位置し、修飾する働きを持つ文の成分である。限定語になれる語句は様々で、名詞、代詞、数量詞、形容詞、動詞、フレーズなどがある。

現代日本語の連体修飾語は、現代中国語の限定語と完全に対応するわけではないが、文中で果たす文法上の役割はほぼ同じであると考えられる。本章で、従来の研究に基づき、前の各章で現代中国語の限定語を考察した際に用いた本論文の分析方法を現代日本語の限定語の研究に応用し、現代日本語の限定語の意味と論理構造を考察してみたい。

6.1 現代日本語の限定語に関する先行研究

6.1.1 奥津敬一郎(1974)による研究

奥津敬一郎(1974)は現代日本語の連体修飾を「同一名詞連体修飾」と「付加名詞連体修飾」の二種類に分けている。

「同一名詞連体修飾」を論じるために、奥津敬一郎(1974)はまず「名詞同一の条件」を提示している。即ち、「連体修飾構造の場合には、被修飾名詞と連体修飾文中の名詞とが同一でなければならない」。例えば、

(147) 昨日銀座でうなぎを食べた僕

(奥津敬一郎 1974 : 97)

この連体修飾構造は、「[僕が昨日銀座でうなぎを食べた][僕]」のように、連体修飾文の中に被修飾名詞と同一の「僕」が含まれている。「名詞同一の条件」は「連体修飾文と被修飾名詞との関係を説明し、正しい連体修飾構造を作るための必要な条件である」。この条件による連体修飾を「同一名詞連体修飾」と呼んでいる。

また、「付加名詞連体修飾」について、奥津敬一郎(1974)は次の例を挙げながら説明している。

(148) 茶の湯の修行の厳しいことを始めて知った。

(奥津敬一郎 1974 : 180)

奥津敬一郎(1974)によると、この例の「こと」は、連体修飾文中のある名詞を文末に置いたものではなく、先行する叙述文全体を一つの事柄として捉え、それを「こと」によってまとめて名詞化したものである。つまり、叙述文という本来名詞的性格を持たないものを名詞化するために、外からはめ込まれた枠のようなものである。

このような被修飾名詞は連体修飾文中には現れず、いわばその外から新たに付加されるので、「付加連体名詞(または簡単に付加名詞)」と呼び、この種の連体修飾構造を「付加名詞連体修飾(または簡単に付加連体修飾)」と呼んでいる。

6.1.2 寺村秀夫(1975-1978)による研究

寺村秀夫(1975-1978)は日本語の連体修飾を考察するとき、連体修飾部と被修飾語との関係を「内の関係」と「外の関係」の二つに分けている。このような「内の関係」と「外の関係」は、それぞれ奥津敬一郎(1974)の「同一名詞連体修飾」と「付加名詞連体修飾」に相当している。

(149) a. サンマを焼く男

b. サンマを焼く匂い

(寺村秀夫 1975-1978 : 167) ^(注 20)

これらの構文はいずれも連体修飾構造である。寺村秀夫(1975-1978)は、一重線部を「修飾部」、二重線部を「底の名詞」と呼ぶ。(149a)は「内の関係」の例であり、(149b)とは「外の関係」の例である。

(149a)は「男がサンマを焼く」のように、底の名詞である「男」を修飾部の内側に移し、「焼く」の主格補語となることが可能である。このように、「底の名詞は、修飾部の用言に対して補語と考えることのできるような関係を内在しているものだ、と。このような連体修飾部と底の名詞との関係(寺村秀夫 1993 : 195)」を「内の関係」と呼んでいる。

他方、(149b)ではそのような操作をすることができない。このように、「修飾部と底の名詞は、一つの文の構成要素が修飾関係に転じたということができない、言い換えると、底の名詞は修飾部のどこかから取り出されて被修飾語の位置に坐ったものとは言えない」のような連体修飾の関係を「外の関係」と呼んでいる。

寺村秀夫(1975-1978)は「内の関係」と「外の関係」について、次のようにまとめている。

(150) これを、一般的には次のように言うことができるだろう。「外の関係」においては、修飾部は底の名詞の内容を表す、または少なくともその内容に関わるものであるのに対し、「内

の関係」では、修飾部は、底の名詞を「特定」するには違いないけれども、その内容には関わらない、と。つまり、構文的に「内の関係」で結びついている連体修飾構造にあっては、意味的には、修飾部は底の名詞を「付加的」に修飾しているに過ぎないが、「外の関係」にあっては、それは底の名詞を「内容補充的」に修飾している、ということになる。

(寺村秀夫 1975-1978 : 197)

6.1.3 高橋太郎(1979)による研究

高橋太郎(1979)は、現代日本語の連体修飾に関して、動詞句と名詞の「かかわり」を取り上げて考察している。この「かかわり」というのは意味的な関係を中心としており、次の五つの種類に分けられる。

I. 関係づけのかかわり

関係づけのかかわりというのは、「名詞が指し示すものごとを、それが、参加者、状況など、一定の役割でかかわっている動作や状態と関係づけるかかわり」である。

(151)で、ふたりは海外からくる返事をまった。

(高橋太郎 1979 : 348) (注 21)

II. 属性づけのかかわり

属性づけのかかわりというのは、「名詞のさししめすものごとに属性の面からにくづけをほどこすかかわりである。そのものごとがどんな属性を持っているかを示すのである」。例えば、

(152)真知子には、結婚する婦人たちはみんな恐るべき冒険者に見えたとともに

(高橋太郎 1979 : 346)

III. 内容づけのかかわり

内容づけのかかわりというのは、「名詞が言語活動や心理活動、表現作品などを表していて、動詞句によって、それに内容を与えるかかわり」である。「動詞句が現実反映の内容的な側面を表し、名詞が形式的な側面を表す」。例えば、

(153) 一緒に東京へでる相談などが、二人の間にもちあがったが

(高橋太郎 1979 : 372)

IV. 特殊化のかかわり

特殊化のかかわりというのは、「名詞が上位概念をしめしていて、動詞句が下位概念によって、それを特殊化するかかわり」である。例としては次のようなものがある。

(154) かしながら、私はこうしたほめた言い方をさしひかえたい。

V. 具体化のかかわり

具体化のかかわりとは、「抽象名詞であらわされた属性が、なにを抽象したものであるかをしめすかかわり」であるという。例えば、

(155) ポリニャークがさかずきをあげる速力はめだってはやくなった。

(高橋太郎 1979 : 347)

6.1.4 大島資生(2003)による研究

大島資生(2003)は名詞を修飾する節を「(連体)修飾節」、修飾される名詞を「主名詞」と呼んでいる。寺村秀夫(1975-1978)と同様に、現代日本語の連体修飾を、修飾節に主名詞を入れることができる「内の関係」の連体修飾と、修飾節に主名詞を入れることができない「外の関係」の連体修飾との二つの種類に分けている。

次に、連体修飾節の意味的機能に「属性限定」と「集合限定」の二つのタイプがあると述べている。用例は以下のようなものがある。

(156) a. この本を読んだ学生がみな深い感銘を受けた。

b. この本を読んだ学生が多い。

(大島資生 2003 : 91)

大島資生(2003)によれば、(156a)は「学生がこの本を読んだ。その学生がみな深い感銘を受けた」のような二つの文に言い換えられる。主名詞「学生」は「身長が高い/低い」「貯金がある/ない」など様々な属性を持ちうる。そして「この本を読んだ」はその属性のうちの一つを取り出している。このように、「主名詞の持つ複数の属性の中から一つの属性を取り出す働き」を「属性限定」と呼ぶ。

一方、(156b)は「この本を読んだ、そういう条件に合う学生が多い」のような意を表している。ここで、「学生」が持ちうる属性のうち「この本を読んだ」というものを取り出し、その属性によって「学生」の集合の中から一部分を切り出している。このように、「主名詞の表す集合の中から一部を切り出す働き」を「集合限定」と呼ぶ。

「集合限定」は「属性限定」を基にしている。この二種の限定はいずれも複数の事物の中からものを取り出すという点で共通している。

また、大島(2003)は連体修飾節の統語的制限について論じている。「連体修飾節を形成できるか否かについては、述語の文末形式による制限がある」。「テンスの分化を持つ要素は連体修飾節を作ることが可能である。他方、意志形(～う/よう)、命令形(～しろ)などテンスの分化を持たない要素は連体修飾節を作ることができない」。また、「ね」「よ」などの終助詞が連体修飾節に入ることができない。「あれ」「おや」などの感動詞も入ることができない。

6.1.5 西山佑司(2003a)による研究

西山佑司(2003a)は、現代日本語の連体修飾構造において、「NP₁のNP₂」のような修飾表現自体が名詞句である形式に焦点を当てて考察した。「NP₁のNP₂」という表現は、NP₁とNP₂の意味関係によって、次の五つのタイプに分けられる。

- (157) a. タイプ[A] : NP₁がNP₂に対する付加詞(adjunct)であり、<NP₁とある種の間関係を持つNP₂>という意味をもつケース
- b. タイプ[B] : NP₁が主要語NP₂を修飾する関係節構造をもち、<NP₁で叙述されるNP₂>という意味をもつケース
- c. タイプ[C] : NP₁がNP₂に対する付加詞であり、NP₁が時間の領域を指定し、その領域の中で、NP₂の指示対象の断片を固定するケース
- d. タイプ[D] : NP₂が非飽和名詞句であってパラメータを含み、そのパラメータの値をNP₁が設定するケース
- e. タイプ[E] : NP₂が行為名詞句であって項構造をもち、NP₁がその項を埋めているケース

(西山佑司 2003a : 111)

それぞれのタイプについて、具体例をとともに説明している。

(158) 洋子の首飾り

(西山佑司 2003a : 112)

(158)はタイプ[A]の例である。このタイプの表現において、NP₂に対するNP₁による限定の仕方は所有に限られるわけではない。(158)は、「洋子が所有している首飾り」という解釈のほか、文脈により、「洋子が身につけている首飾り」「洋子の製作した首飾り」などの解釈も可能である。つまり、(158)の言語的意味は、「洋子とある種の間関係をもつ首飾り」以上のものではなく、その関係の具体的な中身は文脈の中で語用論的に補充される。

(159) 看護婦の洋子

(西山佑司 2003a : 113)

(159)はタイプ[B]の例であり、「看護婦である洋子」という意味を表す。NP₁とNP₂の間に、「NP₁が叙述的な意味を表示し、NP₂がその叙述が当てはまる対象である」という意味的緊張関係がある」のである。「看護婦の」は、形式は「名詞句+の」であるが、構造的には「Xは看護婦である」のようなギャップがあり、NP₂の「洋子」がそのギャップを埋めるという関係が成立している。

(160) 着物を着た時の母

(西山佑司 2003a : 116)

(160)はタイプ[C]の例であり、「母」の生涯の中で「着物を着た時」という時間で切り取った断片を表している。このタイプの NP₁ は、時間領域を表すものに限られるのが普通であるが、空間領域を表す場合もある。

(161)この芝居の主役

(西山佑司 2003a : 116)

(161)はタイプ[D]の例であり、NP₂ の「主役」は「非飽和名詞^(注 22)」である。西山佑司(2003a)は、ある人について、その人が主役であるかどうかは、どの芝居(や映画)を問題にしているかを定めない限り、なんとも言えない。修飾語 NP₁ の「この芝居」は、NP₂ の「主役」のパラメータの値を表していると指摘している。

(162)物理学の研究(←物理学を研究する)

(西山佑司 2003a : 117)

(162)はタイプ[E]の例であり、「物理学」を「研究」の内的項とみなし、全体は「物理学を研究すること」の意味である。このタイプの名詞句の主要語 NP₂ は漢語サ変動詞系名詞である。西山佑司(2003a)はこの種の名詞を「行為名詞」と呼ぶ。

6.1.6 本論文の捉え方

現代日本語の連体修飾を対象とする研究は数多くあり、連体修飾を論じる時に使っている用語は様々である。ここでは、本章で用いる主要な用語について確認しておく。前述の各章に用いられた用語と一致するために、現代中国語文法の用語を参照して、本章では現代日本語の「連体修飾語」や「連体修飾節」や「連体成分」などのような修飾する成分を区別せずに全て「限定語」と呼び、「底の名詞」や「主名詞」などのような修飾される成分を「中心語」と呼ぶことにする。また、「連体修飾構造」を「定中構造」と呼ぶことにする。

6.2 現代日本語における限定語の意味と論理構造

現代日本語の限定語に関する分類方法は研究者によって違っている。その中で、寺村秀夫(1975-1978)は総合的かつ画期的な研究成果と言って過言ではない。本章では寺村秀夫(1975-1978)の研究を踏まえ、現代日本語の限定語を「内の関係の限定語」と「外の関係の限定語」の二種に分けて、それぞれの意味と論理構造について考察してみたい。

6.2.1 内の関係の限定語の意味と論理構造

まず、例を一つ挙げよう。

(163) サンマを焼く男

(寺村秀夫 1975-1978 : 167) ((149a)の再掲)

寺村秀夫(1975-1978)によれば、「内の関係」とは、限定語と中心語との結合が、動詞と名詞との間の格関係の力によって保持される構造であると考えられる。(163)の例は「男がサンマを焼く」のように、中心語を限定語の内側に移動することが可能である。つまり、中心語「男」はそれに格助詞「が」を付けて限定語にある動詞「焼く」と結びつけることができ、限定語と中心語の間に「動作主格」の格関係を持っているがわかる。

そこで、「ものの結合の原理」をベースに、用例の意味を論理式で表記し、その論理式の成立とその表す意味を詳しく説明しながら、その格関係を明示してみよう。

限定語「サンマを焼く」と中心語「男」が意味的に結びつく動機を示すために、深く考えなければいけない。まず、この表現は「あるもの」である「男」が「ある事態」つまり「誰かがサンマを焼く」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならないので、次の(163-①)になる。

(163-①) 焼ク' (u, サンマ)
 ~が ~ヲ

「誰かがサンマを焼く」という事態の可能性が複数あり、一つの限りなく広がっている論理空間を構成する。この「誰かがサンマを焼く」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先に存在している。そこで、「サンマを焼く男」の他に、「サンマを焼く女」、「サンマを焼く子供」等のような無数の可能性が存在する。

(163-①)の論理式は「u がサンマを焼く」と読む。この論理式の中で、「男」を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(163-①)は次の(163-②)になる。

(163-②) ^焼ク' (u, サンマ)

そして、「あるもの」である「男」を「誰かがサンマを焼く」というあらゆる事態の可能性から構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が、「男」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(163-③) アル' { ^焼ク' (u, サンマ), 男 }
 ~が ~ニ

「あるもの」である「男」を「誰かがサンマを焼く」というあらゆる事態の可能性から構成される論理空間に入れる瞬間に、限定語「サンマを焼く」が中心語「男」と

結びつき、「サンマを焼く男」になり、事態の可能性が確定される。(163-③)の論理式では「 \wedge 焼ク' (u, サンマ)」という内包が「男」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。「 \vee 」は外延演算子で、外延化を示す。

$$(163-④) \text{アル'} \{ \vee \wedge \text{焼ク'} (u, \text{サンマ}), \text{男} \} \& \text{=} (\text{男}, u_n)$$

\sim が \sim ニ ヒトシ \sim が \sim ニ

これが(163)の論理式になる。 u_n の添え字のnは u_n が定項であることを示す。この論理式は「焼ク' (u, サンマ)」が「uがサンマを焼く」という意味を表し、論理式全体が「uがサンマを焼くという内包が「男」という個体にあり外延化する、かつ、「男」が u_n に等しい」という意味を表している。

この論理式により、「焼ク' (u, サンマ)」は「u」と「焼く」の格役割を記述し、そして、連鎖関係によって、中心語「男」が限定語の動詞「焼く」と結びついて「動作主格」を表し、命題を作ることが明示された。

「内の関係の限定語」について、もう一つの例を見られたい。

(164) 君がその時聞いた足音

(寺村秀夫 1975-1978 : 167)

議論を集中するために、「その時」を省略し、「君が聞いた足音」を対象として考察することにする。(164)の例は「君が足音を聞いた」のように、中心語を限定語の内側に移すことができる。つまり、中心語「足音」はそれに格助詞「を」を付けて限定語にある動詞「聞く」と結びつけることができ、限定語と中心語の間に「対象格」の格関係を見出せる。

次に、論理式を用いて、その格関係を緊密に表記してみよう。まず、「あるもの」である「足音」が「ある事態」つまり「君が何かを聞いた」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならないので、次の(164-①)になる。

$$(164-①) \text{聞く'} (\text{君}, u) \& \text{スル'} \{ \text{聞く'} (\text{君}, u), \text{た} \}$$

\sim が \sim ヲ \sim が [完了]ヲ

「君が何かを聞いた」という事態の可能性が無数にあり、一つの論理空間を構成している。「君が何かを聞いた」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。つまり、「あるもの」が「ある事態」の中に現れる可能性は論理空間の中では全て予定されている。したがって、「君が聞いた足音」のほかに、「君が聞いた笛の声」、「君が聞いた泣き声」等々の複数の可能性が

(164-①)の論理式は「聞く' (君, u)」が「君が u を聞く」の意を表し、「スル' {聞く' (君, u), た}」が「君が u を聞くことが[完了]をする」の意を表している。この論理式の中で、「足音」は変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(164-①)は次の(164-②)になる。

次に、「あるもの」である「足音」を事態の可能性の総体である論理空間に入れる。つまり、この内包が、「足音」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

「あるもの」である「足音」を事態の可能性の総体である論理空間に入れる瞬間、限定語「君が聞いた」が中心語「足音」と結合し、「君が聞いた足音」になり、他の事態の可能性が排除される。言い換えれば、「君が何かを聞いた」という事態の可能性が先に存在することなしに、限定語「君が聞いた」と中心語「足音」が結合できない。

&=' (足音, u_n)
ヒトシ ～が ～ニ

念のために、もう一つの例を挙げて分析しておきたい。

(大島資生 2003 : 95)

(165)は「噴水が広場にある」のように、限定語に中心語「広場」を入れることができ、意味的に中心語が限定語の「内」にあるのである。中心語「広場」は格助詞「に」を付けて限定語にある動詞「ある」と結びつけることができ、限定語と中心語の間に「場所格」の格関係を見出せる。

次に、論理式を用いて表記しながら、その格関係を明示していこう。まず、「あるもの」である「広場」が「ある事態」つまり「噴水がどこかにある」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならないので、次の(165-①)になる。

(165-①) アル' (噴水, u)
 ~が ~ニ

「噴水がどこかにある」というある事態の可能性が複数あり、一つの論理空間を構成している。したがって、たとえばこの「噴水がどこかにある」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では存在していることになる。すなわち、「噴水がある広場」以外に、「噴水がある公園」、「噴水がある遊園地」等の無数の可能性がある。

(165-①)の論理式は「噴水が u にある」と読む。この論理式の中で、「広場」が変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(165-①)は次の(165-②)になる。

(165-②) ^アル' (噴水, u)

そして、「あるもの」である広場を「噴水がどこかにある」という事態の可能性で構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が、「広場」という個体に存在しているので次の(165-③)が書ける。

(165-③) アル' { ^アル' (噴水, u), 広場 }
 ~が ~ニ

「あるもの」である広場を「噴水がどこかにある」という事態の可能性で構成する論理空間に入れる瞬間に、限定語「噴水がある」が中心語「広場」と結びつき、「噴水がある広場」になり、事態の可能性が唯一に確定される。ここでは「^アル' (噴水, u)」という内包が「広場」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(165-④) アル' { \vee^{\wedge} アル' (噴水, u), 広場} &= ' (広場, u_n)
 ~が ~ニ ヒトシイ ~が ~ニ

これが(165)の論理式になる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式全体は「噴水が u にあるという内包が「広場」という個体にあり外延化する、かつ、「広場」が u_n に等しい」と読める。

この論理式の中の「アル' (噴水, u)」という命題は「 u 」の格役割を明示している。そして、連鎖関係によって、中心語「広場」が限定語の動詞「ある」と結びついて「場所格」を表していることが明示された。

以上のように、(163)から(165)の例はすべて、「内の関係の限定語」の例であり、中心語の名詞が「を」「が」「に」「で」などの格助詞を付けて、限定語の内に入れて一定の格関係を構成できることがわかる。

6.2.2 外の関係の限定語の意味と論理構造

次に、「外の関係の限定語」について論じることにはしたい。まず次のような例がある。

(166) サンマを焼く匂い

(寺村秀夫 1975-1978 : 167) ((149b) の再掲)

寺村秀夫(1975-1978)によると、(166)の例は中心語「匂い」にどのような格助詞をつけても限定語のどこにも納めることができない。即ち、この定中構造にあっては、限定語と中心語は、一つの文の構成要素が修飾関係に転じたとは言えない。言い換えれば、中心語は限定語のどこかから取り出されて中心語の位置に坐ったものであるとは言えなく、どこか外から、限定語の外から来たものだとしか言えない。このような限定語を「外の関係の限定語」と呼んでいる。

(166)の文は、「(ある)匂いがする」と「サンマを焼く」という二つの叙述内容を含んでいるが、この二つの叙述内容を結びつける共通の名詞、つまり結び目がない。「サンマを焼く」と「匂い」を結びつけることができるのは、「外の関係」においてである。限定語は中心語の内容を表す、または少なくともその内容に関わるものであるからである。そうすると、(166)の例は「その匂いは、サンマを焼くものである」のように転換できる。

次に、「ものの結合の原理」をベースに、(166)の例の意味を論理式で表記し、例の表す意味を詳しく説明してみよう。

まず、この表現は「あるもの」である「匂い」が「ある事態」つまり「サンマを焼くということが何かの内容である」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない。「匂い」が生起しうる「事態の可能性」は次の(166-①)になる。

(166-①) 有スル' (u, [内容]) & アル' {[内容], 焼ク' (φ, サンマ)}

「サンマを焼くということが何かの内容である」という事態の可能性が無数にあり、一つの論理空間に満ちている。したがって、この「サンマを焼くということが何かの内容である」という事態が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。

(166-①)の論理式は「有スル' (u, [内容])」が「u が [内容]を有する」という意味を表し、「アル' {[内容], 焼ク' (ϕ , サンマ)}」が「その[内容]が ϕ がサンマを焼くというものである」の意味を表している。

ここでの[内容]は論理形式を表す。「論理形式」とは『論理哲学論考』(ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳)における定義に基づくものである。論理形式は「ある対象の論理形式とはその対象がどのような事態のうちに現れるか、その論理的可能性の形式のことである」と説明されている(ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳 2003: 184)。

この論理式の中で、「匂い」を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(166-①)は次の(163-②)になる。

(166-②) ^ [有スル' (u, [内容]) & アル' {[内容], 焼ク' (φ, サンマ)}]

そして、「あるもの」である「匂い」を「サンマを焼くということが何かの内容である」という事態の可能性の総体により構成される論理空間に入れる。つまり、この内包が、「匂い」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(166-③) アル' 【 ^ [有スル' (u, [内容])&アル' {[内容], 焼ク' (ϕ , サンマ)}},
~ガ'

【匂い】

21

「あるもの」である「匂い」を「サンマを焼くということが何かの内容である」という事態の可能性の総体により構成される論理空間に入れると、限定語「サンマを焼く」が中心語「匂い」と結びつき、「サンマを焼く匂い」となり、事態の可能性が唯一確定される。

ここでは「 \wedge [有スル' (u, [内容])&アル' {[内容], 焼ク' (ϕ , サンマ)}]」という内包が「匂い」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の

要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

$$(166-④) \text{アル'} \left[\begin{array}{c} \vee^{\sim\text{ガ}} \\ \text{有スル'} (u, [\text{内容}]) \& \text{アル'} \{[\text{内容}], \text{焼ク'} (\phi, \text{サンマ}) \} \end{array} \right],$$

$$\text{匂い} \& = ' (\text{匂い}, u_n)$$

$$\sim\text{ニ} \quad \text{ヒソイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ}$$

これが(166)の論理式になる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「 u が 論理形式[内容]を有する、かつ、その論理形式[内容]が ϕ がサンマを焼くというものである」という内包が「匂い」という個体にあり外延化する、かつ、「匂い」が u_n に等しい」と読める。

この論理式によって、中心語「匂い」は限定語「サンマを焼く」の内側に入れることができず、限定語「サンマを焼く」が中心語「匂い」の論理形式[内容]を表すことが明示された。

また、似た例を二つ追加しておきたい。

(167) 清少納言と紫式部が会った事実

(168) 宮女たちが布を洗っていた姿

(寺村秀夫 1975-1978 : 199)

(167)と(168)も「外の関係の限定語」に属し、さきの例と同様に解釈することが可能である。まず、(164)の例の論理式を記述してみよう。

(167)では、中心語「事実」は格助詞を付けて、限定語「清少納言と紫式部が会った」の内側に移すことができない。限定語の動詞が中心語と格関係を持たず、限定語が中心語の内容を表している。(167)の例は「その事実は、清少納言と紫式部が会ったということである」のように転換できるのである。

次に、形式意味論の演繹的な手法を用いて、(167)の例の意味を論理式で表記しておこう。論述の中心は定中構造であるために、煩雑になるのを避けて、テンスやアスペクトなどは説明しないことにする。

まず、「あるもの」である「事実」が「ある事態」つまり「清少納言と紫式部が会ったという内容」であるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない。「事実」が生起しうる「事態の可能性」は次の(167-①)になる。

$$(167-①) \text{有スル'} (u, [\text{内容}]) \& \text{アル'} \left\{ \begin{array}{c} \sim\text{ト} \quad \sim\text{ガ} \\ [\text{内容}], \text{会ウ'} (\text{清少納言}, \text{紫式部}) \end{array} \right\}$$

$$\sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{トイフコトデ}$$

(167)の用例では、事態の可能性は「清少納言と紫式部が会ったということが何かの内容である」である。この事態の可能性が数え切れないほど存在し、一つの論理空間を構成している。つまり、「清少納言と紫式部が会ったということが何かの内容である」が他の様々な物と結合する可能性も論理空間の中では先取りされていることになる。

(167-①)の論理式は「有スル' (u, [内容])」が「u が 論理形式[内容]を有する」という意味を表し、「アル' {[内容], 会ウ' (清少納言, 紫式部)}」が「その論理形式[内容]が清少納言と紫式部が会うというものである」の意味を表している。

この論理式の中で、「事実」は変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 {w₁, w₂, ..., w_n} である可能世界のどれにも存在する。つまり、内包であるので(167-①)は次の(167-②)になる。

(167-②)[^] [有スル' (u, [内容]) & アル' {[内容], 会ウ' (清少納言, 紫式部)}]

そして、「あるもの」である「事実」を「清少納言と紫式部が会ったということが何かの内容である」というすべての事態の可能性から構成する論理空間に入れる。つまり、この内包が、「事実」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(167-③) アル' [[^] [有スル' (u, [内容]) & アル' {[内容], 会ウ' (清少納言, 紫式部)}], 事実]
_{~ニ}

「あるもの」である「事実」を「清少納言と紫式部が会ったということが何かの内容である」というすべての事態の可能性から構成する論理空間に入れると、限定語「清少納言と紫式部が会った」が中心語「事実」と結びつき、「清少納言と紫式部が会った事実」となり、事態の可能性が確定される。

ここでは「[^] [有スル' (u, [内容]) & アル' {[内容], 会ウ' (清少納言, 紫式部)}]」という内包が「事実」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(167-④) アル' [[^] [^] [有スル' (u, [内容]) & アル' {[内容], 会ウ' (清少納言, 紫式部)}], 事実] & = ' (事実, u_n)
_{~ニ ヒソイ ~ガ' ~ニ}

これが(167)の論理式になる。u_nの添え字の n は u_nが定項であることを示す。この論理式は「u が 論理形式[内容]を有する、かつ、その論理形式[内容]が清少納言と紫

式部が会うということであるという内包が「事実」という個体にあり外延化する、かつ、「事実」が u_n に等しい」と読める。

この論理式によって、中心語「事実」は限定語「清少納言と紫式部が会った」の内側に入れることができず、限定語「清少納言と紫式部が会った」が中心語「事実」の具体的な[内容]を表すことが分かった。

(168)の例もこれまでと同様に次のように論理式で表記することができる。

$$\begin{array}{c}
 \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ガ} \\
 (168\text{-}\textcircled{1}) \text{アル'} \left[\vee^{\wedge} [\text{有スル'} (u, [\text{内容}]) \& \text{アル'} \{[\text{内容}], \text{洗ウ'} (\text{宮女たち}, \right. \\
 \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \sim\text{ガ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{トイウコトデ} \\
 \\
 \sim\text{ヲ} \\
 \left. \text{布})\} \}, \text{姿}] \& = ' (\text{姿}, u_n) \right. \\
 \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ}
 \end{array}$$

これが(168)の論理式になる。この論理式は「 u が 論理形式[内容]を有する、かつ、その論理形式[内容]が宮女たちが布を洗うということであるという内包が「姿」という個体にあり外延化する、かつ、「姿」が u_n に等しい」という意味を表している。

この論理式から、中心語「姿」は限定語「宮女たちが布を洗っていた」の内に入れられず、限定語「宮女たちが布を洗っていた」が中心語「姿」の具体的な[内容]を表すということがわかる。

6.2.3 まとめ

本節では、現代日本語の限定語を「内の関係の限定語」と「外の関係の限定語」の二種類に大別して論じ、それぞれの論理構造を明示した。

「内の関係の限定語」の場合、中心語は限定語が含まれる関数の項になり、限定語と一つの命題を構成できるので、中心語が格を有するのに対し、「外の関係の限定語」の場合、中心語が限定語と一つの命題を構成することができないので、中心語が格を持たず、限定語は中心語の内容を表す、ということを論理式によって明示した。

6.3 現代日本語の限定語による多義構造と論理分析 (注 23)

本論文の第4章では、現代中国語の限定語による多義構造について論じた。実際に、現代日本語の中では限定語による多義構造も存在している。野田尚史(2002)はどんな原因で多義性を生じるのかという視点から、現代日本語の多義構造を、語彙論的な多義構造、文法論的な多義構造、意味論的な多義構造、語用論的な多義構造の4種類に分けている。そして、文法論的な多義構造を構造関係に関わる多義構造、省略に関わる多義構造、指示に関わる多義構造のように下位分類をしている。その中で、限定語と関係ある多義構造は二つのタイプがある。

本節では、野田尚史(2002)の観点を参照し、例を挙げながら、この二つのタイプの意味と論理構造を考察してみよう。

6.3.1 「限定語+名詞₁+の+名詞₂」を含む多義構造

このタイプは限定語による多義構造の中で一番よく見られるものである。このタイプの多義構造は名詞を修飾する構造で、限定語がどこを修飾するのかでその多義性が決まる。例えば、次の(169)がその例である。

(169) 有名な学校の先生が来た

(草薙裕 1991 : 103)

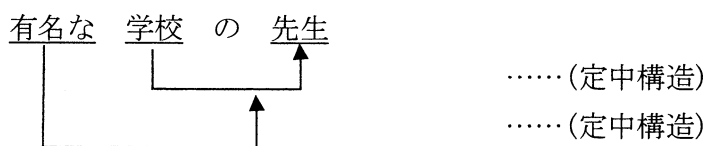
この文では、「有名な」という形容動詞が「学校」や「先生」という表現を修飾するという機能を持っている。また、「学校」という名詞が「の」の機能によって別の名詞(ここでは「先生」である)と結びつくことで「学校の先生」という名詞句を作り出すことができる。従って、限定語である「有名な」が「学校」を修飾するのか、「先生」を修飾するのかに多義性が生じるのである。つまり、(169)の例の「有名な学校の先生」の部分は多義性を備え、次のような二つの意味を表すことができる。

(169a) 有名な/学校の先生

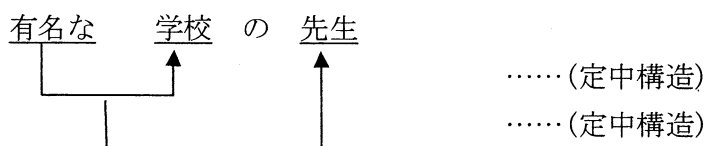
(169b) 有名な学校の/先生

(169a)は「有名な」と「学校の先生」からなり、(169b)は「有名な学校」と「先生」からなる。(169a)と(169b)に含まれた語とその配列順序は完全に同じであるが、異なる構造に対応する。(169a)と(169b)の階層構造を分析すると、次の<図 6-1>のようになる。

(169a)の階層構造：



(169b)の階層構造：

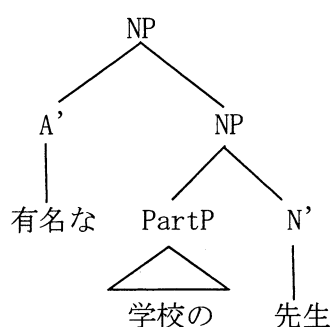


<図 6-1 : 「有名な学校の先生」の階層構造と構造関係>

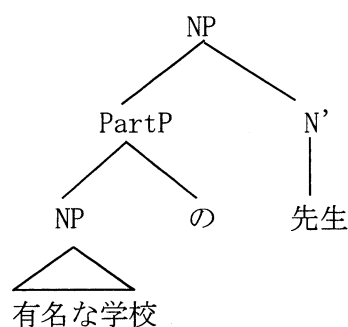
〈図 6-1〉のように、(169a)と(169b)の形式は同様であるが、統語上の階層構造が違い、表す意味も異なる。(169a)では、まず「学校」が限定語になり、「先生」を修飾する。そして、形容動詞「有名な」は「学校の先生」を修飾し、「学校の先生」の[属性]を表している。(169b)では、まず形容動詞「有名な」は「学校」を修飾し、「学校」の[属性]を表す。そして、「有名な学校」全体が限定語になり、名詞「先生」を修飾し、「先生」の[所属]を表している。

次に、樹形図を用いて、両者の階層構造の違いを次の〈図 6-2〉のように示すことにする。

(169a)の階層構造の樹形図：



(169b)の階層構造の樹形図：



〈図 6-2：「有名な学校の先生」の階層構造の樹形図〉

(169a)の樹形図では、まず名詞「学校」は格助詞「の」と助詞フレーズ「学校の」を生成し、「PartP」で表記する。そして、この助詞フレーズ「学校の」は名詞「先生」と名詞フレーズ「学校の先生」を生成する。最後に形容動詞「有名な」と結合し名詞フレーズ「有名な学校の先生」を生成している。

(169b)の樹形図では、まず名詞「学校」は形容動詞「有名な」と結合し名詞フレーズを生成し、「NP」で表記する。次に、この形容詞フレーズ「有名な学校」は格助詞「の」と助詞フレーズ「有名な学校の」を生成する。最後に、その助詞フレーズは名詞「先生」と結合し名詞フレーズ「有名な学校の先生」を生成している。

次に、形式意味論の演繹的手法を用いて、(169a)と(169b)を論理式で表記し、両方の意味の違いを明示していきたい。まず(169a)の論理表記をしておこう。(169a)はまず「学校の先生」という定中構造を構成しているので、最初に「ものの結合の原理」に従い、定中構造「学校の先生」の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{c}
 \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \qquad \qquad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{デ} \\
 (169a\text{-}\textcircled{1}) \text{アル'} [\vee^{\wedge} \{ \text{いる'} (\text{学校}, u) \& \text{働く'} (u, \text{学校}) \}, \text{先生}] \& = ' (\text{先生}, u_n) \\
 \qquad \qquad \qquad \sim \text{ガ} \qquad \qquad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}
 \end{array}$$

この論理式は「学校に u がいる、かつ、u が学校で働くという内包が「先生」という個体にあり外延化する、かつ、「先生」が u_n に等しい」と読む。

ここでは、形容動詞「有名な」は「学校の先生」を修飾し、「学校の先生」の[属性]を表し、定中構造を構成しているために、「ものの結合の原理」に従い、(169a)全体の論理式は次のようになる。

$$(169a-②) \text{アル'} \{ \overset{\sim}{\vee} \overset{\sim}{\wedge} \text{有名'} (u), \text{学校の先生} \} \& = ' (\text{学校の先生}, u_n) \\ \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}$$

この論理式では、「学校の先生」のところに、(169a-①)の論理式を当てはめるわけであるが、煩雑になるのを避けるために、そのまま「学校の先生」と記することにする。

この論理式は「有名' (u)」が「u が有名である」という意を表し、論理式全体は「u が有名であるという内包が「学校の先生」という個体にあり外延化する、かつ、「学校の先生」が u_n に等しい」という意味を表している。この論理式によって、限定語になる「有名な」は「学校の先生」を修飾し、その[属性]を表すことがわかる。

続いて、(169b)の論理式を書いてみよう。まず、「ものの結合の原理」に基づき、定中構造「有名な学校」の論理式は次のように書ける。

$$(169b-①) \text{アル'} \{ \overset{\sim}{\vee} \overset{\sim}{\wedge} \text{有名'} (u), \text{学校} \} \& = ' (\text{学校}, u_n) \\ \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}$$

この論理式は「u が有名であるという内包が「学校」という個体にあり外延化する、かつ、「学校」が u_n に等しい」と読む。形容動詞「有名な」は「学校」を修飾し、「学校」の[属性]を表している。

そして、「有名な学校」は後ろの名詞「先生」を修飾して、また定中構造を構成するので、同様に「ものの結合の原理」に従い、(169b)全体の論理式は次のように書ける。

$$(169b-②) \text{アル'} [\overset{\sim}{\vee} \overset{\sim}{\wedge} \{ \text{いる'} (\text{有名な学校}, u) \& \text{働く'} (u, \text{有名な学校}) \}, \text{先生}] \\ \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{デ} \\ \& = ' (\text{先生}, u_n) \\ \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}$$

この論理式では、「有名な学校」のところに、(169b-①)の論理式を当てはめるわけであるが、煩雑になるのを避けて、そのまま「有名な学校」と記することにする。

この論理式全体は「有名な学校に u がいる、かつ、u が有名な学校で働くという内

包が「先生」という個体にあり外延化する、かつ、「先生」が u_n に等しい」と読める。
 この論理式によって、限定語になる「有名な」のかかり先が「学校」であり、「学校」の[属性]を表すことがわかる。

このタイプについて、もう一つの例を見られたい。

(170) 美しい花子の娘

(施建軍 1997 : 73)

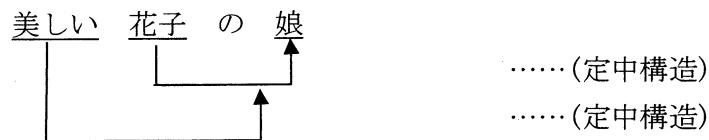
この文は次の二通りに解釈できる。一つは[美しい]が後ろの名詞「娘」にかかって、「娘」を修飾する。つまり、美しいのは娘である。もう一つは形容詞「美しい」が名詞「花子」にかかって、「花子」を修飾する。つまり、美しいのは花子である。

(170a) 美しい/花子の娘

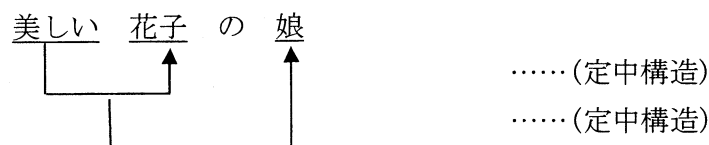
(170b) 美しい花子の/娘

(170a)は「美しい」と「花子の娘」からなり、(170b)は「美しい花子」と「娘」からなる。両方の形は完全に同じであるが、その階層構造は異なる。具体的に次の<図 6-3>のように分析できる。

(170a)の階層構造：



(170b)の階層構造：

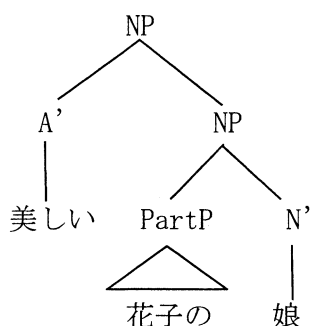


<図 6-3 : 「美しい花子の娘」の階層構造と構造関係>

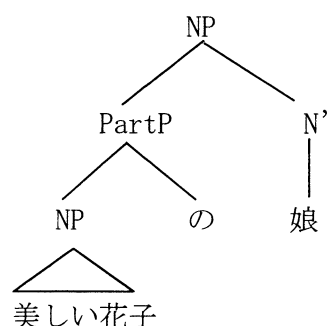
<図 6-3>のように、(170a)と(170b)の形式は同じであるが、統語上の階層構造は異なる。(170a)では、まず「花子」が「娘」を修飾し定中構造を構成する。そして、形容詞「美しい」は「花子の娘」を修飾し、定中構造を構成する。(170b)では、まず形容詞「美しい」は「花子」を修飾し、定中構造が成り立つ。そして、「美しい花子」全体が限定語になり、名詞「娘」を修飾している。

(170a)と(170b)の統語構造の違いを明らかに示すために、樹形図を用いると、次の<図 6-4>のようになる。

(170a)の階層構造の樹形図：



(170b)の階層構造の樹形図：



〈図 6-4：「美しい花子の娘」の階層構造の樹形図〉

(170a)の樹形図では、まず名詞「花子」は格助詞「の」と助詞フレーズ「花子の」を生成する。そして、この助詞フレーズ「花子の」は名詞「娘」と名詞フレーズ「花子の娘」を生成する。最後に形容詞「美しい」と結合し名詞フレーズ「美しい花子の娘」を生成している。

(170b)の樹形図では、まず形容詞「美しい」は名詞「花子」と一緒に名詞フレーズ「美しい花子」を生成する。そして、この名詞フレーズは格助詞「の」と助詞フレーズ「美しい花子の」を生成する。最後に、その助詞フレーズは名詞「娘」と結合し名詞フレーズ「美しい花子の娘」を生成している。

続いて、論理式を用いて、(170a)と(170b)の意味の違いを明示していきたい。まずは(170a)の論理式を書いてみよう。(170a)はまず定中構造「花子の娘」が構成されるので、最初に「ものの結合の原理」に基づいて、定中構造「花子の娘」の論理式は次のように書ける。

$$\begin{array}{c} \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \\ (170a-①) \text{アル'} \{ \text{V}^{\wedge} \text{イル'} (\text{花子}, u), \text{娘} \} \& = ' (\text{娘}, u_n) \\ \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「花子に u がいるという内包が「娘」という個体にあり外延化する、かつ、「娘」が u_n に等しい」と読む。

そして、形容詞「美しい」は「花子の娘」を修飾し、「花子の娘」の[属性]を表し、定中構造を構成しているために、「ものの結合の原理」に従い、(170a)全体の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} (170a-②) \text{アル'} \{ \text{V}^{\wedge} \text{美しい'} (u), \text{花子の娘} \} \& = ' (\text{花子の娘}, u_n) \\ \sim \text{ガ} \quad \quad \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \end{array}$$

この論理式では、「花子の娘」のところに、(170a-①)の論理式を当てはめるわけであるが、煩雑になるのを避けるために、「花子の娘」と表記することにする。

この論理式は「美しい' (u)」が「u が美しい」という意を表し、論理式全体は「u が美しいという内包が「花子の娘」という個体であり外延化する、かつ、「花子の娘」が u_n に等しい」という意味を表している。この論理式によって、限定語になる「美しい」は「花子の娘」を修飾し、その[属性]を表すことがわかる。

次に、(170b)の論理式を書いてみよう。まず、「ものの結合の原理」に基づき、定中構造「美しい花子」の論理式は次のようになる。

$$(170b-①) \text{アル'} \{ \overset{\vee}{\wedge} \text{美しい' (u), 花子} \} \& = ' (花子, u_n) \\ \sim \text{ガ} \quad \quad \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}$$

この論理式は「u が美しいという内包が「花子」という個体であり外延化する、かつ、「花子」が u_n に等しい」と読む。形容詞「美しい」は「花子」につながり、「花子」を修飾している。

そして、「美しい花子」は後ろの名詞「娘」を修飾して、定中構造を構成するので、上記と同じように、「ものの結合の原理」に従い、(170b)全体の論理式は次のように書ける。

$$(170b-②) \text{アル'} \{ \overset{\vee}{\wedge} \text{イル' (美しい花子, u), 娘} \} \& = ' (娘, u_n) \\ \sim \text{ガ} \quad \quad \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒトシイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ}$$

この論理式では、「美しい花子」のところに、(170b-①)の論理式を当てはめるわけであるが、煩雑になるのを避けるために、「美しい花子」と記することにする。

この論理式全体は「美しい花子に u がいるという内包が「娘」という個体であり外延化する、かつ、「娘」が u_n に等しい」と読める。この論理式によって、限定語になる「美しい」のかかり先が「娘」であり、「娘」の[属性]を表すことがわかる。

(169)や(170)のような「限定語＋名詞₁＋の＋名詞₂」という構造の多義構造では、意味的に成り立たない場合以外は、「限定語」の係り先として、「名詞₁」と「名詞₂」の二つの可能性がある。これを、先に結合する成分と成分を括弧に入れて示すと、次のようになる。

- (171) a. 限定語＋(名詞₁＋の＋名詞₂)
 b. (限定語＋名詞₁)＋の＋名詞₂

6.3.2 「名詞₁＋と＋名詞₂＋の＋名詞₃」を含む多義構造

次に、限定語が並列構造と同時に存在する「名詞₁＋と＋名詞₂＋の＋名詞₃」を含む多義構造について考察しておこう。このタイプの多義構造としては、次のような例が挙げられる。

(172) 太郎と次郎の友達が図書館で勉強している。

(施建軍 1997 : 75)

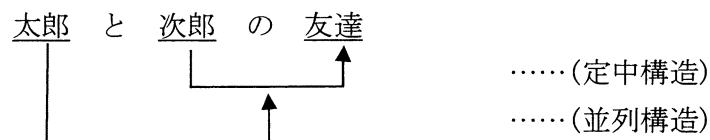
この例では、「太郎」が「次郎」と並列されているのか、「次郎の友達」と並列されているのが曖昧である。つまり、(172)の例には次のような二つの意味が含まれている。

(172a) 太郎と/次郎の友達が図書館で勉強している。

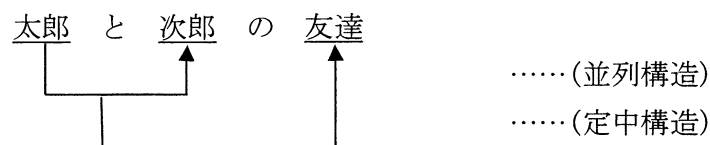
(172b) 太郎と次郎の/友達が図書館で勉強している。

(172a)は、「次郎の友達と太郎が図書館で勉強している」の意味を表し、(172b)は、「太郎の友達と次郎の友達が図書館で勉強している」の意味を表している。この二つの意味を表す文に含まれた語とそれらの語の配列順序は全く同じであるが、階層構造が異なっている。ここでは、多義性がある「太郎と次郎の友達」の部分だけを考察対象として論じることにする。(172a)と(172b)の階層構造と構造関係は次の<図 6-5>のように分析できる。

(172a)の階層構造：



(172b)の階層構造：



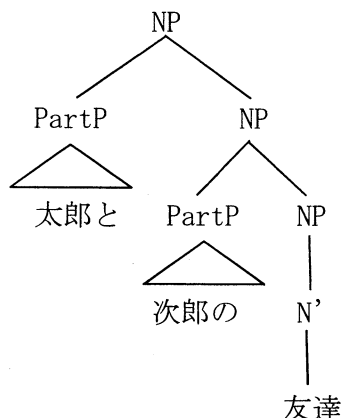
<図 6-5 : 「太郎と次郎の友達」の階層構造と構造関係>

(172a)と(172b)の形式は同じであるが、統語階層構造は違っている。(172a)では、まず「次郎」が限定語であり、「友達」を修飾し、定中構造を構成する。そして、「太郎」は定中構造「次郎の友達」と組み合わせられて並列構造を構成している。つまり、(172a)全体は一つの並列構造の連語である。(172b)では、まず「太郎」は「次郎」と並列構造を構成し、この並列構造「太郎と次郎」が限定語になり、「友達」を修飾

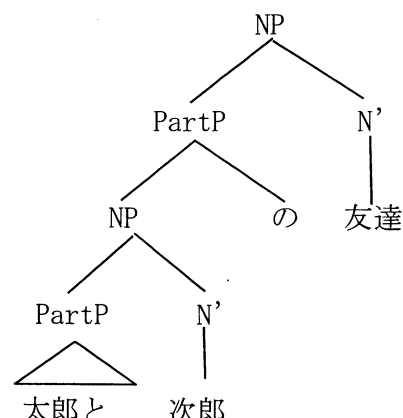
し、定中構造を構成している。つまり、(172b)全体は定中構造の連語である。

(172a)と(172b)の階層構造の違いは樹形図で簡略表示すると、次の<図 6-6>となる。

(172a)の階層構造の樹形図：



(172b)の階層構造の樹形図：



<図 6-6 : 「太郎と次郎の友達」の階層構造の樹形図>

(172a)の樹形図では、まず助詞フレーズ「次郎の」は名詞「友達」と名詞フレーズ「次郎の友達」を生成し、そして、助詞フレーズ「太郎と」と一緒に名詞フレーズ「太郎と次郎の友達」を生成する。

(172b)の樹形図では、まず助詞フレーズ「太郎と」は名詞「次郎」と名詞フレーズ「太郎と次郎」を生成し、そして、格助詞「の」と助詞フレーズ「太郎と次郎の」を生成する。最後に名詞「友達」と結合し、名詞フレーズ「太郎と次郎の友達」を生成している。

次に、命題論理、述語論理と「ものの結合の原理」を併用した論理式による解釈を行い、(172a)と(172b)の意味の違いを厳密に表記することにしよう。まず(172a)の論理式を書いてみよう。

(172a)はまず「次郎の友達」という定中構造を構成し、そして、この定中構造は「太郎」と並列構造を構成している。そのゆえに、最初に「ものの結合の原理」に従い、定中構造「次郎の友達」の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \\ (172a-①) \text{アル'} \{ \text{V}^{\wedge} \text{持ツ'} (\text{次郎}, u), \text{友達} \} \& = ' (\text{友達}, u_n) \\ \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \quad \text{ヒシイ} \quad \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「次郎が u を持つという内包が「友達」という個体にあり外延化する、かつ、「友達」が u_n に等しい」と読む。

次に、「次郎の友達」は「太郎」と並列構造を構成し、並列の関係を表しているの
で、連言結合子「 \wedge 」を用いて、(172a)全体の論理式は次のように書ける。

(172a-②) 太郎 \wedge アル' { \vee 持ッ' (次郎, u), 友達} & = ' (友達, u_n)

この論理式は、「アル' { \vee 持ッ' (次郎, u), 友達} & = ' (友達, u_n)」が「次郎の友達」の意を表し、この論理式全体は「太郎と/次郎の友達」という意味を表している。この論理式によって、「太郎」が「次郎の友達」と並列されていることがわかる。

続いて(172b)の論理式を表記してみよう。ここでは、本論文の第4章で参照した朱徳熙の論点により解析しておこう。朱徳熙(1982: 157-158)は「並列構造を成分として成り立つ統語構造には二種のタイプがある。一つは並列成分を分解して別々に言い分けることのできるタイプである。たとえば、掛け算の分配律に符合するタイプである。即ち、 $(A+B) \times C = A \times C + B \times C$ 」と指摘している。この観点に従い、(172b)の意味は次のように理解できる。

(172b) 太郎と次郎の/友達 = 太郎の友達 + 次郎の友達

そのため、(172b)の論理式は次のように表記できる。

(172b-①) アル' { \vee 持ッ' (太郎, u), 友達} & = ' (友達, u_n)
 \wedge アル' { \vee 持ッ' (次郎, u), 友達} & = ' (友達, u_n)

この論理式は、「アル' { \vee 持ッ' (太郎, u), 友達} & = ' (友達, u_n)」が「太郎の友達」という意を表し、「アル' { \vee 持ッ' (次郎, u), 友達} & = ' (友達, u_n)」が「次郎の友達」という意を表している。そして(172b-①)の論理式全体は「太郎の友達と次郎の友達」という意味を示している。この論理式により、「太郎」が「次郎」と並列されて、ともに後ろの「友達」を修飾することがわかる。

もう一つの似た例を見られたい。

(173) 李さんと張さんの娘

(金京愛 2009: 43)

この例では、「李さん」が「張さん」と並列されているのか、「張さんの娘」と並列されているのかで多義性が生まれる。つまり、この例は次のような二つの意味を表すことが可能である。

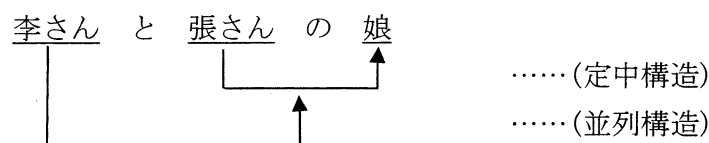
(173a) 李さんと/張さんの娘

(173b) 李さんと張さんの/娘

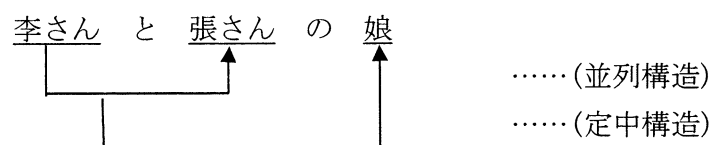
(173a)と(173b)は、同じ単語を同じ順序で配列しているが、異なる階層構造によっ

て、表す意味が違っている。両方の階層構造と構造関係をそれぞれ分析すると、次の〈図 6-7〉のようになる

(173a)の階層構造：



(173b)の階層構造：

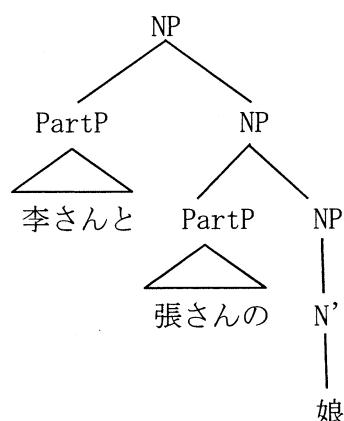


〈図 6-7：「李先生と張さんの娘」の階層構造と構造関係〉

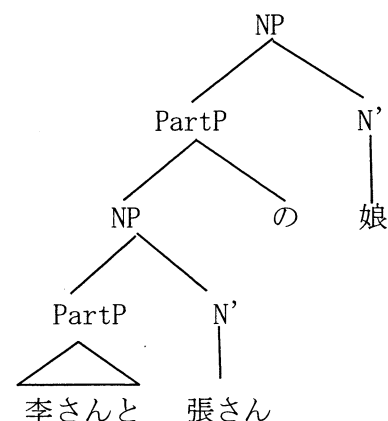
(173a)と(173b)の形式は全く同じであるが、統語上の階層構造は違うのである。(173a)では、まず「張さん」が限定語となり、「娘」を修飾し、定中構造を構成する。そして、この定中構造「張さんの娘」が「李先生」と組み合わせられて並列構造を構成している。つまり、(173a)全体は一つの並列構造の連語である。(173b)では、まず「李先生」は「張さん」と並列構造を構成し、この並列構造「李先生と張さん」が一緒に限定語になり、「娘」を修飾し、定中構造を構成している。つまり、(173b)全体は定中構造の連語である。

(173a)と(173b)の階層構造の違いは樹形図で表示すると、次の〈図 6-8〉となる。

(173a)の階層構造の樹形図：



(173b)の階層構造の樹形図：



〈図 6-8：「李先生と張さんの娘」の階層構造の樹形図〉

(173a)の樹形図では、まず助詞フレーズ「張さんの」は名詞「娘」と名詞フレーズ「張さんの娘」を生成し、そして、助詞フレーズ「李さんと」と一緒に名詞フレーズ「李さんと張さんの娘」を生成する。

(173b)の樹形図では、まず助詞フレーズ「李さんと」は名詞「張さん」と名詞フレーズ「李さんと張さん」を生成し、そして、格助詞「の」と助詞フレーズ「李さんと張さんの」を生成する。最後に名詞「娘」と結合し、名詞フレーズ「李さんと張さんの娘」を生成している。

次に、これまでと同様に論理表記しておこう。まず(173a)の論理式を書いてみよう。

(173a)はまず「張さんの娘」という定中構造を構成するので、最初に「ものの結合の原理」に従い、定中構造「張さんの娘」の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c} \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \\ (173a\text{-}\textcircled{1}) \text{アル}' \{ \text{V}^{\wedge} \text{イル}' (\text{張さん}, u), \text{娘} \} \&= ' (\text{娘}, u_n) \\ \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \quad \text{ヒソイ} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ニ} \end{array}$$

この論理式は「張さんに u がいるという内包が「娘」という個体にあり外延化する、かつ、「娘」が u_n に等しい」と読む。

次に、「張さんの娘」は「李さん」と並列構造を構成し、並列の関係を表しているので、連言結合子「 \wedge 」を用いて、(173a)全体の論理式は次のように書ける。

$$(173a\text{-}\textcircled{2}) \text{李さん} \wedge \text{アル}' \{ \text{V}^{\wedge} \text{イル}' (\text{張さん}, u), \text{娘} \} \&= ' (\text{娘}, u_n)$$

この論理式は、「アル' { V^{\wedge} イル' (張さん, u), 娘} &= ' (娘, u_n)」が「張さんの娘」の意を表し、この論理式全体は「李さんと/張さんの娘」という意味を表している。この論理式によって、「李さん」が「張さんの娘」と並列されていることがわかる。

次に、(173b)を論理表記しておこう。前述のように、朱德熙(1982 : 157-158)において述べた観点に基づき、(173b)の意味は次のように理解できる。

$$(173b) \text{李さんと張さんの/娘} = \text{李さんの娘} + \text{張さんの娘}$$

そのため、(173b)の論理式は次のように表記できる。

$$\begin{array}{l} (173b\text{-}\textcircled{1}) \text{アル}' \{ \text{V}^{\wedge} \text{イル}' (\text{李さん}, u), \text{娘} \} \&= ' (\text{娘}, u_n) \\ \wedge \text{アル}' \{ \text{V}^{\wedge} \text{イル}' (\text{張さん}, u), \text{娘} \} \&= ' (\text{娘}, u_n) \end{array}$$

この論理式は、「アル' { V^{\wedge} イル' (李さん, u), 娘} &= ' (娘, u_n)」が「李さんの娘」という意を表し、「アル' { V^{\wedge} イル' (張さん, u), 娘} &= ' (娘, u_n)」が「張さ

んの娘」という意を表している。そして(173b-①)の論理式全体は「李さんの娘と張さんの娘」という意味を示している。この論理式により、「李さん」が「張さん」と並列されて、ともに後ろの「娘」を修飾することがわかる。

(172)や(173)のような「名詞₁+と+名詞₂+の+名詞₃」という構造の多義構造では、意味的に成り立たない場合以外は、「名詞₁」の並列相手として「名詞₂」と「名詞₃」の二つの可能性がある。言い換えれば、複数の名詞がある並列構造と定中構造が同時に一つの文に存在する場合、限定語が全部の名詞にかかるのか、一部の名詞にかかるのか、という点に関して、多義性が生まれやすい。これを、先に結合する成分と成分を括弧に入れて示すと、次のようになる。

(174)a. 名詞₁+と+(名詞₂+の+名詞₃)

b. (名詞₁+と+名詞₂)+の+名詞₃

6.3.3 まとめ

本節では、野田尚史(2002)を参考にし、現代日本語の限定語による二つのタイプの多義構造について考察を行った。また、各用例に対し、命題論理と述語論理を併用した論理式を用いて、解析を行った。その結果、多義構造にある異なる意味の論理構造が明らかになった。

6.4 本章の結び

本章では、本論文で採用した分析方法を現代日本語の限定語に適用し、現代日本語の限定語の意味と論理構造の分析を試みた。

まず、寺村秀夫(1975-1978)の論点に基づいて、現代日本語の限定語を「内の関係の限定語」と「外の関係の限定語」に分けて、各用例を論理式で表記し、それぞれの論理構造を明示的に示した。

そして、現代日本語の限定語による多義構造について考察した。考察の対象としたのは、多義性を生みやすい「限定語+名詞₁+の+名詞₂」と「名詞₁+と+名詞₂+の+名詞₃」の二つの構造を含む多義構造である。用例を挙げて、それらの用例に存在する多義的な意味の論理構造が違っていることを論理式によって証明した。

結び

本研究は、まず現代中国語の限定語を研究対象として、先行研究を踏まえて、形式意味論の立場から論理式で表記し考察した。さらに、現代日本語の限定語についても先行研究を参照して、演繹的手法で考察した。最後に各章の要点をまとめておこう。

第1章では、まず、現代中国語の限定語に関する研究を限定語の全貌がわかる四つの先駆的研究を取り上げて考察した。現代中国語の限定語に対する多角的な研究については、本研究が参考とした「限定語の分類」、「限定語の多義表現」、「限定語の意味指示」の三つの視点から行う代表的な研究を紹介した。

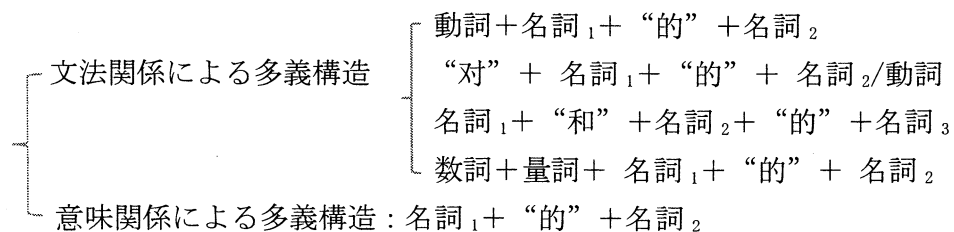
第2章では、本研究で用いる形式意味論の基本的な考え方と方法を述べた。第1節では、「命題論理」と「述語論理」及び「命題と可能世界」について説明した。第2節では、具体的な中国語の例文を用いて、形式意味論における意味規定の方法とモデル理論について説明し、統語分析、翻訳、意味解釈というプロセスを示した。第3節では、内包と外延の基本的な考え方について述べた。

第3章では、丁声树等(1961)の分類方法をもとに、邢福义(1996)と朱德熙(1982)の観点も参考にし、限定語を「一般性限定語」、「所属性限定語」と「同一性限定語」の三つに大別して、形式意味論の立場からこの三種の限定語の意味類型について詳細に分析した。

分析する時、各種類の限定語について、論理式を用いて、それぞれ明示的に記述した。限定語と中心語は恣意的に結びついているのではなく、この二つの成分が意味的に結びつく動機を論理式で明示的に示した。最後に、すべての限定語と中心語の意味関係を明示できる基本的な論理構造の一般化された表示をまとめ、以下のように表すことができる。次の(1)の論理式の末尾の“在”($u_n, \vee \wedge \phi$)”が u_n が事態の中に存在することを示している。

$$(1) \text{在} (\vee \wedge \phi, v) \&= (v, u_n) \&\text{在} (u_n, \vee \wedge \phi)$$

第4章においては、現代中国語における限定語による多義構造について考察を行った。邵敬敏(1999)の分類方法を参考にし、朱华丽(2009)の提出した現代中国語の限定語に関わる六種類の多義構造を次のように再分類して分析した。



多くの実例と論理式によって、文法的な組合せの多義構造は統語上の階層構造とそ

の階層構造の間の関係の違いにより多義性を生み出し、意味的な組合せの多義構造は限定語と中心語の間の意味関係の違いによって多義を生じること、また、同じ表現であっても、異なる意味を表すときには、論理構造が違っていることを明示した。

第5章では、現代中国語の限定語の意味指示について「直接的な意味指示」と「間接的な意味指示」に分類し論じた。分析の結果は次のようにまとめられる。

現代中国語における限定語の「直接的な意味指示」は、統語上、限定語が中心語を修飾し、直接の成分関係を構成する。意味上、論理式によって、限定語が関数“X'”となり、中心語がその関数の項“ α ”になり、直接的に次のように、一つの命題を構成することができるので、限定語は中心語を意味指示し、直接的な意味関係を持つことが証明された。

(2) X' (α)

それに対して、現代中国語の限定語の「間接的な意味指示」については、論理式によって、いずれの種類も、限定語は直接に中心語と一つの命題を構成せず、文のほかの成分と命題を構成し、連鎖関係により中心語と間接的に関わるということがわかった。

第6章においては、現代日本語の限定語に関する先行研究に基づき、前の各章で現代中国語の限定語を考察した際に用いられた形式意味論の分析方法を現代日本語の限定語に適用し、現代日本語の限定語の意味と論理構造を考察した。

第1節では、現代日本語の限定語を「内の関係の限定語」と「外の関係の限定語」に分けて分析し、それぞれの限定語と中心語の間の意味関係を論理式によって明示した。「内の関係の限定語」は、中心語が連鎖関係によって、限定語と一つの命題を構成できるので、限定語と中心語の間に一定の格関係を持つ。また、「外の関係の限定語」は、中心語が限定語と一つの命題を構成できず、限定語と中心語の間に格関係は存在しない、ということである。

第2節では、現代日本語において多義性を生みやすい「限定語₁+の+名詞₂」と「名詞₁+と+名詞₂+の+名詞₃」の二つの構造を含む多義構造について詳述した。ここでも、論理式による解析を行い、用例に存在する多義の意味を厳密に表記した。

形式意味論の分析方法は、中国語文法の研究に適用できるだけではない。日本語文法の研究にも有効であると思う。特に命題論理と述語論理を併用した論理式は、中国語だけではなく、日本語の文の構造、意味及び文成分の間の結びつきを明示している。従って、日本語の研究や教育にも役立つと考える。

なお、本研究は主に現代中国語の限定語の意味と論理について考察したが、現代日本語の限定語の意味と論理にも触れた。しかし、ここではまだ多くの問題が残っている。例えば、

- ①現代中国語における多重限定語の意味指示
- ②現代日本語における限定語の意味指示

③現代日本語における「名詞₁＋の＋名詞₂」多義構造の考察
などがある。これらの問題は今後の課題としたいと思う。

表一覧

表 1-1 : 朱德熙(1982)による限定語と限定語マーカー“的”の関係	pp. 4-5
表 1-2 : 马真(2001)による限定語になれる語句	p. 9
表 1-3 : 徐仲华(1979)による限定語と関係がある多義構造	p. 12
表 2-1 : 連言「&」の真理値表	p. 18
表 2-2 : 可能世界の真理値表	p. 20
表 4-1 : 朱华丽(2009)による現代中国語の限定語の多義構造	p. 76

図一覧

図 1-1 : 邢福义(1996)による限定語の意味類型の分類	p. 7
図 2-1 : 命題 p , q , $p \& q$ の可能世界から真理値への関数	p. 21
図 2-2 : 形式意味論による自然言語の意味解釈のアプローチ	p. 22
図 2-3 : 言語表現と形式意味論における内包と外延の対応関係	p. 29
図 4-1 : 邵敬敏(1999)による現代中国語の多義類型	p. 74
図 4-2 : 本論文における現代中国語の限定語の多義構造	p. 76
図 4-3 : “咬死了猎人的狗”の階層構造と構造関係	p. 77
図 4-4 : “咬死了猎人的狗”の階層構造の樹形図	p. 78
図 4-5 : “关心留学生的老师”の階層構造と構造関係	p. 80
図 4-6 : “关心留学生的老师”の階層構造の樹形図	p. 81
図 4-7 : “对领导的意见”の階層構造と構造関係	p. 83
図 4-8 : “对领导的意见”の階層構造の樹形図	p. 84
図 4-9 : “对孩子们的态度”の階層構造と構造関係	p. 86
図 4-10 : “对孩子们的态度”の階層構造の樹形図	p. 86
図 4-11 : “对王主任的误解”の階層構造と構造関係	p. 89
図 4-12 : “对王主任的误解”の階層構造の樹形図	p. 89
図 4-13 : “哥哥和弟弟的朋友”の階層構造と構造関係	p. 92
図 4-14 : “哥哥和弟弟的朋友”の階層構造の樹形図	p. 92
図 4-15 : “车票和零用的钱”の階層構造と構造関係	p. 94
図 4-16 : “车票和零用的钱”の階層構造の樹形図	p. 95
図 4-17 : “一个工人的建议”の階層構造と構造関係	p. 97
図 4-18 : “一个工人的建议”の階層構造の樹形図	p. 97
図 4-19 : “两个学生的家长”の階層構造と構造関係	p. 99
図 4-20 : “两个学生的家长”の階層構造の樹形図	p. 100
図 5-1 : 本研究による現代中国語の限定語の意味指示の分類	p. 116
図 5-2 : “我要好好地逛一逛美丽的西湖”の統語関係と意味関係	p. 118
図 5-3 : “人民经受了严峻的考验”の統語関係と意味関係	p. 119

図 5-4 : “反对者遭到了强烈的镇压” の統語関係と意味関係	p. 120
図 5-5 : 限定語の直接的な意味指示の統語関係と意味関係	p. 120
図 5-6 : “我过了一个愉快的暑假” の統語関係と意味関係	p. 123
図 5-7 : “他做了一个惬意的梦” の統語関係と意味関係	p. 126
図 5-8 : “学校给你们一个满意的答复” の統語関係と意味関係	p. 128
図 5-9 : “它给祥子顺心的帮助” の統語関係と意味関係	p. 130
図 5-10 : “(父亲)给我取讨厌的名字” の統語関係と意味関係	p. 132
図 5-11 : “陈小平看了一天的书” の統語関係と意味関係	p. 134
図 5-12 : “孙静等了一上午的电话” の統語関係と意味関係	p. 136
図 5-13 : “那是一个幸福的雨夜” の統語関係と意味関係	p. 139
図 5-14 : “店内外充满了快活的空气” の統語関係と意味関係	p. 141
図 6-1 : 「有名な学校の先生」 の階層構造と構造関係	p. 158
図 6-2 : 「有名な学校の先生」 の階層構造の樹形図	p. 159
図 6-3 : 「美しい花子の娘」 の階層構造と構造関係	p. 161
図 6-4 : 「美しい花子の娘」 の階層構造の樹形図	p. 162
図 6-5 : 「太郎と次郎の友達」 の階層構造と構造関係	p. 164
図 6-6 : 「太郎と次郎の友達」 の階層構造の樹形図	p. 165
図 6-7 : 「李さんと張さんの娘」 の階層構造と構造関係	p. 167
図 6-8 : 「李さんと張さんの娘」 の階層構造の樹形図	p. 167

注釈

序論

1. 「定中構造(“定中结构”)」という術語は中国語文法の専門用語である。「定」は「限定語」の略称、「中」は「中心語」の略称である。限定語は中心語を修飾・限定する働きをする。限定語は修飾成分であり、中心語は被修飾成分である。他に、「偏正構造(“偏正结构”)」や「定心構造(“定心结构”)」という呼び方もある。このような統語構造は、日本語文法においては「連体修飾構造」と称し、英語文法においては「Attributive-centered structure(または Modifier-head structure)」と呼んでいる。

第1章

2. 本論文における引用例の日本語訳は特別明示しない限り全て筆者訳である。
3. 本章における引用例の下線は全て筆者によるものである。
4. ただし、この点について、朱德熙(1982)は二つの例外を述べた。一つは、数量詞が限定語になる場合、数量詞は“的”を伴わないが、“的”を伴う限定語の前に置くことができる。例えば、“一间最大的屋子(一つの一番大きな部屋)”。もう一つは、所属性限定語は後ろには置かず、前にしか置けない。例えば、“他最大的孩子(彼の一番上の子供)”。

第3章

5. 朱德熙(1982: 48-50)は「以上六種の量詞(個体量詞、集合量詞、度量詞、不定量量詞、臨時量詞、準量詞)は数詞と組み合した後、よく名詞の修飾語になり、事物の数量を表すので、まとめて名量詞と呼ぶ。」のように、「名量詞」の定義をした。
6. 命題論理(Propositional logic)は、形式意味論で用いられる基本的な方法論の一つであり、命題と命題の論理的関係を扱う。文と文の間の論理関係は、連言、選言、含意、同値、否定などの結合子によって決定される。これらの表記には、「&」、「V」、「→」、「⇔」、「¬」などの記号が使われる。
7. 述語論理(Predicate logic)は、命題の内容(文の内部構造)を意味論的に分析する論理言語である。基本的には命題を述語(predicate)と述語の要求する項(argument)の組み合わせとして記述する。項の数により、一項述語、二項述語、三項述語のように呼ぶ。
8. 本章の論理式における括弧は“()”、“{ }”、“[]”、“【 】”の四つを使う。そして“()”が最も作用域(scope)が狭く、“【 】”が最も作用域が広いとする。すなわち下記の(a)のように考える。
(a) () < { } < [] < 【 】
(a)は“()”は“{ }”より作用域が狭く、“{ }”は“[]”より作用域が狭く、“[]”は“【 】”より作用域が狭いことを表している。
9. “=’ (马, u_n)”の中の「 u_n 」の下付きの「n」はもともと可能世界の「 w_n 」を表すので「 w_n 」と書いたほうがよいが、入力 of 便宜をはかるために、「w」を省略し、「n」

だけを添え字として使うことにする。本論文のほかの論理式も同様に取り扱う。

10. 朱德熙(1982 : 43)は「時間詞」について、「時間詞とは、“在”“到”“等到”の目的語になり、且つ“这个时候”“那个时候”を用いて指示することのできる体詞である」と述べている。

11. 「譲渡可能所有関係」と「譲渡不可能所有関係」に関する議論については、李绍群(2011 : 20-21、38-40)を参照。

第4章

12. 朱德熙(1978 : 23)は「“双向动词(二項動詞)”とは、二個の名詞性成分と関わりを生じうる動詞を二項動詞と呼ぶ。」と述べている。

13. 朱德熙(1980 : 82)は「“V²+的+是+N”という構造に基づいて作った文は必ずしもすべて多義性を有するわけではない。例えば、

(1) 发明的是一个青年工人(発明したのは一人の青年労働者である)

(2) 关心的是分数(関心を寄せられるのは点数である)

(3) 反对的是战争(反対されるのは戦争である)

最初の文の“发明的”は動作主と理解しうるのみである。後の二文の“关心的”と“反对的”は受動者と理解しうるのみである。これはこれらの文を構成する語が意味上相互に制約し合い、構造に存在する多義性を生み出す可能性を取り除いたからである。」と述べている。

14. 朱德熙(1980 : 82)は「次のことばには多義性はない。それは語の意味が相互に制約しあい、多義性を生み出す可能性を排除するからである。」と述べた。具体的な例としては以下のような文がある。

(4) 木头的房子(木の家)

(5) 书的封面(本の表紙)

15. 何元建(2011 : 117)は、「文も名詞の修飾語になることができる。構成された構造は複雑な名詞フレーズ(“复杂的名词短语” complex NPs)と呼ぶ。通常、名詞を修飾できる文の形式は二つある。一つは関係節(“关系语句” relative clause)であり、もう一つは同格節(“同位语句” appositive clause)である。」と述べている。

第5章

16. 文炼(1960 : 73-78)は「同じ形式は異なる意味を表すことができ、同じ意味は異なる形式で表現することもできる。この原則は中国語にも適用される。」と述べている。

17. 张国宪(1991 : 13-16)は、「統語上直接成分関係を持ち、また、意味上も直接関連を持っている状況を“语义同指”(相同意味指示)と呼ぶ。」と述べている。

18. 松村文芳(2017 : 47-48)は、「命題Aと命題Bが連言の論理結合子で結ばれる時、命題Aの末尾の項が命題Bの第一項と同一の場合、命題Aを命題Bに先行させ、このような技法を演繹モデルと呼ぶ。また命題Aの末尾の項と命題Bの第一項との間には

連鎖関係があるということにする。」と述べている。

19. 张国宪(1991:13-16)は、「我々は統語上直接成分関係を持っているが、意味上直接成分の間に関わりを持たず、非直接成分としか直接的な関係を持たない状況を“语义异指”(相違意味指示)と呼ぶ。」と述べている。

第6章

20. 引用のページ番号は寺村秀夫(1992)によるものである。以下同様。

21. 引用のページ番号は高橋太郎(1994)によるものである。以下同様。

22. 西山佑司(2003b:33)では、「非飽和名詞」とは、『Xの』というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延(extension)を決めることができず、意味的に充足していない名詞」のように定義される。

23. 「多義」という用語は中国語文法の用語であり、現代日本語では、通常「あいまい」「両義」「紛らわしさ」などと呼んでいる。本章は前の各章と統一するために、「多義」という用語を用いることにする。

参考文献

〈中国語文献〉

- 北京大学中文系现代汉语教研室编 1993.《现代汉语》。北京：商务印书馆。
- 蔡淑美 2010.〈特殊与格结构“V+X+的+O”的语义性质和句法结构〉，《世界汉语教学》第3期。
- 崔应贤 2002.《现代汉语定语的语序认知研究》。北京：中国社会科学出版社。
- 丁凌云 1999.〈定语语义指向分析〉，《安徽教育学院学报》（哲学社会科学版）第2期。
- 丁声树等 1961.《现代汉语语法讲话》。北京：商务印书馆。
- 房玉清 1992.《实用汉语语法》。北京：北京语言学院出版社。
- 傅远碧 2001.〈定语的类型〉，《绵阳师范高等专科学校学报》第4期。
- 何元建 2011.《现代汉语生成语法》。北京：北京大学出版社。
- 黄伯荣、廖序东 1991.《现代汉语》。北京：高等教育出版社。
- 黄国营 1981.〈伪定语和准定语〉，《语言教学与研究》第4期。
- 胡裕树、文炼 1982.〈句子分析漫谈〉，《中国语文》第3期。
- 胡裕树、范晓 1985.〈试论语法研究的三个平面〉，《新疆师范大学学报》第2期。
- 胡裕树主编 1979.《现代汉语》香港：商务印书馆香港分馆。
- 范晓、胡裕树 1992.〈有关语法研究三个平面的几个问题〉，《中国语文》第4期。
- 蒋静忠 2008.〈形容词定语的语义指向与判定方法〉，《汉语学报》第1期。
- 蒋严、潘海华 1998.《形式语义学引论》。北京：中国社会科学出版社。
- 峻峡 1990.〈间接修饰定语试探〉，《河北大学学报》第1期。
- 李临定 1963.〈带“得”字的补语句〉，《中国语文》第5期。
- 李 敏 1996.〈定语的语义指向试析〉，《语法知识》第7期。
- 1997.〈关于定语的几个问题〉，《烟台师范学院学报》第2期。
- 李素秋 2009.〈现代汉语定语研究综述〉，《山西大学学报（哲学社会科学版）》第1期。
- 李绍群 2011.《现代汉语“名₁+（的）+名₂”定中结构研究》。厦门：厦门大学出版社。
- 林祥楣主编 1991.《现代汉语》。北京：语文出版社。
- 刘宁生 1984.〈句首介词结构“在……”的语义指向〉，《汉语学习》第2期。
- 刘顺 1998.〈“对”字短语作定语的歧义问题〉，《汉语学习》第6期。
- 刘艳丽 2011.〈对现代汉语定语分类的思考〉，《剑南文学》2011年11月。
- 刘月华等 2001.《实用现代汉语语法（增订版）》。北京：商务印书馆。
- 陆俭明 1980.〈汉语口语句法里的易位现象〉，《中国语文》第1期。
- 1996.〈关于语义指向分析〉，《当代中国语言学》。总第1期。
- 2005.《现代汉语语法研究教程（第三版）》。北京：北京大学出版社。
- 吕叔湘 1979.《汉语语法分析问题》。北京：商务印书馆。
- 1982（1956年初版）。《中国文法要略》。北京：商务印书馆。
- 1984.〈歧义类型〉，《中国语文》第5期。
- 陆丙甫 1988.〈定语的外延性、内涵性和称谓性及其顺序〉，《语法研究和探索（四）》。北

京:北京大学出版社。

- 卢英顺 1995. 〈语义指向研究漫谈〉,《世界汉语教学》第3期。
- 马真 2001. 《现代汉语语法》。香港:明窗出版社。
- 孟燕 2004. 《定语的语义、语用研究》。山东大学硕士学位论文。
- 彭玉兰 2001. 〈定语的语义指向〉,《徐州师范大学学报(哲学社会科学版)》2001年6月。
- 钱乃荣主编 1995. 《汉语语言学》。北京:北京语言学院出版社。
- 沈开木 1983. 〈表示“异中有同”的“也”字独用的探索〉,《中国语文》第1期。
- 1996. 〈论“语义指向”〉,《华南师范大学学报》第6期。
- 邵敬敏编 2007. 《现代汉语通论》。上海:上海教育出版社。
- 邵敬敏 1991. 〈歧义分化方法探讨〉,《语言教学与研究》第1期。
- 1999. 〈歧义—语法研究的突破口〉,《语法研究入门》。北京:商务印书馆。
- 税昌锡 2004. 〈语义指向分析的发展历程与研究展望〉,《语言教学与研究》第1期。
- 田宗燕 2011. 〈定语的语义指向及作用〉,《语言应用研究》。2011年6月。
- 王艾录 1985. 〈非区别性的定语〉,《语文研究》第3期。
- 王红旗 1997. 〈论语义指向分析产生的原因〉,《山东师范大学学报》第1期。
- 王进安 2005. 〈定语的语义指向及表述功能的差异〉,《集美大学学报(哲学社会科学版)》。
- 第4期。
- 王金鑫 2004. 〈情感形容词语义指向研究〉,《第十三次现代汉语语法学术讨论会论文集》
- 2004年11月。
- 王理嘉、陆俭明等编 1993. 《现代汉语》。北京:商务印书馆。
- 文炼 1960. 〈论语法学中“形式和意义相结合”的原则〉,《上海师范学院学报》第2期。
- 萧国政 1986. 〈隐蔽性施事定语〉,《语文研究》第4期。
- 邢福义 1962. 〈关于副词修饰名词〉,《中国语文》第5期。
- 1996. 《汉语语法学》。长春:东北师范大学出版社。
- 徐仲华 1979. 〈汉语书面语言歧义现象举例〉,《中国语文》第5期。
- 杨淑芳 2003. 《定语语义分析》。北京首都师范大学硕士论文。
- 袁毓林 1995. 〈谓词隐含及其句法后果——“的”字结构的称代规则和“的”的语法、语义功能〉,《中国语文》第4期。
- 张宝胜 2002. 〈配价语法和“对N的X”短语的歧义问题〉,《河南大学学报(社会科学版)》
- 2002年9月。
- 张伯江 1993. 〈N的V结构的构成〉,《中国语文》第4期。
- 1994. 〈领属结构的语义构成〉,《语言教学与研究》第2期。
- 张国宪 1991. 〈谓词状语语义指向浅说〉,《汉语学习》第2期。
- 赵世举 2001. 〈定语的语义指向试探〉,《襄樊学院学报》第1期。
- 赵元任(吕叔湘译)1979. 《汉语口语语法》。北京:商务印书馆。
- 周 刚 1998. 〈语义指向分析刍议〉,《语文研究》第3期。
- 周国光 2006. 〈试论语义指向分析的原则和方法〉,《语言科学》第4期。
- 朱德熙 1962. 〈论句法结构〉,《中国语文》8、9月号。

- 1980. 〈汉语句法里的歧义现象〉,《中国语文》第2期。
- 1982.《语法讲义》。北京:商务印书馆。
- 1984.《定语和状语》。上海:上海教育出版社。
- 1985.《语法答问》。北京:商务印书馆。
- 朱华丽 2009.《汉语定语的语义指向研究与教学》。广西大学硕士论文。

〈日本語文献〉

- 施建軍 1997.「日本語曖昧文の構造について—自然言語処理の立場から」、『日本学研究』第9号:北京日本学研究中心編。
- 井上和子 1976.『変形文法と日本語』。東京:大修館書店。
- ウィトゲンシュタイン 1918(野矢茂樹訳 2003).『論理哲学論考』。東京:岩波書店。
- 大島資生 2003.「連体修飾の構造」、『朝倉日本語講座5 文法Ⅰ』。東京:朝倉書店。
- 2010.『日本語連体修飾節構造の研究』。東京:ひつじ書房。
- 奥津敬一郎 1974.『生成日本文法論』。東京:大修館書店。
- 加藤重広 2003.『日本語修飾構造の語用論的研究』。東京:ひつじ書房。
- 金京愛 2009.『日本語の「あいまい文」の構造について』。南京農業大学修士論文。
- 金水敏 1986.「連体修飾成分の機能」、『松村明教授古稀記念国語研究論集』。東京:明治書院
- 草薙裕 1991.『日本語はおもしろい—考え方・教え方・学び方』。東京:講談社。
- 杉村博文 1994.『中国語文法教室』。東京:大修館書店。
- 杉村博文、木村英樹 1995.『文法講義—朱徳熙教授の中国語文法要説—』。東京:白帝社。
- 杉本孝司 1998.『意味論Ⅰ—形式意味論—』。東京:くろしお出版。
- 高橋太郎 1979.「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」、『言語の研究』言語学研究会編。(高橋太郎(1994)に再録)
- 1994.『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』。東京:むぎ書房。
- 寺村秀夫 1975-1978.「連体修飾のシンタクスと意味(1)-(4)」、『日本語・日本文化』(4-7),大阪外国語大学留学生別科。(寺村秀夫(1992)に再録)
- 1991.『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京:くろしお出版。
- 1993.『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』東京:くろしお出版。
- 西山佑司 2003a.「名詞句の諸相」、『朝倉日本語講座5 文法Ⅰ』。東京:朝倉書店。
- 2003b.『日本語名詞句の意味論と語用論:指示的名詞句と非指示的名詞句』。東京:ひつじ書房。
- 日本語教育学会編 2005.『日本語教育事典(新版)』。東京:大修館書店。
- 日本語文法学会編 2014.『日本語文法事典』。東京:大修館書店。
- 野田尚史 2002.「日本語のあいまい文」『日本ファジィ学会誌』Vol.14。
- 野矢茂樹 2006.『ウィトゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』。東京:筑摩書房。

- 古田徹也 2019. 『ウィトゲンシュタイン論理哲学論考』。東京：KADOKAWA。
- 松村文芳 2017、2018. 講義ノート：神奈川大学大学院中国語学特殊研究Ⅲa/b。
- 2017. 『現代中国語の意味論序説』。東京：ひつじ書房。
- 森田良行 2002. 『日本語文法の発想』。東京：ひつじ書房。
- 南不二男 1974. 『現代日本語の構造』。東京：大修館書店。